岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第364集

堀切遺跡発掘調査報告書

担い手育成基盤整備事業一関第３地区関連遺跡発掘調査

㈶岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

堀切遺跡発掘調査報告書

担い手育成基盤整備事業一関第３地区関連遺跡発掘調査

序

豊かな自然に恵まれた岩手県には、縄文時代をはじめとする数多くの遺跡や重要な文化財が残されております。これら多くの先人たちの創造してきた文化遺産を保存し、後世に伝えていくことは、県民一人一人に課せられた責務であります。

一方では、地域開発に伴う社会資本の充実も重要な施策であります。発掘により遺跡が消滅することはまことに惜しいことではありますが、反面、それまで闇につつまれていた先人の営みに光明があたるのも事実であります。

このような埋蔵文化財の保護・保存と開発との調和も今日的課題であり、財団法人岩手県文化振興事業団は埋蔵文化財センターの創設以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、記録保存する処置をとって参りました。

本報告書は、岩手県一関地方振興局一関農村整備事務所による担い手育成基盤整備事業一関第3地区に関連して、平成11年度に発掘調査を実施した一関市舞川字堀切に所在する堀切遺跡の調査報告をまとめたものです。

堀切遺跡は、北上山地と奥羽山脈に挟まれた北上盆地の南端、一関市の東を流れる北上川によって形成された河岸段丘に立地しており、今回の調査の結果、平安時代の竪穴住居をはじめとして、土坑や掘立柱建物跡、縄文時代前期の土器や平安時代の土師器・須恵器が多数出土し、当地方の歴史を解明する上で貴重な資料を提供することができました。

この報告書が広く活用され、考古学の研究に寄与するのみならず、埋蔵文化財に対する関心と理解を深める一助となれば幸いです。

最後になりましたが、これまでの発掘調査及び本報告書の作成に御援助と御協力を賜りました岩手県一関地方振興局農村整備事務所や一関教育委員会をはじめとする多くの関係機関、関係各位に心から感謝申し上げます。

平成13年 3 月

財団法人　岩手県文化振興事業団

理事長　千　葉　浩　一

例　　言

1　本報告書は、一関市舞川字堀切７－６ほかに所在する堀切遺跡の発掘調査結果を収録したものである。

2　本遺跡の発掘調査は、「担い手育成基盤整備事業一関第３地区」に伴い、岩手県教育委員会と一関地方振興局一関農村整備事務所との協議を経て、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが記録保存を目的として実施した緊急発掘調査である。

3　本遺跡の調査成果の一部は、平成11年度分の岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第340集「岩手県埋蔵文化財調査略報」に公表したが、本書の内容を正式な報告とする。

4　岩手県遺跡台帳に登録されている遺跡番号及び調査略号は、以下の通りである。

　遺跡番号　　ＮＥ87－0182

　調査略号　　ＨＫ－99

5　発掘調査期間、調査面積、調査担当者は、以下の通りである。

　調査期間　　平成11年10月１日～11月５日

　調査面積　　1,000㎡

　調査担当者　小野寺正之・佐藤淳一

6　室内整理期間および室内整担当者は、以下の通りである。

　整理期間　　平成12年２月１日～平成12年３月31日

　整理担当者　小野寺正之・佐藤淳一

7　本報告書の執筆は、小野寺正之が担当した。

8　遺物の分析・鑑定及び委託業務は、以下の方々に依頼した。（敬称略）

　石質鑑定　　花崗岩研究会

　基準点測量　（株）東日本コンサルタント

9　発掘・整理・本報告書の作成にあたっては、以下の方々に御教示・御協力をいただいた。（敬称略）

　一関市教育委員会

　財団法人水沢文化振興財団水沢市埋蔵文化財調査センター

　一関市を始めとする地元の方々と室内作業員

10　土層および土器の色調観察には『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局 監修、財団法人日本色彩研究所 色票監修 1989）を参考にした。

11　本報告書に掲載した地図等には、図中に図幅名と縮尺を記した。

12　本報告書に掲載されている実測図に使用した記号やスクリーントーン等の内容は、Ⅲ　調査方法と室内整理に凡例を示した。

13　本遺跡から出土した遺物および調査に関わる資料は、財団法人岩手県文化振興事業団岩手県埋蔵文化財センターが保管している。

目　　次

序
例　言
目　次

［本文目次］

Ⅰ　調査に至る経過……1
Ⅱ　遺跡の立地と環境……3
　1　位置……3
　2　地形・地理的環境……3
　3　周辺の遺跡……6
　4　遺跡の基本層序と状況……10
Ⅲ　調査方法と室内整理……11
　1　野外調査……11
　2　室内整理……12
Ⅳ　調査結果……14
　1　検出された遺構……14
　（1）1号住居跡……14
　（2）2号住居跡……14
　（3）3号住居跡……15
　（4）掘立柱建物跡……15
　（5）1号土坑……16
　（6）溝跡……16
　（7）柱穴状土坑……17
　2　出土遺物……26
　（1）分類について……26
　（2）遺構内出土遺物……26
　（3）遺構外出土遺物……34
Ⅴ　調査のまとめ……40
　1　検出された遺構について……40
　（1）竪穴住居跡……40
　（2）掘立柱建物跡……42
　（3）1号土坑……42
　（4）溝跡……42
　（5）柱穴状土坑……42

2　出土遺物について……43
（1）縄文土器……43
（2）土師器……43
（3）須恵器……44
（4）線刻文字について……45
3　おわりに……46
引用・参考文献……47
報告書抄録……66
職員一覧……67

［図版目次］

第1図　岩手県全図と遺跡の位置……2
第2図　遺跡位置図……4
第3図　地形分類図……5
第4図　傾斜分類図……5
第5図　周辺の遺跡分布図……7
第6図　遺構配置図……13
第7図　柱穴状土坑配置図……19
第8図　1号住居……21
第9図　2号住居……22
第10図　3号住居……23
第11図　掘立柱建物跡・1号土坑・4号溝……24
第12図　1～3号溝……25
第13図　遺構内出土遺物（1）……28
第14図　遺構内出土遺物（2）……29
第15図　遺構内出土遺物（3）……30
第16図　遺構内出土遺物（4）……31
第17図　遺構外出土遺物（1）……35
第18図　遺構外出土遺物（2）……36
第19図　遺構外出土遺物（3）……37
第20図　遺構外出土遺物（4）……38

［写真図版］

図版1　調査区遠景・全景……51
図版2　調査開始時・作業風景・基本土層……52
図版3　1号住居跡……53
図版4　2号住居跡……54
図版5　3号住居跡（1）……55
図版6　3号住居跡（2）・1号土坑……56
図版7　掘立柱建物跡・1号溝……57
図版8　2～4号溝……58
図版9　遺構内出土遺物（1）……59
図版10　遺構内出土遺物（2）……60
図版11　遺構内出土遺物（3）……61
図版12　遺構内出土遺物（4）……62
図版13　遺構外出土遺物（1）……63
図版14　遺構外出土遺物（2）……64
図版15　遺構外出土遺物（3）……65

［ 表 ］

第1表　周辺の遺跡……9
第2表　柱穴状土坑観察表……18
第3表　遺構内出土遺物観察表……32
第4表　遺構外出土遺物観察表……39

Ⅰ　調査に至る経過

堀切遺跡は、「担い手育成基盤整備事業一関第３地区」の施工に伴って、その事業区域に位置することから、発掘調査することとなったものである。

「担い手育成基盤整備事業一関第３地区」は、一関舞川地区に位置する受益面積124haの地区で、昭和33年から38年頃10a区画に整理されたが、区画形状が小さく農道の幅員も狭いなど、大型機械化体系の導入に支障を来している。また、水路は土水路で用排水兼用となっているため浅く、排水不良地帯が大部分を占めており、耕地の汎用化が困難な状況にある。

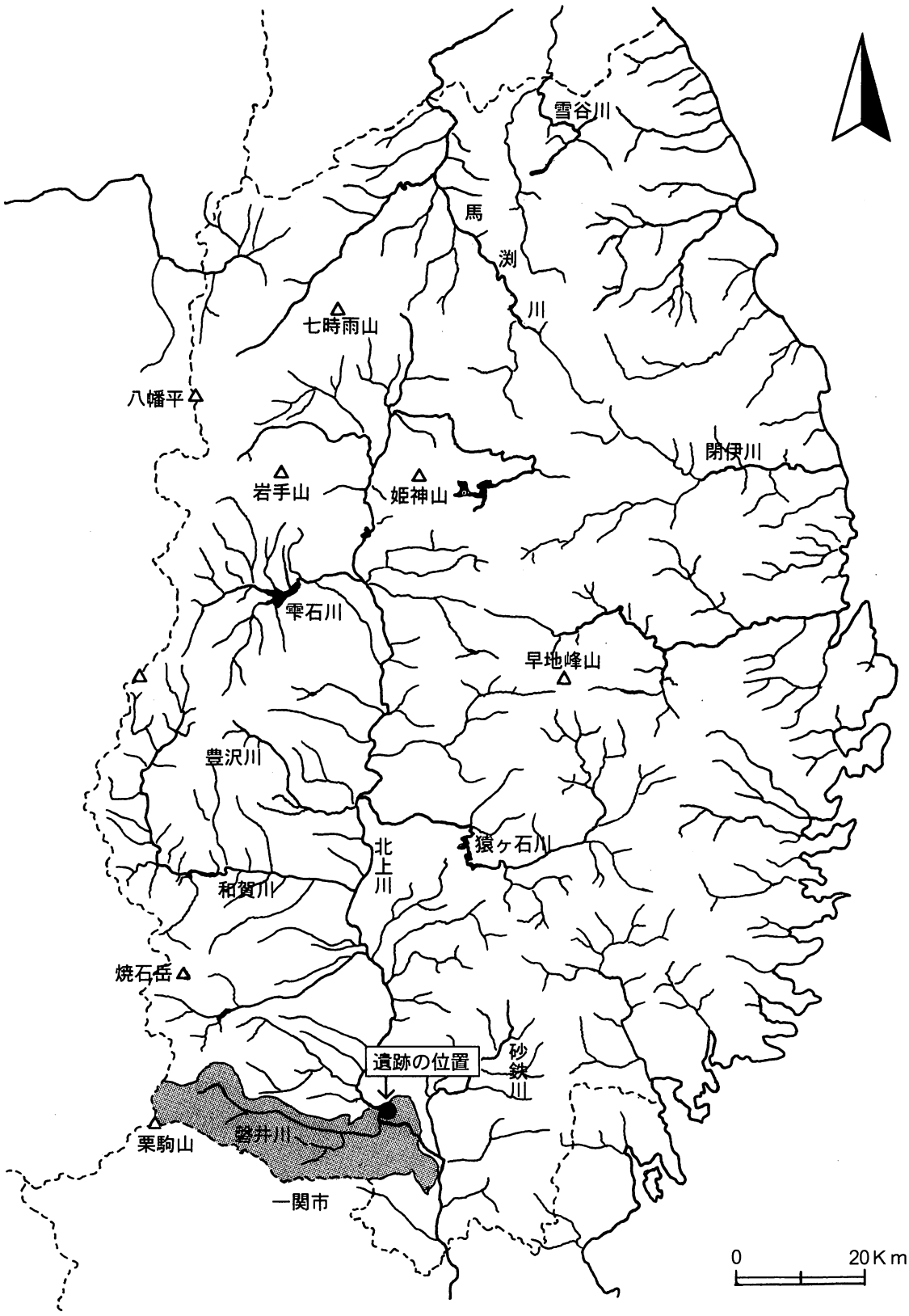
これらの阻害要因を除去し、効率的かつ安定的な経営体に農地を集積し高生産性農業の確立を図り、併せて農村環境水準の向上に資するために、大区画ほ場整備を実施するものとして平成８年度新規採択された地区であり、平成11年で４年目となる。

当事業の施行に係わる埋蔵文化財の取扱いについては、一関地方振興局一関農村整備事業所から平成10年10月21日付け一地整第423号「農業農村整備事業における埋蔵文化財の試掘調査について（依頼）」により、岩手県教育委員会に対し試掘調査依頼を行ったところである。依頼を受けた岩手県教育委員会では、平成10年11月９日から10日に試掘調査を実施し、平成10年11月24日付け教文第903号「ほ場整備事業（一関第３地区）に係る埋蔵文化財の試掘調査について」で回答を受け、堀切遺跡については埋蔵文化財が確認される箇所があり、その保護方法については別途協議となった。

平成11年３月２日付け教文第1251号「平成11年度埋蔵文化財発掘調査事業について（通知）」が岩手県教育長より通知があり、発掘調査を実施することとなる。平成11年９月30日（財）岩手県文化振興事業団と発掘調査委託契約書を交わし、発掘調査を実施したところである。

実際の発掘調査は、平成11年10月１日～11月５日まで。報告書作成のための整理期間は、平成12年２月１日～３月31日までである。

（一関農村整備事務所）



第１図　岩手県全図と遺跡の位置

Ⅱ　遺跡の立地と環境

1　位　置

堀切遺跡は、一関市舞川字堀切７－６ほかに所在し、一関市の東にあたる舞川地区の北西に位置し、平泉町との町境に近い。東日本旅客鉄道株式会社・東北本線一関駅から北北東に約5.1㎞、東北新幹線の路線から北上川を挟んだ東方約1.5㎞に位置し、北上川の左岸に形成発達した緩やかな河岸段丘上に立地している。調査区の標高は約21ｍで、北上川までの距離が約20ｍと近く、北上川の水位に近い高さである。北約4.0㎞には束稲山塊に属する標高325ｍの観音山を、その奥約5.0㎞北には標高595ｍの束稲山を望む。西には、北上川とそれに連なる北上河谷帯の南端部が広がり、南は一関の市街地にあたる。東は舞川地区を過ぎ、石蔵山脈を越えると砂鉄川が流れている。本遺跡は、県道14号・一関－北上線に沿う水田耕作地の一角にあり、調査区の中心は北緯38度57分49秒、東経141度10分14秒付近である。周辺は、河岸段丘や北上川の中島に広がる水田地帯と、北上川に注ぐ小川が西流する地域で、調査区北東の丘陵地には観福寺がある。

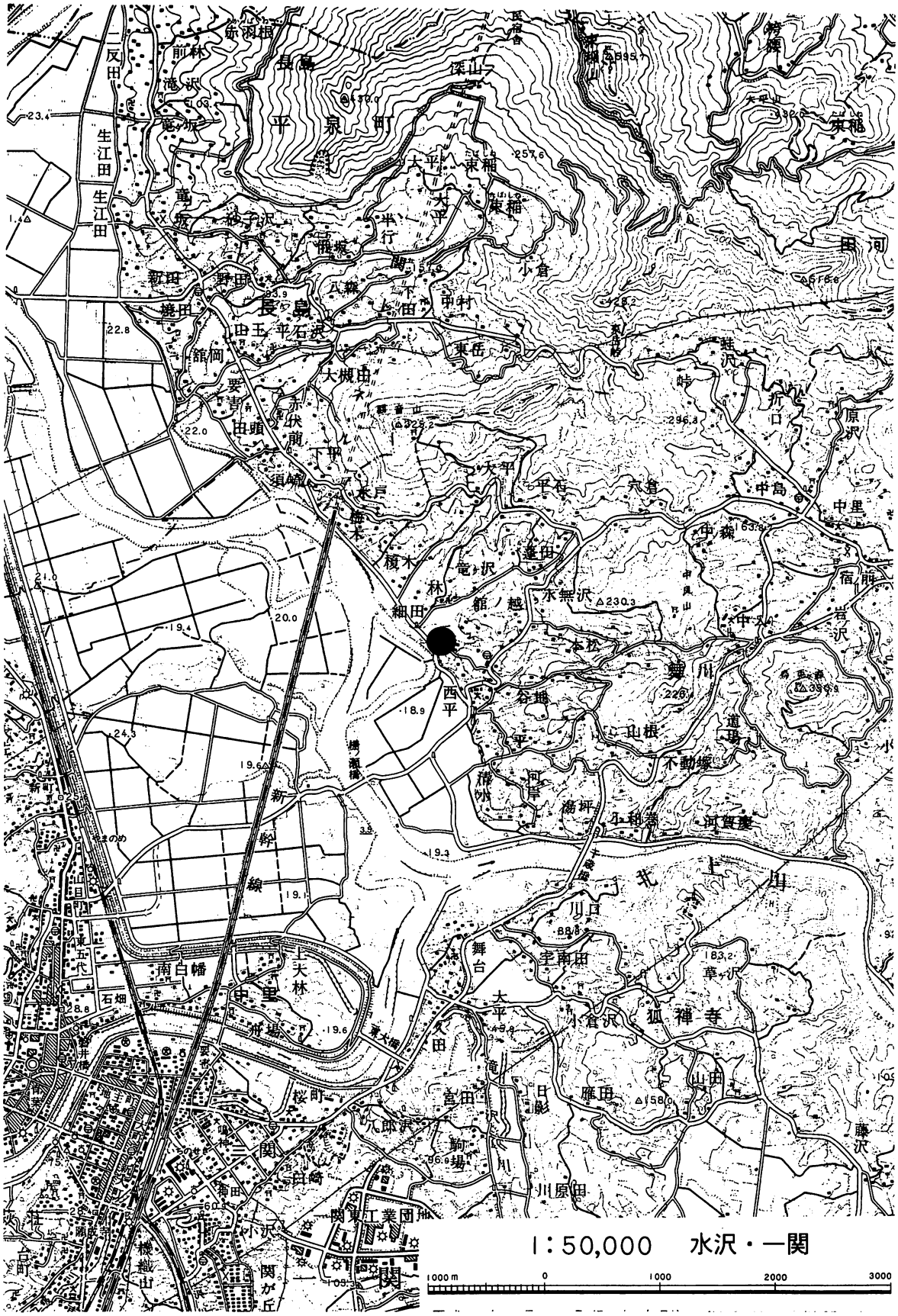
堀切遺跡のある地域は、昭和33年頃の圃場整備により大きく地形が改変されており、特に標高20ｍ以上の緩やかな丘陵地（調査区の北側）は、現在もなお、圃場整備のために削られてしまっている。

2　地形・地理的環境

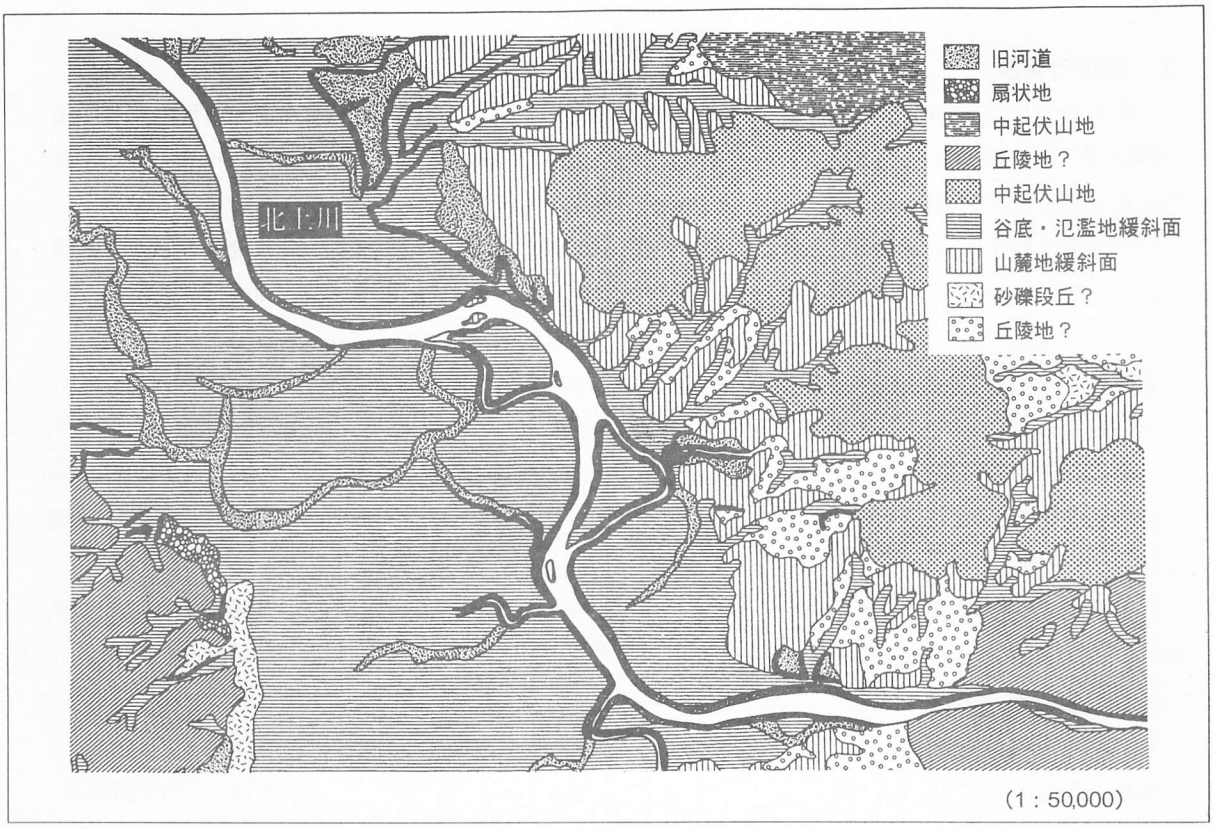
堀切遺跡のある一関市は、岩手県の南端に位置し、南を宮城県栗原郡金成町・栗駒町と有壁丘陵を挟んで接し、西を秋田県雄勝郡東成瀬村と奥羽梁山脈・栗駒山を境にして県境をなしている。北は平泉町に接し、東は北上山地西縁部にあたる東山町に接している。一関市の範囲は東経140度46分33秒～141度16分６秒、北緯38度51分14秒～39度２分46秒にまたがり、総面積407.52㎞である。東西約43.3㎞、南北約13.5㎞と東西方向に広く、地形的な高まりは市の東西両端にある。第１次市政により一関市・山目村・中里村・真滝村が、昭和30年の第２次市制により一関市・厳美町・萩荘村・舞川村・弥栄村が合併したことにより成立し、現在は県南最大の都市として主要交通機関・行政・流通の中心地となっている。また、過去の水害から治水対策も盛んであり、いわゆる五大ダム構想を始めに、昭和48年に改訂された一関地区遊水地事業によって地形を生かした自然遊水地と二線式堤防を建設し、北上川流域の開発を進めている。

この地域の地形形成には、地質時代の新世代第三紀以降の激しい地殻変動が関係している。その他、新世代第四紀の氷河期における海水準変動が考えられ、地域差のある地質構造と地殻運動と海水準変動とに伴って侵食基準面が変化し、南股・衣川・有壁などの各丘陵地形が形成され、その後も地形変化を続けながら現在に至っている。また、海水準変動は北上川の河道を通して、侵食基準面に影響を及ぼし続けた。

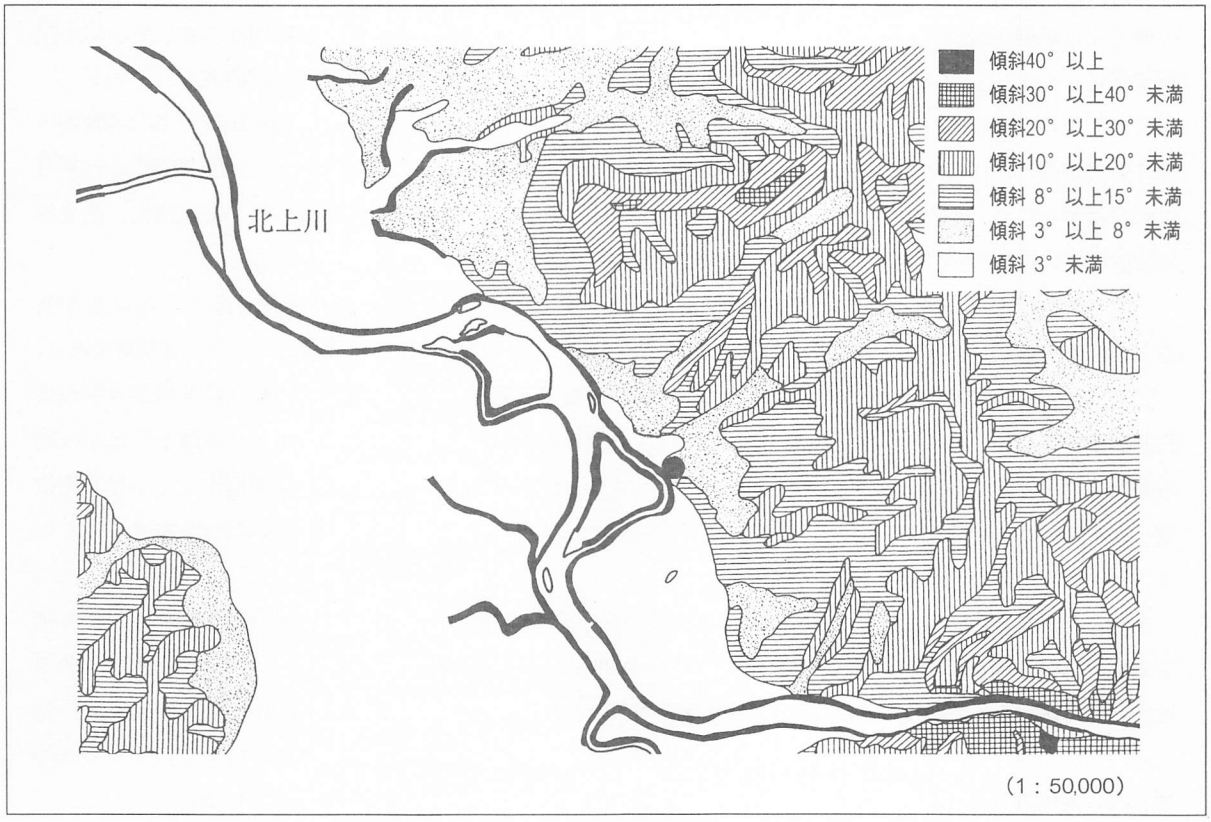
岩手県の中央部を流れる北上川は、大小河川を支流に持ち蛇行しながら南流し、衣川を過ぎた所から大きく東へ曲流、一関市北東の柵ノ瀬へと達する。この付近で磐井川と合流した北上川は孤禅寺狭窄部へと突入し、丘陵地を深く掘り込んだ形で南下する。北上川と磐井川の合流点付近の標高は、17ｍ程と周囲より低く下流は狭窄部があるため洪水の常襲地帯であり、昭和22・23年のカスリン・アイオン両台風による洪水は、この地区に多くの被害をもたらした。このため一関の市街は磐井川を３～４㎞程さかのぼったところにある。この磐井川に沿って段丘が形成されており、一関市街地の西方には最も広い磐井川段丘が広がり、これは東方において北上川低地面に連続する。これらの低地、段丘を取り巻くように幾つかの丘陵や山地が広がる。中でも一関市の南側に広がる有壁丘陵は最も広い範囲を占め、100～200ｍの高度を保ち起伏量は少なく、特に東部は谷底平野の割合が大きい。



第２図　遺跡位置図



第３図　地形分類図



第４図　傾斜分類図

3　周辺の遺跡

一関市の管内に所在する遺跡は、岩手県教育委員会文化課による「岩手県埋蔵文化財包蔵地一覧（以後、「遺跡台帳」）」（1999）において、散布地を含め171か所が登録されている。時代も旧石器から縄文時代前期、中・後・晩期と弥生時代、奈良、平安、中世とかなり幅広いものがある。

今回の調査で出土した遺物は、古代（奈良・平安時代）の土師器・須恵器と縄文時代前期・晩期の土器、石器に大別されるが、最も出土量が多い遺物は土師器・須恵器であり、これが本遺跡の中心となる。そのため、古代の遺構・遺物の出土が見られる遺跡を中心に、遺跡台帳より抜粋・要約した第１表を掲載する。

古代期の周辺遺跡は北上川と磐井川、及びこれに流れ込む支流や沢の周辺にほとんどが集中している。これらの多くに共通してみられる地理的条件は、第１に河川によって形成発達した沖積平野や低位の河岸段丘上にあり、河川水位面に近い低地もしくは氾濫河川の冠水面に近い位置にあるということ。第２に本流に流れ込む支流・沢などによって形成された緩やかな微高地、特にその南斜面・西斜面に所在しているものが多いということである。

北上川沿いを概観すると、舞草鍛冶・和田・大平・平の各遺跡がある。この中で、本遺跡の北約1.7㎞に位置する観音山にある舞草鍛冶遺跡からは鉱滓・鋳型が出土しており、これは日本刀の元祖と称される、いわゆる「舞草刀」に関連する遺跡であると思われる。和田・平遺跡は、縄文土器も出土している複合遺跡である。大平遺跡は平安時代の集落跡が確認されている。

磐井川周辺に目を転ずると、現在の東北縦貫自動車道磐井川橋の周辺に、松ノ木・中島・小松柵擬定地・下モ下釜・月町・工業高校隣接・大平・萩の馬場跡・鈴ケ沢の各遺跡が集中して所在している。大平遺跡は磐井丘陵の東端に位置し、北を流れる磐井川によって侵食形成されたと思われる崖を持つ半島状丘陵の上にあり、孤禅寺城（鶴ケ城）跡に隣接している。平安期の竪穴住居跡が出土しており、丘陵地からの出土はこの地方では類例が少ない。下モ下釜・月町は、東北縦貫自動車道関連埋蔵文化財発掘調査において、岩手県教育委員会によって調査が行われたものであるが、前者からは古代の竪穴住居跡などが検出されている。

次に周辺の微高地を見ると、名勝厳美渓の北にある山口（八幡沢）から始まって、磐井川の北側に石坂柵・磐井駅擬定地・泥田廃寺跡（Ａ・Ｂ）・狐塚がある。このうち泥田廃寺跡（Ａ・Ｂ）は、昭和29年に岩手県の指定遺跡となり、昭和48～50年にかけて一関市教育委員会により３次の調査が行われ、礎石建物、掘立柱建物跡などの遺構が確認され、土器・鉄釘・羽口・布目瓦などの遺物が出土している。

一方、磐井川南側の微高地には、機織山Ⅲ とⅡ・鈴ケ沢・西沢（上ノ前）・柴沢・大奈良Ⅰの各遺跡が所在している。西沢（上ノ前）遺跡は、昭和34年に個人（草間俊一氏）によって調査された竪穴住居跡であり、一関地方における調査の初例であると思われる。機織山Ⅲ・Ⅱ遺跡と鈴ケ沢遺跡は、東北新幹線関連埋蔵文化財発掘調査において、岩手県教育委員会によって調査された遺跡である。機織山Ⅲ・Ⅱ遺跡からは平安期の竪穴住居跡や土師器・須恵器などの遺物が出土している。鈴ケ沢遺跡は、縄文時代早期末もしくは前期初頭～近世までの複合遺跡であり、10世紀頃の竪穴式住居跡や掘立柱建物、遺物包含層などが確認されている。

また、本遺跡の北0.3㎞には、縄文時代晩期末葉～弥生時代初頭を中心とする遺物包含層が確認された細田遺跡（平成９年度調査）、南1.5㎞には縄文時代中期末葉～後期初頭の土器を中心とした捨て場、多数の柱穴群が確認された清水遺跡（平成10・11年度調査）、北北東1.0㎞の河岸段丘面上には、縄文時代前期～弥生時代初頭にかけての遺物が出土した羽場城遺跡（平成11年度調査）がある。本遺跡を含めこの４つの遺跡は、共に財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが委託を受け調査を行っている。

第５図　周辺の遺跡分布図

第１表　周辺の遺跡

No.	台帳No.	遺跡名	種別	時代	遺構・遺物	所在地	備考
1	11	舞草鍛冶	擬定地	平安？	土師式土器、鉱滓、鋳型	舞川字吉祥、字大平	
2	32	山口(八幡沢)	散布地	平安	土師器、須恵器	厳美町字山口	
3	35	狐塚		平安	土師式土器	赤萩字笹谷	
4	36	和田	散布地	縄文・平安	縄文土器（晩期）、土師器	舞川字和田	
5	41	堀切	散布地	縄文・古代	縄文土器（前期）、土師器、須恵器	舞川字堀切	岩埋文　平成11年度調査
6	47	平	散布地	縄文・古代	縄文土器、土師器	舞川字平	
7	50	大平	集落跡	平安	土師器	舞川字大平10	
8	71	石坂柵	城柵跡	平安		赤萩字福泉	
9	79	磐井駅擬定地	駅家跡	平安		赤萩字宿、元宿地内	
10	88	松ノ木	散布地	平安	土師器	赤萩字松ノ木111	
11	89	中島	散布地	平安	住居跡、土師器	萩荘字神田	
12	92	小松柵擬定地	城柵跡	平安		萩荘字谷起島	
13	93	下モ下釜	集落跡	平安		萩荘字下モ下釜	岩手県教育委員会　1980
14	95	月町	散布地	平安	土師器	赤萩字月町65－1	岩手県教育委員会　1980
15	97	泥田廃寺跡Ｂ	寺院跡	縄文・平安	土師器、須恵器、礎石、瓦、石器	山目字泥田	一関教育委員会　1973～75
16	98	泥田廃寺跡Ａ	寺院跡	平安	土師器、須恵器、礎石	山目字泥田	一関教育委員会　1973～75
17	105	工業高校隣接	散布地	平安	土師器	萩荘字仲町	
18	112	大平	散布地	縄文・平安　他	縄文土器、石器、Ｔピット、墓、住居跡	孤禅寺字大平	一関教育委員会　1985
19	129	萩の馬場跡	駅家跡	平安		萩荘字上黒沢	
20	134	鈴ケ沢	城館跡	中世・他	土器、土師器、空堀、他	萩荘字鈴ケ沢102－1	岩手県教育委員会　1980
21	134	機織山Ⅲ	散布地	平安	土師器、須恵器	機織山184	岩手県教育委員会　1979
22	136	機織山Ⅱ	散布地	平安	土師器	機織山5755	岩手県教育委員会　1979
23	139	中田	散布地	平安	土師器、須恵器	真柴字中田	
24	146	柴沢	散布地	平安	須恵器	滝沢字柴沢128	
25	152	岩崎	散布地	平安	土師器、須恵器	弥栄字岩崎	
26	153	大奈良Ⅰ	散布地	平安	須恵器	弥栄字大奈良52－1	
27	164	西沢(上ノ前)	集落跡	平安	住居跡、土師器、須恵器	真柴字上ノ前59	草間俊一氏　1959
28	48	清水	集落跡	縄文	土器	舞川字清水	岩埋文　平成10・11年度調査
29	40	細田	散布地	弥生	弥生土器	舞川字細田	岩埋文　報告書第283集　1999
30	39	羽場城	城館跡	中世末		舞川字館ノ越	岩埋文　平成11年度調査

4　遺跡の基本層序と状況

本遺跡における主要部分の基本層序は次のとおりである。

Ⅰ　　層　10YR4／2　灰黄褐色　シルト　　粘性なし　　しまりややあり
　　表土（水田耕作土）、黄色土粒をまばらに含む
Ⅱ　　層　10YR6／6　明黄褐色　砂　　粘性なし　　しまりあり
　　盛土、Ⅰ層土を20%、Ⅴ－１層土を２%含む。畑の耕作による攪乱を受けている
Ⅲ　　層　10YR5／1　褐灰色　　砂　　粘性なし　　しまりあり
　　赤色土粒を１%含む（田の底土？）、炭化物が混じっている。
Ⅳ　　層　10YR4／6　褐色　　粘土質シルト　粘性ややあり　しまりあり
　　黄褐色土粒を３%含む、下部に礫が板状に分布
Ⅴ－１層　10YR3／3　暗褐色　　砂質シルト　　粘性ややあり　しまりあり
　　小さい粒がまばらに分布、土器片などが混在
Ⅴ－２層　10YR3／3　暗褐色　　砂質シルト　　粘性ややあり　しまりあり
　　地山層（黄褐色土）がうすく分布、赤色土粒がごくまばらに分布
Ⅴ－３層　10YR2／2　黒褐色　　砂質シルト　　粘性ややあり　しまりあり
　　礫が下部にうすく板状に分布

遺構・遺物はそのほとんどがⅤ層およびⅤ層土によって構成されている埋土内、特にⅤ－２もしくはⅤ－３層より検出された。調査区は、現況の水田整備等で削平を受けている箇所が多く、５～６区にかけてはⅠ・Ⅱ層下に検出層がほとんどなく、地山がすぐ露出する。また、調査区北東部を中心に調査区全体に暗渠が掘られており、そのうちの何本かは遺跡を縦断して斜面下方まで延びている。

調査区北側（Ａ１～Ｆ６区）にかけては、Ⅰ・Ⅱ層土を除去すると斜面下方に向かい厚く堆積した礫が見られ、検出層が確認できなかった。これは、現在調査区北側を流れている沢によって検出層が流されたところに、上流から流されてきた礫が堆積したものと思われる。

Ⅲ　調査方法と室内整理

1　野外調査

(1)　グリッドの設定

調査区がほぼ南北方向に延びているため、平面直角座標第Ｘ系に合わせた基準点を用いて、区割りを行った。グリッドの配置に際して３級基準点の２点を打設し それを基準として第Ｘ系の座標に重なるように主要な点を定めた。基準点１・２の成果値は以下のとおりである。

基準点１　Ｘ＝－114,948.000、Ｙ＝29,228.000、Ｈ＝22.150

基準点２　Ｘ＝－114,984.000、Ｙ＝29,228.000、Ｈ＝21.829

調査区内には上記の３級基準点２点のほか、補点１・２を打設しているが、その成果値は省略する。

グリッド設定にあたって、基準点と補点を結ぶ線を基準線とし、それを用いてグリッドの基点を調査区外側北西に置き、４×４ｍを１区画とした。基点から南北方向へは、アルファベットのＡからＬまで、東西方向へは、算用数字の１から７までを付して、その組み合わせによってグリッド名を呼称することとした。（例…Ａ１区・Ａ２区など）

(2)　遺構の呼称

野外調査では、検出された遺構はそれが属するグリッド名を付して、例えばＡ１住居跡・Ｂ２土坑と呼称した。室内整理において遺構毎に番号を付け直し、１号住居跡・２号住居跡と遺構名を変更している。

(3)　粗掘・遺構検出

調査はまず雑物を撤去し、調査範囲を確認した。次に県教委文化課が実施した試掘トレンチの位置を確認、その１本を再掘・クリーニングし、層序・検出面の把握を行った。次に調査区北側より人力で表土を剥ぎ、遺構の有無・遺物の出土などに注意しつつ、検出面の直上まで試し掘りを行った。この段階で、遺構・遺物の検出が見られなかったため、重機を用いて全体を検出面まで掘り下げた後、人力によって検出を行った。

遺構の検出は、Ｖ層及び地山上面の２面で行った。場所によっては、Ｖ層を細分して検出している。

(4)　精査・実測・遺物の取り上げ

検出された遺構は、竪穴住居跡は４分法、土坑・柱穴類は２分法を原則として精査を行ったが、検出状況に応じて、適宜方法を変えている。遺構の平面実測は簡易遣り方測量を中心とし、合わせて平板実測を行った。実測図の縮尺は、平面図・断面図とも20分の１を原則としたが、状況によって縮尺率を変更した場合、それを実測図に記録した。遺構のレベルは１ｍ間隔を原則としながら、必要に応じて計測している。

遺構内出土遺物は、ほとんどは埋土あるいは上部・下部（床面）の別で取り上げた。遺構外出土遺物は、出土したグリッド・層位を記録した後、グリッドごとに一括して取り上げた。その際、基本層序の層位はローマ数字、細分した検出面の層位は算用数字で表した。

(5)　写真撮影

野外での写真撮影は、35㎜判カメラ２台（モノクロ・カラーリバーサルフィルム）を主記録に、６×７㎝判カメラ（モノクローム）を補助用として使用した。この他、メモ用にポラロイドカメラ１台も使用している。撮影時には状況を記した「撮影カード」を事前に写した後、遺構の平面・断面と遺物の出土状況を中心に撮影し、整理時の繁雑化を避けた。また調査終了前には、セスナ機による空中写真撮影を行った。

2　室内整理

(1)　作業内容

遺物の処理は、野外調査と並行して雨天時などに水洗まで行っていたため、室内では注記・接合・復元を優先して行い、次に仕分け・登録・写真撮影・拓本作成・実測を並行して進めた。実測図は点検の後にトレースを行い、図版・写真図版の作成を行った。野外調査で作成した図面類は、点検・修正と第２原図の作成を並行して進めた。その後トレース・図版作成の順に進めた。

野外調査で撮影したモノクロフィルムは、遺構・遺物ともネガアルバムにベタ焼き写真と共に整理し、カラースライドは、スライドファイルに撮影順に収納した。

(2)　遺構

遺構配置図は、野外調査時に平板測量で実測した縮尺1／20の各遺構平面図を、基準点を基に合成した上で1／100の縮尺図を作成し、仕上がり1／250で掲載した。各遺構図面は1／20縮尺を原則としているが、表現する図面によって若干の差異がある場合、その都度図面にスケールまたは縮尺率を付した。また、方位は平面直角座標第Ｘ系の北方向を標している。

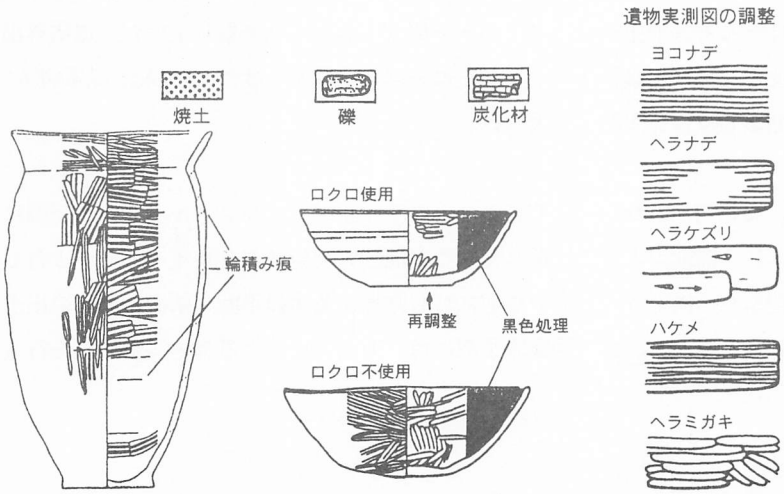
(3)　遺物

遺物の分類・掲載方法については、出土した遺物のほとんどが破片であるため、第１に遺構内・遺構外出土によって選別した。第２に遺構内出土遺物については、出土した遺構ごとに縄文土器・土師器・須恵器・石器の順で、遺構外出土遺物については、まず縄文土器・土師器・須恵器・石器と種類別に大別し、次に部位別に中別、最後にそれに見られる特徴によって分類した。土器の接合・復元については、作業行程の都合上から最低限度にとどめており、掲載遺物以外にも復元可能な土器は残されているものと思われる。土器・石器の実測図は、原則として器種や部位・出土地点や層位が明確であり、特徴的なものに関して実測し掲載している。拓本は、復元できなかった土器片で、実測図で掲載した遺物と別個体であり、口縁部や底部、特徴あるものについて取り上げている。縮尺率は、土器においては実測図・拓影図を３分の１、剥片石器は原寸大、礫石器は３分の１を原則としている。また、必要に応じて縮尺率を付した。

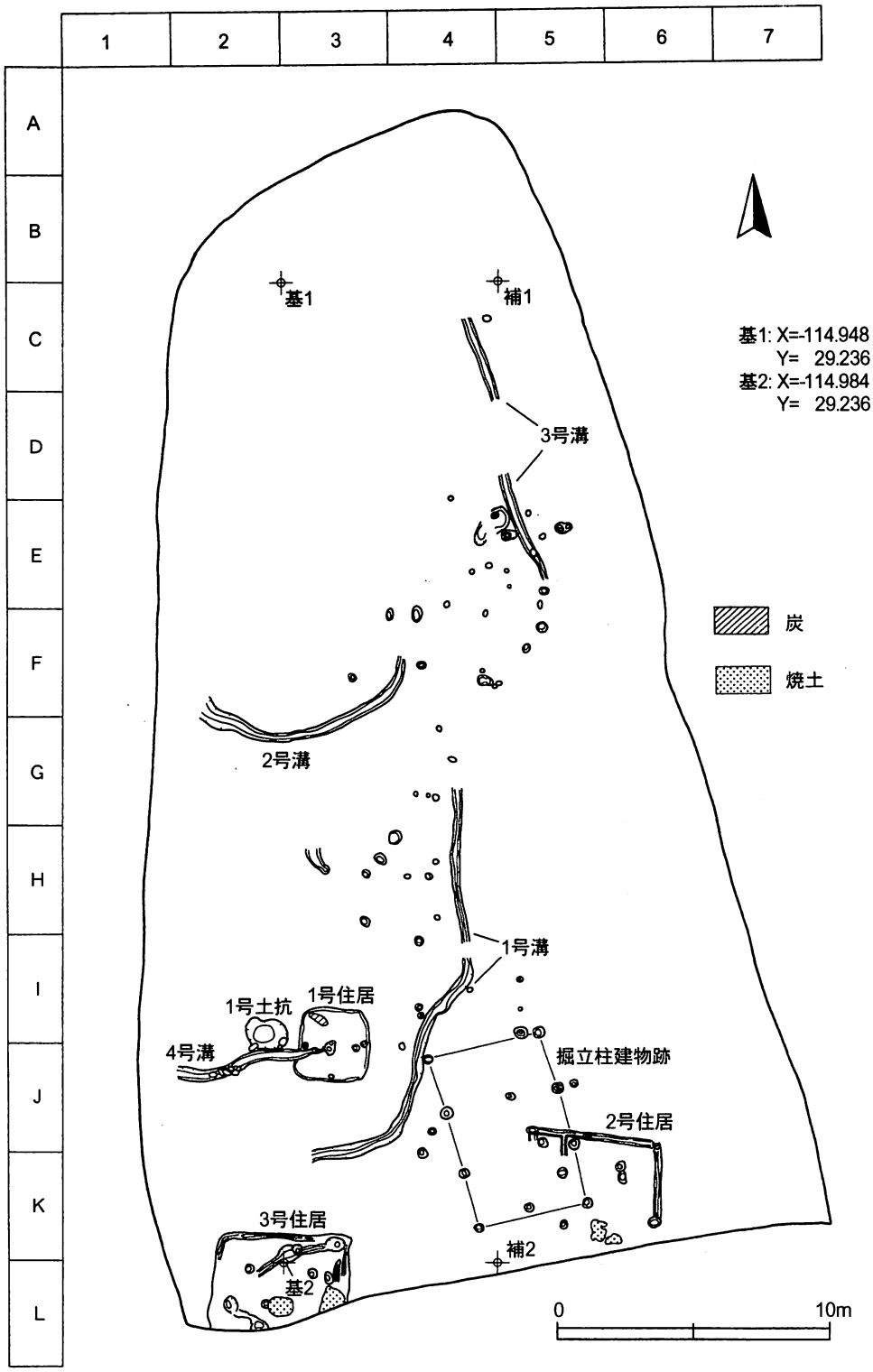
(4)　写真図版

野外調査時に撮影した写真と室内整理で撮影した遺物の写真で、図版を作成した。写真図版の個々の遺物番号は、図版の番号と一致している。遺物写真の縮尺率は、剥片石器は原寸大、礫石器３分の１、土器の立体が３分の１、破片３分の１・２分の１を原則としている。必要によって縮尺率を変えたものや、構成の都合上から同一ページに縮尺率の異なる写真が掲載されている場合は縮尺率を付している。遺物写真の角度は実測図に準じているが、必ずしも正確・同一ではない。

(5)　凡例



遺構・遺物図版　凡例



第６図　遺構配置図（Ｓ＝1／250）

Ⅳ　調査結果

1　検出された遺構

(1)　1号住居跡（第8図、写真図版3）

＜位置・検出状況＞　Ⅰ3区南側とJ3区北側にまたがる。検出面はⅤ層である。

＜平面形・規模＞　方形を呈し、辺の長さは2.5m×2.4mである。

＜埋土＞　2層に細分され、炭粒・焼土粒を含む黒褐色土が主体である。西～北西の床面近くに、約3㎝程の厚さで炭が広がっている箇所がある。

＜床面＞　地山層で形成され、貼り床は見られずほぼ平坦である。固く締まりがある。

＜壁＞　床面からやや内湾気味に立ち上がる。壁高は20㎝である。

＜柱穴・その他＞　柱穴と思われる土坑（P1，P5，P6）が検出された。径は20～25㎝、深さは17～25㎝で、埋土は炭粒・地山層粒を含む黒褐色土である。その他、遺構ほぼ中央部に浅い土坑P2、P2東側に柱穴状土坑P3，P4を検出した。P2からは、住居外側西に向かって溝が延び4号溝と繋がっているが、4号溝と比べ規模が小さいことや、形が不整形であることなどから、土坑にたまった水が流れた跡と思われる。

＜カマド・焼土＞　検出されなかった。

＜出土遺物＞　埋土内から縄文中期のものと思われる破片1点、ロクロを使用している土師器と須恵器の底部破片が各1点、石器が3点出土している。

＜時期＞　出土遺物が少なく明確ではないが、縄文時代前期以降に属すると思われる。

(2)　2号住居跡（第9図、写真図版4）

＜位置・検出状況＞　J5～6区南側からK5～6区にまたがり、調査区外に伸びている。検出層はⅤ層である。床面まで削平を受けており、精査終了時まで住居跡とは分からなかった。西側が掘立柱建物跡と重複しているが、新旧関係は不明である。

＜平面形・規模＞　残存する周溝から、方形を呈すると考えられる。計測できる辺の長さは、約4.95mである。周溝は上面まで削平を受けており、残存する部分の幅は20～30㎝、深さは3～10㎝である。

＜埋土＞　大部分が削平を受けており詳細は不明であるが、検出された部分は黒褐色層土が主である。

＜床面・壁＞　大部分が削平を受けており、詳細は不明である。

＜柱穴・その他＞　柱穴と思われる土坑（P1～P5）が検出された。径は25～45㎝、深さは15～65㎝である。P5はP1から南に延びる周溝と重なるため、この住居跡に伴うものと認定した。また、内部からも土坑（P6～P10）が検出されている。径は12～60㎝、深さは12～50㎝である。

＜カマド・焼土＞　本体は未検出であるが、カマドに伴うと思われる焼土が2ヵ所検出された。焼土の厚さは1～5㎝、長軸55～80㎝、短軸30～35㎝のやや不整形な楕円を呈している。焼土の周囲および焼土下からは遺物が出土しているが、これらの遺物との関連は不明である。

＜出土遺物＞　周溝埋土内から縄文中期のものと思われる破片1点、ロクロ使用の土師器甕片6点、土師器坏片3点、須恵器坏準完形1点、坏片7点、甕片1点が出土している。須恵器の坏準完形には、底面に線刻文字「田」が見られる。石器は2点出土している。

＜時期＞　形状・出土遺物などから、平安時代に属すると思われる。

(3) 3号住居跡（第10図、写真図版５～６）

＜位置・検出状況＞　Ｋ２～３区南側とＬ２～３区にまたがり、調査区外に伸びている。検出面はＶ層である。道路・区画整備により削平を受けている部分が多い。

＜平面形・規模＞　調査区外に伸びているため詳細は不明であるが、方形を呈するものと思われる。計測できる辺の長さは、約4.8ｍである。

＜埋土＞　２層に細分され、炭粒・焼土粒を含む黒褐色土が主体である。

＜床面＞　地山層で形成されやや凹凸がある。貼り床が施されている。固く締まりがある。

＜壁＞　床面からやや内湾気味に立ち上がる。壁高は20㎝である。

＜柱穴・その他＞　柱穴と思われる土坑（P1，P2）が検出されている。径は30㎝、深さは32～39㎝である。他に土坑を６基（P3～P8）検出、径40～110㎝、深さ10～42㎝である。周溝と思われる溝も２条検出されている。周溝の幅は10～30㎝、深さは２～12.5㎝であり、両端が浅くなっている。

＜カマド・焼土＞　東壁際１ヵ所でカマド、南壁側中央部・西壁側で焼土を検出した。カマドは暗褐色の粘土質シルト土で形成されており、炭粒を10％含む。燃焼部は焼けがあまり良好ではないが、厚さ１～４㎝の焼土がブロックで混入している。詳細は調査区外にあるため不明である。南壁側側焼土は、土坑P8の直上に厚さ１～３㎝、長軸85㎝の楕円形で広がっており、炭粒をまばらに含んでいる。西壁側焼土は、粘土質シルト土に混入しまばらに広がっている形で検出、最大のブロックは幅８㎝、長さ20㎝の棒状を呈している。その周辺には炭粒もまばらに混在しており、長さ10～15㎝の棒状の炭も検出された。

＜出土遺物＞　カマド埋土内より縄文晩期のものと思われる土器片１点、ロクロ未使用の土師器甕片１点、カマド脇ピット（P6）埋土内よりロクロ使用の土師器準完形坏１点、土師器甕片１点、焼土下ピット（P8）埋土内よりロクロ使用の土師器坏片１点、３号住居跡埋土内より、ロクロ未使用の土師器甕片５点、坏片１点、壺片１点、ロクロ使用の土師器甕片３点、坏片１点、須恵器甕片２点、坏片２点が出土している。須恵器甕片の１点は、支えの石がそのまま貼りついており、大甕の底部であると思われる。石器は１点出土している。

＜時期＞　形状・出土遺物などから、平安時代に属すると思われる。

(4) 掘立柱建物跡（第11図、写真図版７）

＜位置・検出状況＞　Ｊ４～５区からＫ４～５区にまたがる。南側が２号住居跡と重複しているが、新旧関係は不明である。２号住居跡と同じように、床面直上まで削平を受けている部分が多く、検出状況はあまり良好ではない。

＜平面形・規模＞　桁間３間（総長6.6ｍ－西）、梁間１間（総長4.13ｍ－南）の建物である。建物の軸方向は、Ｎ－14°－Ｗである。

＜平均柱間寸法＞　桁行2.2ｍ、梁行4.13ｍである。桁行は、ほぼ2.1ｍ～2.3ｍの間に収まっている。

＜掘り方・柱痕＞　柱穴はいずれもほぼ円形を呈し、直径は30～50㎝、深さは９～60㎝と若干のばらつきがある。これは建物跡の南側に向かって地形が傾斜していることや、床面の直上まで削平を受けていることなどが影響していると思われる。柱痕は３つの柱穴（P5～7）で確認されており、径は５～７㎝である。

＜埋土＞　Ｖ－１層土（暗褐色・砂質シルト土）によって構成されている。

＜出土遺物＞　なし。

＜時期＞　出土遺物がないので不明な点が多いが、縄文時代以降の建物跡の可能性が高い。

(5)　1号土坑（第11図、写真図版６）

＜位置・検出状況＞　Ｉ２区南東端、１号住居の西端に隣接している。

＜平面形・規模＞　北側がやや歪んでいるが、長径約1.5ｍ、短径約1.0ｍ、深さ約0.2ｍの楕円形を呈する。

＜埋土＞　地山層の土粒を含むものの、黒褐色土によるほぼ単一の土層である。

＜底面＞　地山層で凹凸があり、締まっている。その比高差は10㎝である。

＜壁＞　やや内湾して立ち上がる。

＜副穴・その他＞　南側縁近くに小土坑が２つ確認されているが、現状（水田）の杭穴跡と思われる。

＜出土遺物＞　埋土内から縄文時代前期に属すると思われる、押圧文・羽状縄文が施文されている深鉢の破片が出土した。

＜時期＞　出土遺物から縄文時代前期に属する可能性が高い。

(6)　溝　跡

１号溝（第12図、写真図版７）

＜位置・検出状況＞　Ｇ４区から南側にかけて位置する。Ｊ４区で西に大きく曲がり、Ｋ３区の北に達し消える。途中、暗渠によって削平されている。

＜平面形・規模＞　帯状を呈し、検出された部分の長さは16.98ｍ、幅20～40㎝、深さ10～20㎝を測る。

＜埋土＞　地山層土を薄く含む黒褐色土の単層である。

＜底面＞　内湾している。

＜壁＞　内湾して立ち上がる。

＜出土遺物＞　なし

＜時期＞　出土遺物がないため明確ではないが、埋土の状況から古代以降の溝と考えられる。

２号溝（第12図、写真図版８）

＜位置・検出状況＞　Ｆ４区から西にかけて傾斜に沿い、弱く湾曲してＦ２区南側に達し削平により消える。

＜平面形・規模＞　帯状を呈し、検出された部分の長さは15.94ｍ、幅20～70㎝、深さ20～25㎝を測る。

＜埋土＞　赤色土粒・炭化物粒をまばらに含む黒褐色土の単層である。

＜底面＞　内湾しているが、南端部でやや平坦になっている。

＜壁＞　内湾して立ち上がる。平坦部では外に向かって開く。

＜出土遺物＞　埋土内からロクロ未使用の土師器甕片、須恵器甕片が出土しているが、真にこの遺構に伴う遺物かどうかは不明。流れ込みの遺物の可能性もある。

＜時期＞　出土遺物から古代以降の溝の可能性が高い。

３号溝（第12図、写真図版８）

＜位置・検出状況＞　Ｅ５区から北にかけて位置し、Ｃ４区北側で削平により消える。上面およびＤ４・５区にまたがる溝中央部分は削平を受けている。

＜平面形・規模＞　帯状を呈し、検出された部分の長さは10.15ｍ、幅15～30㎝、深さ５～10㎝を測る。

＜埋土＞　赤色土粒・炭化物粒をまばらに含む黒褐色土の単層である。埋土下部には礫が広がっている。

＜底面＞　ほぼ平坦である。

＜壁＞　やや内湾して緩やかに立ち上がる。
＜その他＞　Ｅ５区の溝底面に柱穴状土坑１基が検出された。径は30×16㎝、深さは22㎝である。この溝に伴うものかどうかは不明である。
＜出土遺物＞　なし
＜時期＞　出土遺物がないため明確ではないが、埋土の状況から古代以降の溝と考えられる。

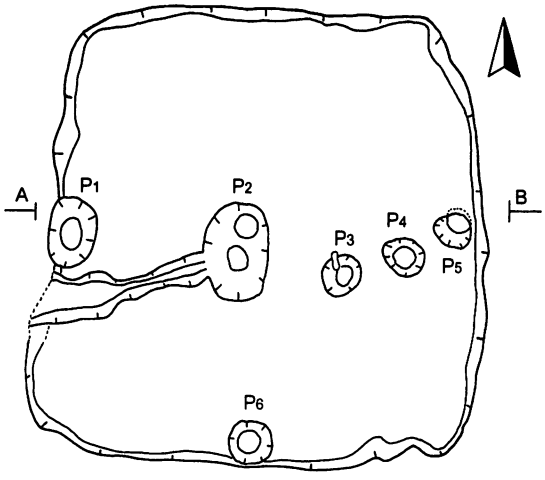
４号溝（第11図、写真図版８）
＜位置・検出状況＞　１号住居跡西側の壁面から西にかけて位置する。途中Ｊ２区で、一部が南にかけて分岐するがすぐに削平により消える。主部分はＪ１区の境界手前まで延び、削平によって消える。
＜平面形・規模＞　帯状を呈し、検出された部分の長さは5.54ｍ、幅10～45㎝、深さ18㎝～27㎝を測る。
＜埋土・その他＞　地山層土・炭化物粒をまばらに含む黒褐色土の単層、途中に集石部が見られる。
＜底面＞　ほぼ平坦である。
＜壁＞　内湾して立ち上がる。一部、途中が段になっているところも見られる。
＜出土遺物＞　剥片石器（石箆？）が１点出土している。
＜時期＞　１号住居との関連から、縄文時代前期以降の溝と考えられる。

(7)　柱穴状土坑（第７図）
＜位置・検出状況＞　Ｄ４区に１基、Ｅ４区に４基、Ｅ５区に９基、Ｆ３区に２基、Ｆ４区に７基、Ｆ５区に２基、Ｇ４区に５基、Ｈ３区に４基、Ｈ４区に５基、Ｉ４区に４基、Ｉ５区に３基、Ｊ４区に３基、Ｊ５区に２基、計51基が検出されている。掘立柱建物跡や住居跡の可能性もあるが、柱筋などの明確なプランを確認することはできなかった。
＜平面形・規模＞　その多くがほぼ円形、もしくは楕円形を呈している。不整形のものもあるが、その中には円形の２つの土坑が隣り合っているものも見られる。径は長径10～60㎝、短径10～44㎝を測る。P46には柱痕が見られるが、はっきりしたものではない。
＜埋土・その他＞　いずれも地山層土をまばらに含む黒褐色土の単層によって構成されている。
＜出土遺物＞　Ｐ47埋土内下部からは、完形の土師器坏が出土している。
＜時期＞　いずれの土坑も、時期は不明である。P47についても、出土遺物は流れこみの遺物である可能性がある。

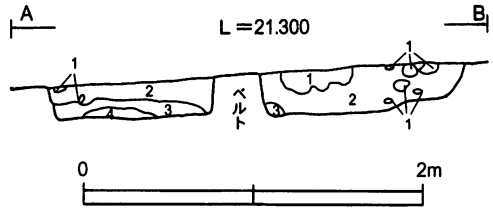
No.	長径×短径	深さ	遺　物	備　　考
P 1	22 × 14	4.9		
P 2	25 × 20	8.4		土坑状の窪地内に残存
P 3	20 × 20	29.3		
P 4	14 × 14	31.1		
P 5	10 × 10	12.5		
P 6	20 × 15	31.0		
P 7	37 × 35	50.1		土坑Ｐ８と隣接している。
P 8	35 × 20	35.3		土坑Ｐ７と隣接している。
P 9	60 × 30	50.4		
P10	25 × 20	12.9		
P11	12 × 12	22.0		
P12	10 × 10	21.1		
P13	37 × 30	14.2		
P14	30 × 15	30.3		
P15	45 × 25	16.6		
P16	25 × 20	9.1		
P17	55 × 40	18.5		
P18	20 × 15	24.1		
P19	30 × 22	24.3		
P20	14 × 14	20.3		
P21	40 × 35	11.5		ひょうたん形を呈している。２つの土坑が接合した跡か。
P22	20 × 17	12.7		
P23	15 × 12	30.3		
P24	46 × 40	12.5		
P25	32 × 25	39.7		
P26	18 × 13	7.7		
P27	10 × 10	8.8		
P28	27 × 10	21.8		
P29	17 × 15	11.8		
P30	24 × 20	13.2		
P31	48 × 31	16.6		
P32	30 × 25	15.8		北西に溝が延びる。
P33	35 × 19	24.6		
P34	40 × 28	18.5		
P35	50 × 41	16.0		
P36	17 × 17	21.5		
P37	20 × 20	30.0		
P38	27 × 21	15.9		
P39	16 × 16	18.8		
P40	30 × 30	31.7		１号溝に隣接している。
P41	16 × 16	5.8		１号溝に隣接している。
P42	20 × 20	16.8		１号溝に隣接している。
P43	20 × 16	12.0		
P44	20 × 15	9.8		
P45	10 × 10	13.8		
P46	51 × 44	32.1		掘立柱建物跡の柱穴（Ｐ８）に隣接、柱痕
P47	27 × 16	24.2	土師器坏（完形）１	１号溝に隣接している。
P48	30 × 26	24.4		掘立柱建物跡の柱穴（Ｐ２）に隣接
P49	36 × 33	18.0		
P50	30 × 22	22.8		掘立柱建物跡の柱穴（Ｐ９）に隣接
P51	44 × 25	14.5		掘立柱建物跡の内部に残存、関係は不明。

第２表　柱穴状土坑観察表

第７図　柱穴状土坑配置図（Ｓ＝1／150）



<完堀全景>

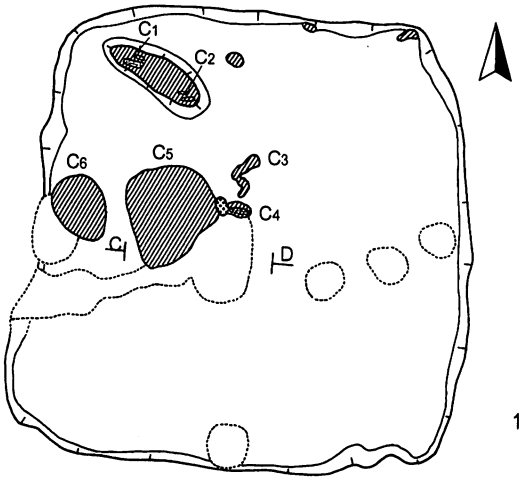


【1号住居】

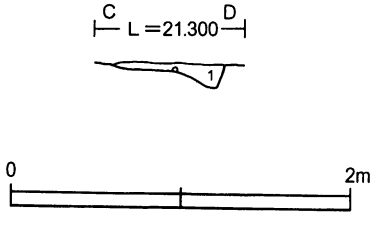
1　10YR7/6　明黄褐色　砂　　粘性なし　　しまりややあり
　2層内にもブロックとして混在
2　10YR3/2　黒褐色　　粘土質シルト　粘性ややあり　しまりややあり
　1層を2%程度含む、黄色土粒まばらに含む
3　5YR3/6　暗赤褐色　粘土質シルト　粘性ややあり　しまりややあり
　板状になった炭を20%程度含む
4　10YR6/6　明黄褐色　砂　　粘性なし　　しまりややあり
　地山層、3層土を10%程度含む

1号住居

NO	長経 × 短経	深さ	備考
P1	40 × 27	24.8	
P2	57 × 38	29.6	
P3	22 × 22	5.7	
P4	23 × 23	13	
P5	20 × 20	24.5	斜めに掘り込まれている
P6	25 × 25	17.2	



<炭化物出土状況>



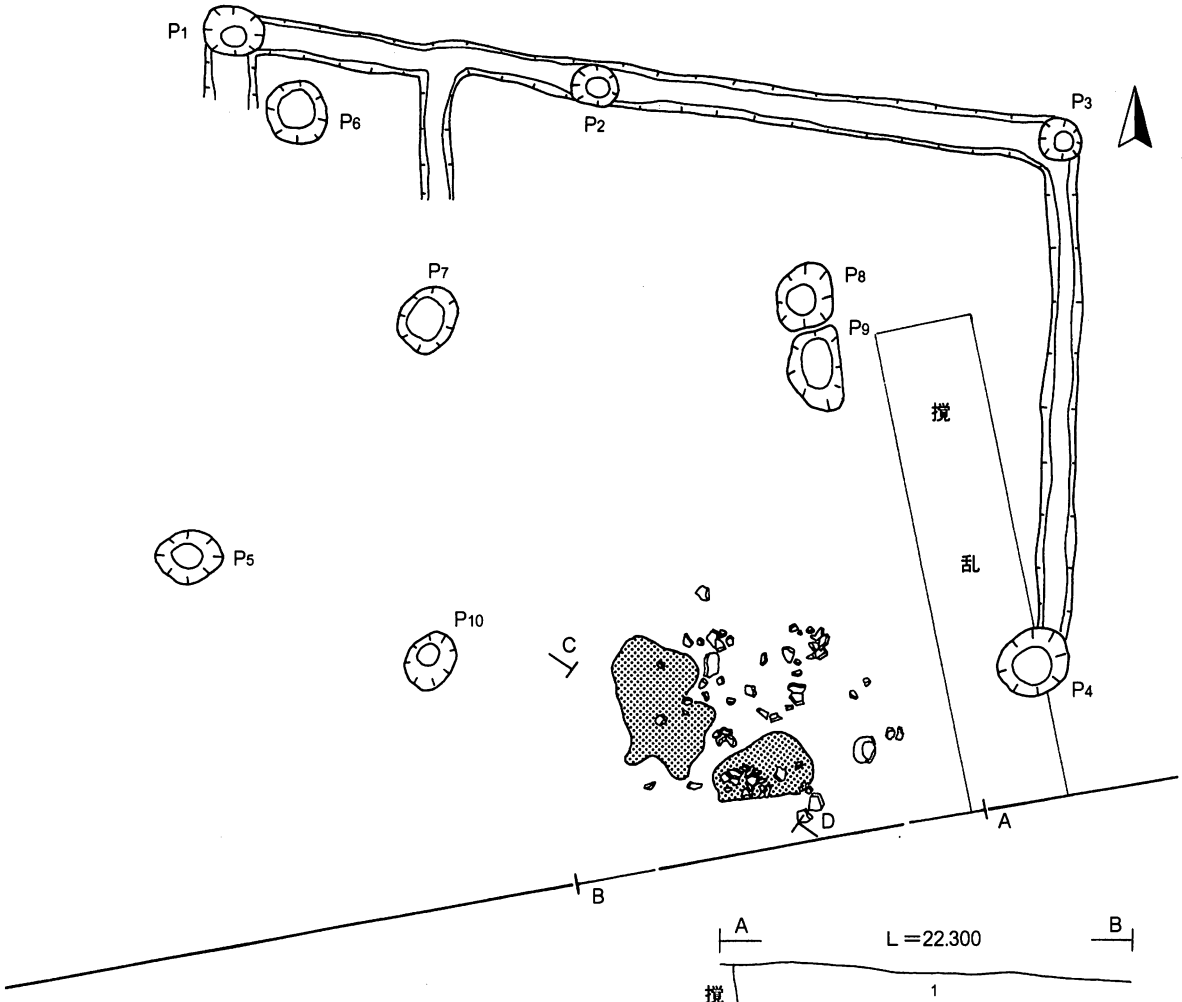
【1号住居・中央部炭化物】

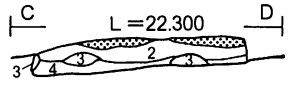
1　10YR7/6　明黄褐色　砂　　粘性なし　　しまりややあり
　表層に炭化物がまばらに分布。2層内にもブロックとして混在。

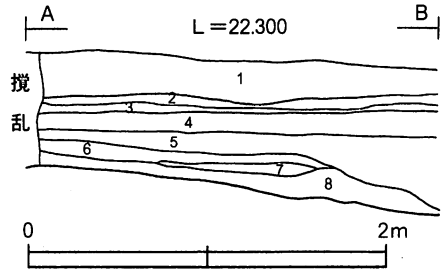
【1号住居・炭化物観察】

C1	長さ30cm×7cm	厚さ 2～ 3cm	棒状のもの2本
C2	長さ22cm×8cm	厚さ 2～ 3cm	棒状（塊か？）
C3	長さ10cm・6cm・20cm	厚さ 1～ 2cm	横幅3cm程度の棒状3本が繋がる
C4	長さ13cm×4cm	厚さ 1～ 2cm	棒状
C5		厚さ 0.5cm	炭粒がまばらに分布
C6		厚さ0.2～0.3cm	炭粒がまばらに分布、焼土粒が混在

第８図　１号住居跡







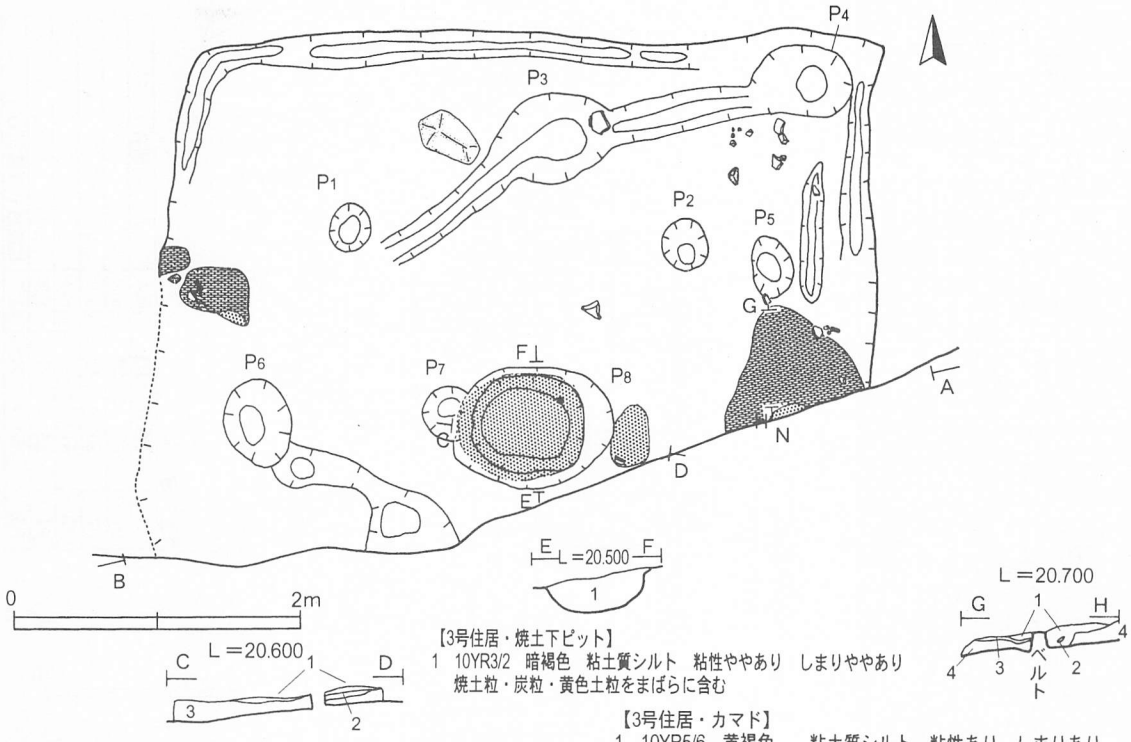
【2号住居・焼土】
1　5YR7/6　赤褐色　砂質シルト　粘性少しあり　しまりあり
焼土部
2　10YR2/3　黒褐色　砂質シルト　粘性ややあり　しまりややあり
焼土粒をまばらに含む
3　10YR2/3　黒褐色　砂質シルト　粘性ややあり　しまりややあり
黄色土粒をまばらに含む
4　10YR3/4　暗褐色　シルト　粘性強　しまりややあり
焼土粒をまばらに含む

【2号住居】
1　10YR4/2　灰黄褐色　シルト　粘性なし　しまりややあり
5層土粒が混在（基本土層Ⅰに相当）
2　10YR6/6　明黄褐色　砂　粘性なし　しまりあり
石礫がまばらに分布（基本土層Ⅱに相当）
3　10YR5/1　褐灰色　砂　粘性なし　しまりあり
赤色土粒がまばらに分布（基本土層Ⅲに相当）
4　10YR4/3　にぶい黄褐色　粘土質シルト　粘性ややあり　しまり少しあり
2土層・黄色土粒をうすく含む
5　10YR3/2　黒褐色　粘土質シルト　粘性ややあり　しまり少しあり
4層土粒をまばらに含む
6　10YR3/3　暗褐色　粘土質シルト　粘性ややあり　しまり少しあり
黄色土（地山層？）が板状に入っている。土器の混入も見られる
7　10YR2/3　黒褐色　粘土質シルト　粘性ややあり　しまり少しあり
ほぼ単一層
8　10YR2/2　黒褐色　粘土質シルト　粘性ややあり　しまり少しあり
下部に石礫が分布

2号住居

NO	長経 × 短経	深さ	備考
P1	30 × 25	23.9	
P2	25 × 25	31.7	
P3	23 × 23	14.7	
P4	40 × 35	65	
P5	40 × 35	31.6	P1からの周溝内にあると推定される
P6	35 × 35	37.8	
P7	40 × 30	29.1	
P8	35 × 30	26.2	
P9	45 × 30	36.8	
P10	30 × 30	22.2	

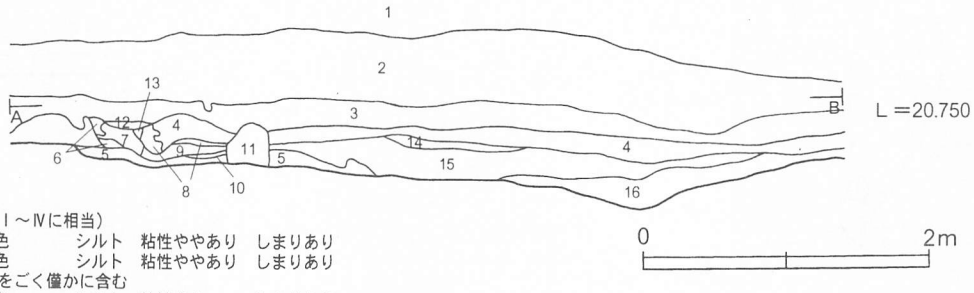
第９図　２号住居跡



【3号住居・焼土下ピット】
1　10YR3/2　暗褐色　粘土質シルト　粘性ややあり　しまりややあり
焼土粒・炭粒・黄色土粒をまばらに含む

【3号住居・焼土】
1　5YR5/8　明赤褐色　砂質シルト　粘性なし　しまり少しあり
焼土、2層土・炭粒をまばらに含む
2　10YR3/4　暗褐色　粘土質シルト　粘性あり　しまりややあり
黄色土をまばらに含む
3　10YR3/4　暗褐色　粘土質シルト　粘性あり　しまりややあり
焼土粒をまばらに含む

【3号住居・カマド】
1　10YR5/6　黄褐色　粘土質シルト　粘性あり　しまりあり
焼土粒（中～小）を3%含む
2　5YR5/8　明赤褐色　砂質シルト　粘性なし　しまり少しあり
焼土ブロック（厚さ1cm、長さ5～6cm）
3　10YR3/4　暗褐色　粘土質シルト　粘性あり　しまりややあり
炭を10%含む
4　10YR3/4　暗褐色　粘土質シルト　粘性あり　しまりややあり
ほぼ単一の土層。焼土粒をまばらに含む

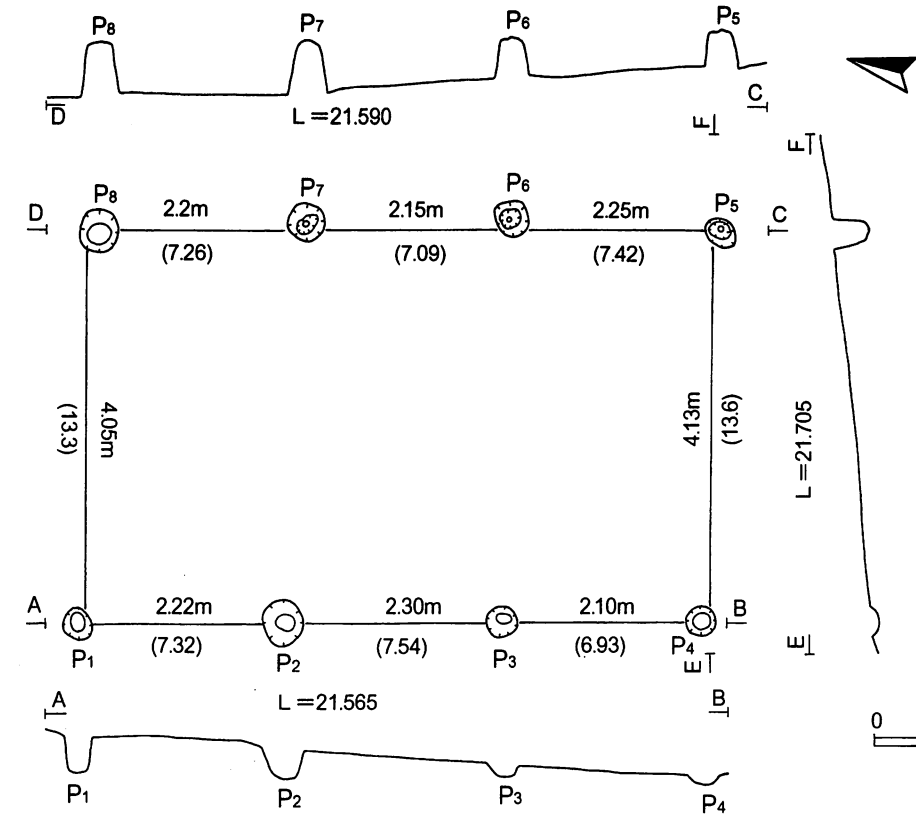


【3号住居】
1　盛土（基本土層Ⅰ～Ⅳに相当）
2　10YR2/3　黒褐色　シルト　粘性ややあり　しまりあり
3　10YR3/4　暗褐色　シルト　粘性ややあり　しまりあり
炭化物・焼土粒をごく僅かに含む
4　10YR2/3　暗褐色　シルト　粘性あり　しまりあり
5　10YR3/3　暗褐色　シルト　粘性あり　しまりあり
6　7.5YR3/4　暗褐色　シルト　粘性あり　しまりあり
焼土粒（極小）1%未満含む
7　10YR5/4　にぶい黄褐色　シルト　粘性少しあり　しまりあり
焼土粒ブロック（極小～小）1%未満
8　10YR5/4　にぶい黄褐色　シルト　粘性少しあり　しまりややあり
5YR5/8　明赤褐色　シルト　粘性なし　しまりあり
炭化物を層状に含む（厚さ5mm程度）
9　10YR4/2　灰黄褐色　シルト　粘性なし　しまりややあり
炭化物粒・焼土粒（極小～小）1%未満を含む
10　10YR4/4　褐色　シルト　粘性あり　しまりあり
炭化物を層状に含む（厚さ2cm、長さ5～8cm程度）
11　10YR4/4　褐色　粘土質シルト　粘性強い　しまりほとんどなし
水分を含む？　地下水道跡？
12　10YR3/4　暗褐色　シルト　粘性ややあり　しまりあり
焼土粒・黄褐色ブロック（極小）を含む
13　10YR3/3　暗褐色　シルト　粘性ややあり　しまりあり
黄褐色ブロック（小）・炭化物を含む
14　10YR3/3　暗褐色　シルト　粘性ややあり　しまりややあり
炭化物（極小）50%以上
15　10YR2/3　黒褐色　シルト　粘性ややあり　しまりあり
炭化物・焼土・黄褐色ブロックが層状、西に向かうに従いブロック状に変わる
西側は炭化物・焼土ほとんどなし。黄褐色ブロック（小～中）を含む
16　7.5YR3/2　黒褐色　シルト　粘性ややあり　しまりあり

3号住居

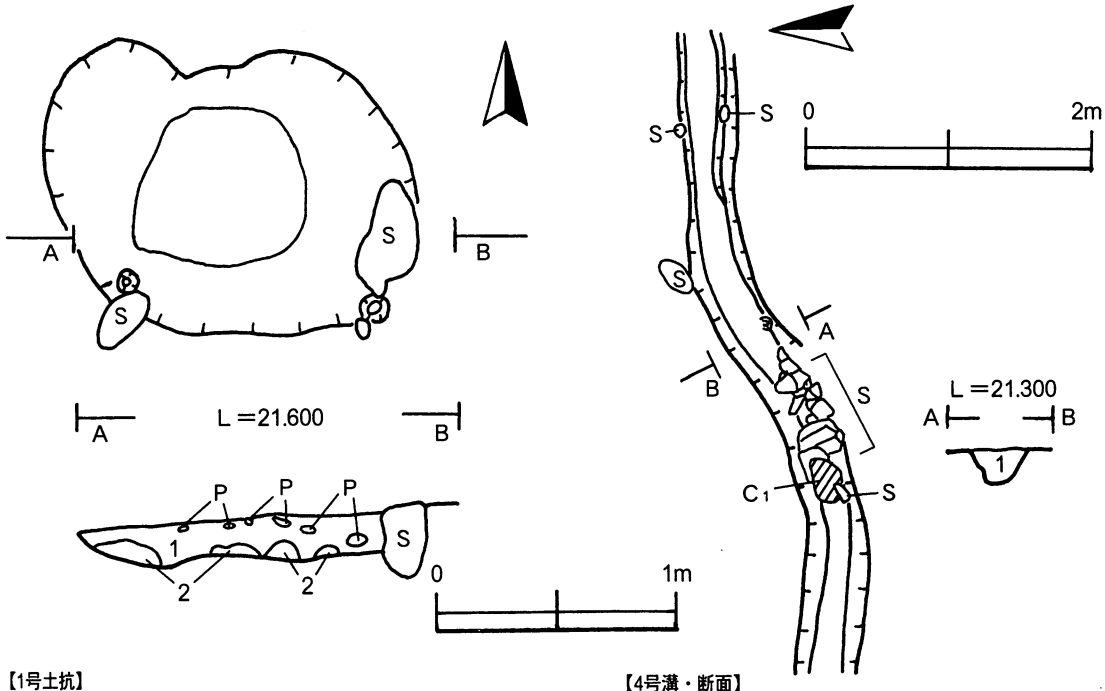
NO	長経 × 短経	深さ	備考
P1	30 × 30	32	
P2	35 × 30	39.2	
P3	80 × 60	15.5	地下水流の溜り？
P4	70 × 50	15.2	地下水流の溜り？
P5	45 × 30	27.7	
P6	60 × 50	42.2	
P7	40 × 35	10.7	P8と重複
P8	110 × 85	26.2	焼土下ピット

第10図　3号住居跡



掘立柱建物跡

NO	長径 × 短径	深さ	備考
P1	37 × 30	38.8	
P2	50 × 40	33.5	
P3	34 × 31	16.3	
P4	32 × 32	8.9	
P5	35 × 28	41.6	柱痕あり（径7cm）
P6	40 × 32	45.8	柱痕あり（径5cm）
P7	40 × 40	58.5	柱痕あり（径7cm）
P8	40 × 40	59.1	

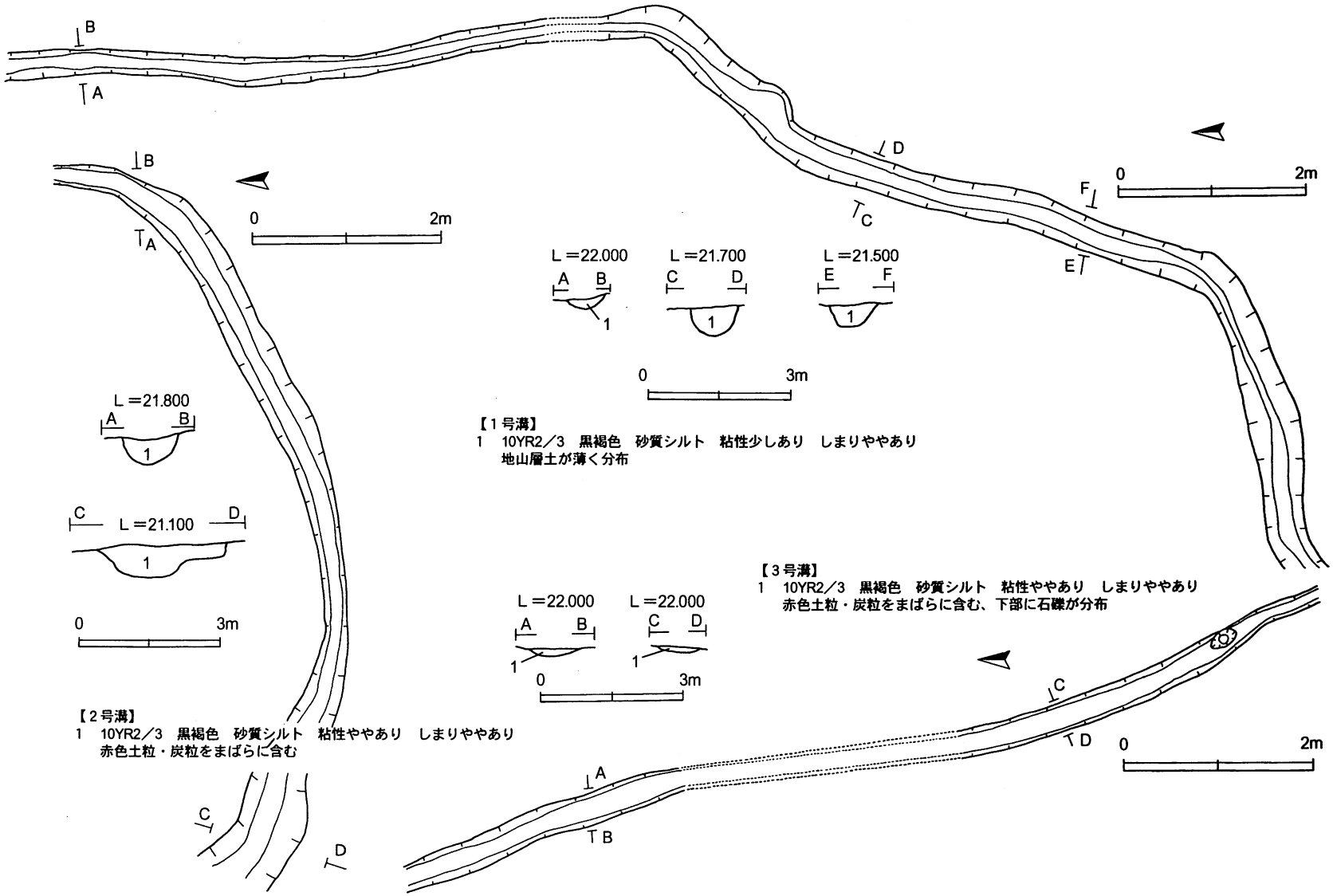


【1号土抗】
1　10YR3/2　黒褐色　　粘土質シルト　粘性ややあり　しまりややあり
　基本土層Ⅰ層を2%程度含む、黄色土粒まばらに含む
2　10YR5/3　にぶい黄褐色　砂　　粘性ややあり　しまりややあり
　地山層、1層を7%程度含む

【4号溝・断面】
1　10YR2/3　黒褐色　砂質シルト　粘性ややあり　しまりあり
　炭粒をまばらに含む、地山層を20%程度含む

【4号溝・炭化物】
C1　長さ25cm～30cm　厚さ4～5cm　炭片・塊が分布

第11図　掘立柱建物跡・１号土坑・４号溝


B
A
D
C
F
E
0
2m
L＝22.000
A
B
1
L＝21.700
C
D
1
L＝21.500
E
F
1
0
3m
【1号溝】
1　10YR2／3　黒褐色　砂質シルト　粘性少しあり　しまりややあり
地山層土が薄く分布
L＝21.800
A
B
1
C
L＝21.100
D
1
0
3m
【3号溝】
1　10YR2／3　黒褐色　砂質シルト　粘性ややあり　しまりややあり
赤色土粒・炭粒をまばらに含む、下部に石礫が分布
L＝22.000
A
B
1
L＝22.000
C
D
1
0
3m
【2号溝】
1　10YR2／3　黒褐色　砂質シルト　粘性ややあり　しまりややあり
赤色土粒・炭粒をまばらに含む

第12図　1～3号溝

2．出土遺物

(1) 分類について

本遺跡から出土した遺物には、縄文土器・土師器・須恵器・石器がある。比率で言えば土師器が最も多く、次いで須恵器となっており、この２つが出土遺物の中心を占めている。しかし、個体として再現できたものは少なく、破片での出土が多い。

そのため分類については、遺構内出土のもの・遺構外出土のものを含めて行うこととした。第一に縄文土器については、その施文手法などによって分類を行った。第二に土師器・須恵器については、出土した土器片の部位に着目し、その後調整の有無によって分類を行った。

【Ⅰ．縄文土器】　Ⅰ－Ａ：施文・沈線のみが施されているもの。
Ⅰ－Ｂ：沈線と刺突紋が施されているもの。
Ⅰ－Ｃ：化粧粘土（系）が施されているもの。

【Ⅱ．土師器】　１－Ａ：口縁～胴部で調整が施されているもの。
１－Ｂ：口縁～胴部で調整なしのもの。
２－Ａ：底部で調整が施されているもの。
２－Ｂ：底部で調整なしのもの。
３－Ａ：胴～底部で調整が施されているもの。
３－Ｂ：胴～底部で調整なしのもの。

【Ⅲ．須恵器】　Ⅲ－Ａ：口縁～胴部で調整が施されているもの。
Ⅲ－Ｂ：底部で調整が施されているもの。
Ⅲ－Ｃ：胴～底部で調整が施されているもの。

なお、石器については、まず出土地点（遺構内・遺構外）で大別し、その後器種によってまとめる。

それでは上記の分類にしたがって、以下では遺構内出土遺物・遺構外出土遺物の順番で、それぞれの主な特徴をまとめる。

(2) 遺構内出土遺物

こちらでは検出された遺構ごとに、上記の分類によって出土遺物についてまとめる。

［１号住居跡］（第13図１～３、第16図49～51、写真図版９、12）

１号住居跡からは、深鉢の胴部と推定される縄文土器片（１）と、土師器坏と推定される底部破片（２）、須恵器甕と推定される底部破片（３）、石箆（49）、石鏃（50）、剥片（51）が出土している。１は上記分類Ⅰ－Ｂに該当し、並行する２条の沈線によって区画された間に施文されている。時期は縄文中期に属すると思われる。２は上記分類２－Ａに該当し、内面には弱い黒色処理が施されており、底部には静止糸切りが見られる。３は上記分類Ⅲ－Ｂに該当し、外面に弱いタタキ、内面にロクロナデによる調整が見られる。49は埋土内より出土し、石質は頁岩である。50はⅤ層より出土し、石質は頁岩である。51は埋土内より出土し、石質はめのうである。

［２号住居跡］（第13図４～12、第14図13～22、第16図52～53、写真図版９～10、12）

２号住居跡からは、深鉢の胴部と推定される縄文土器片（４）、ロクロ使用の土師器甕片（５～７、９～11）、土師器坏片（８、12～13）、須恵器坏準完形（14）、坏片（15～21）、甕片（22）、石匙（52）、石箆（53）が出土している。４は分類Ｉ－Ａに該当している。全体に摩滅しており判別が難しいが、原体RLによって全体に施文されている。５、７～10は分類１－Ａ、11～13は分類２－Ａ、６は分類３－Ａにそれぞれ該当し、そのうち５～７、９～13は外面にロクロナデによる調整が見られる。さらに、５は外面にタタキ、内面にヨコナデ・カキ目による調整、６は外面にタタキ、内面にカキ目による調整、７は内面にロクロナデによる調整が見られる。９・11は、内面に黒色処理が施されている。８は内面にロクロナデによる調整が、12は底面に回転糸切り痕が見られる。13は内面に黒色処理が施されており、底部には台が付いている。14～22は分類Ⅲ－Ａに該当し、外面にロクロナデによる調整が見られる。このうち14～21は内面にもロクロナデによる調整が見られ、22にのみカキ目による調整が見られる。14は坏の準完形であり、底面には回転糸切り痕が見られるとともに、線刻による文字「田」が描かれている。52はＶ層より出土し、石質は（赤色）頁岩である。53は柱穴埋土内より出土し、石質は頁岩である。

［３号住居跡］（第14図23～34、第15図35～39、写真図版10～12）

３号住居跡からは、甕の胴部と推定される縄文土器片（23）、ロクロ使用の土師器準完形坏（24）、坏片（25）、甕片（28～30）、ロクロ未使用の土師器坏片（33）、甕片（26～27、31～32、34）、壺片（35）、須恵器坏片（36～37）、甕片（38～39）、石鏃（54）が出土している。23は分類Ｉ－Ｃに該当し、外面に化粧粘土が施されている。時期としては縄文晩期後葉（大洞ＡもしくはＡ′）に属すると思われる。25、28～30は分類１－Ａ、26～27、31は分類２－Ａ、32～35は分類３－Ａに該当し、24～25、28～30は外面にロクロナデによる調整が見られ、そのうち24と29は内面にもロクロナデによる調整が見られる。24は坏の準完形である。25～27、31～32は内面に黒色処理（31は一部のみ）が施されている。25の外面、27の内面には煤が付着している。26の底面には静止糸切り痕もしくは緩い回転糸切り痕と思われるものが見られる。28の内面はやや赤みがかっている。32は内面にヨコナデによる調整、33は外面にヘラケズリと思われる調整、34は外面にヘラナデと思われる調整、35は内面にカキ目と思われる調整が見られる。36～37は分類Ⅲ－Ａ、38～39は分類Ⅲ－Ｂに該当し、36～37は外面と内面の両方に、38は内面のみにロクロナデによる調整が見られる。また38の内面にはヨコナデによる調整、底面には静止糸切り痕が見られる。39は大甕の底部破片と推定され、その外面にはタタキによる調整が見られ、外面と内面の両方に釉が付着している。また底面には焼成の際に支えとしていたと思われる石が、そのまま貼りついている。54はＶ－３層より出土し、石質は珪質頁岩である。

［１号土坑］（第15図40～45、写真図版11）

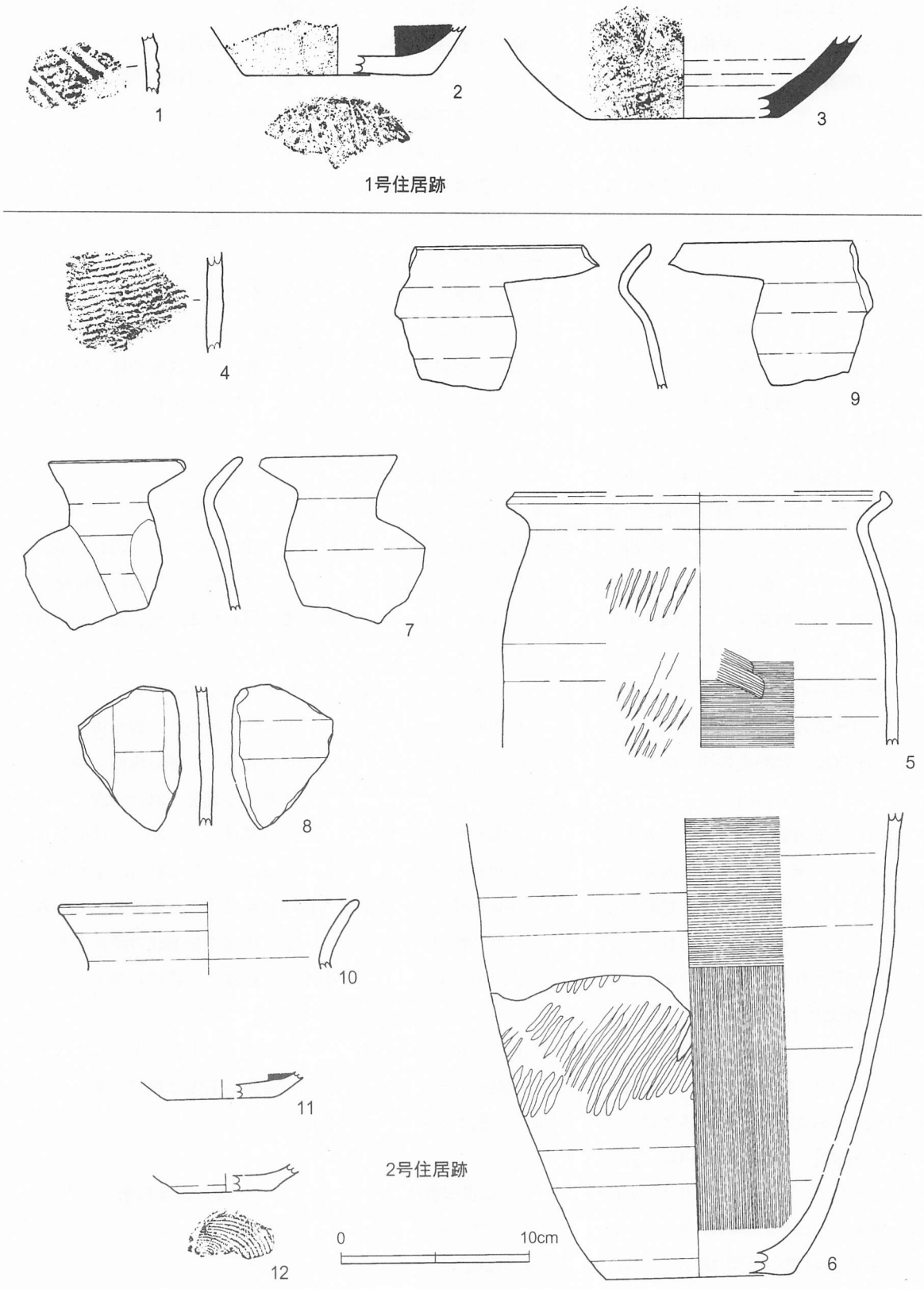
埋土内から、深鉢の破片と推定される縄文土器片（40～45）が出土した。分類はいずれもＩ－Ａに該当する。40～42は、口縁部の上端に連続する押圧文が見られる。43～45は、羽状縄文が全体に施文されている。時期的には縄文前期（上川名２式or大木１式系）に属するものと思われる。

［２号溝］（第15図46～47、写真図版12）

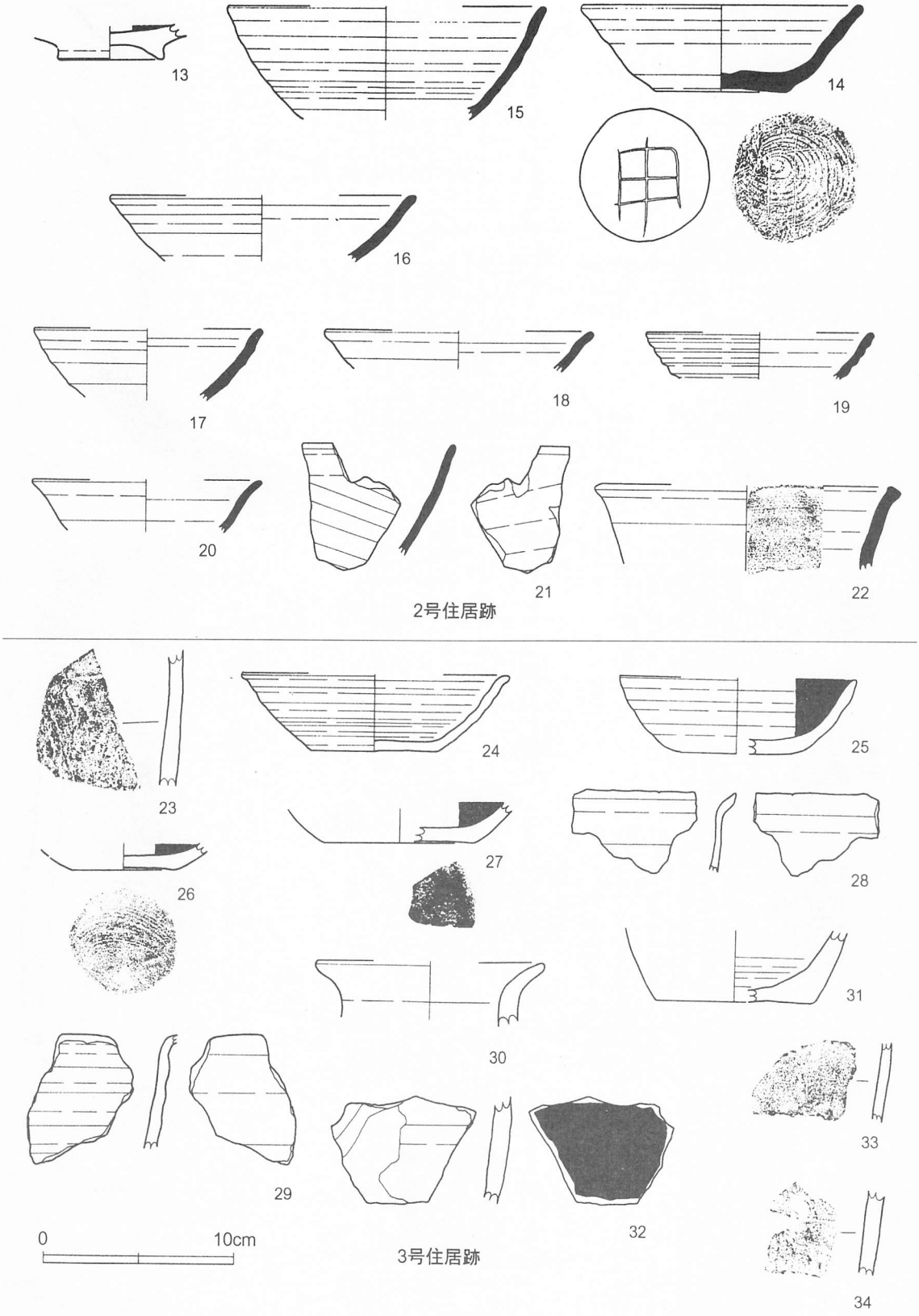
埋土内から、ロクロ未使用の土師器甕片（46）、須恵器甕片（47）が出土している。46は分類２－Ｂ、47は分類Ⅲ－Ｃにそれぞれ該当する。47の外面は、やや赤みががっている。

［Ｊ４区柱穴状土坑№47］（第15図48、写真図版12）

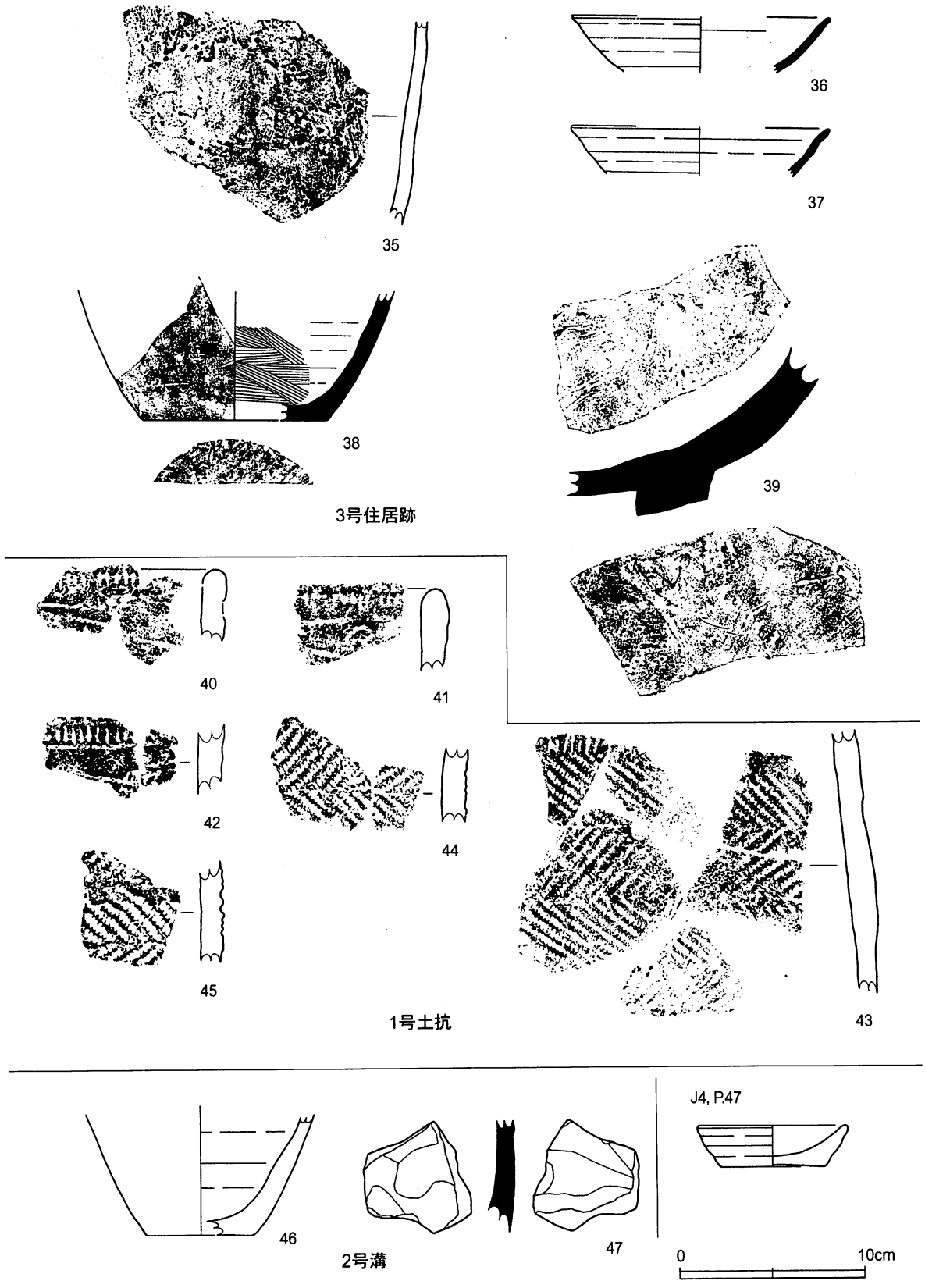
埋土内から、ロクロ使用の土師器坏完形（48）が出土した。外面にロクロナデによる調整が見られる。その大きさ・形状などからミニチュアであると思われる。



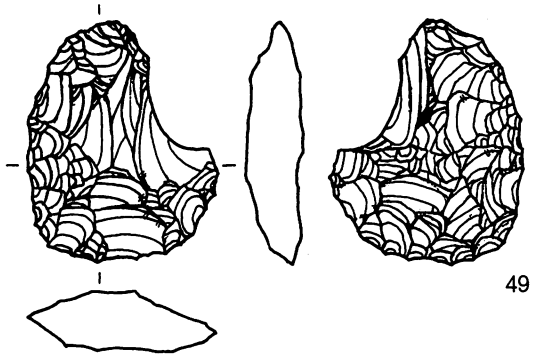
第13図　遺構内出土遺物（1）

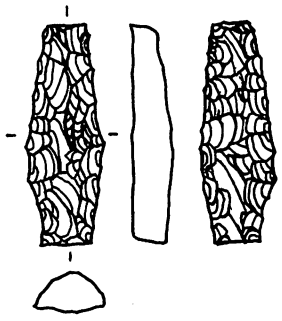


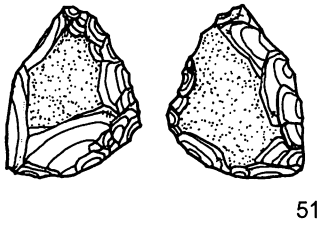
第14図　遺構内出土遺物（2）



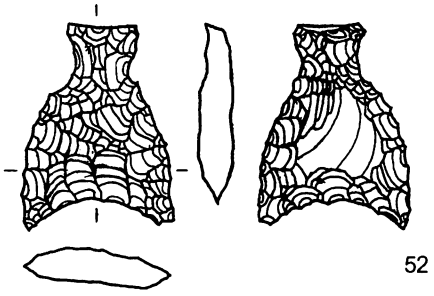
第15図　遺構内出土遺物（3）

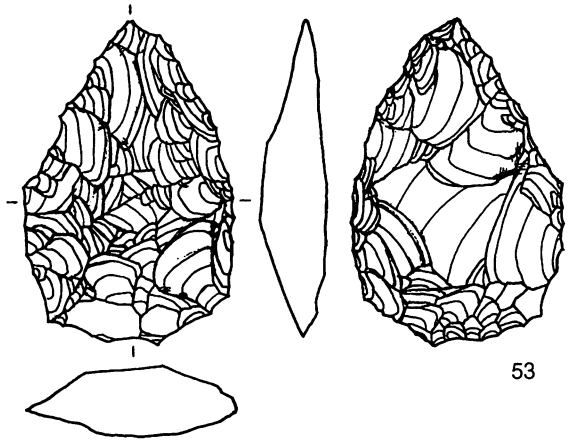




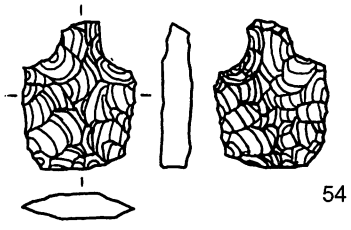


1号住居跡

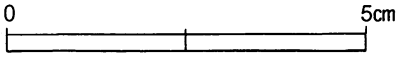




2号住居跡



3号住居跡



第16図　遺構内出土遺物（4）

第３表　遺構内出土遺物観察表

種別　Ⅰ：縄文土器、Ⅱ：土師器、Ⅲ：須恵器

No.	種別	分類	出土地点	層　位	器種	部位	外　面	内　面	底　面	口径cm	底径cm	器高cm	備考（胎土、色調など）
1	Ⅰ	Ⅰ－B	1号住居	Ⅴ	深鉢？	胴部	並行する2条の沈線の間に施文						縄文中期？
2	Ⅱ	2－A	1号住居	埋土	坏？	底部		弱い黒色処理	静止糸切り痕		(9.8)	2.6	5YR6／8橙　砂粒を含む　やや粗い
3	Ⅲ	Ⅲ－B	1号住居	埋土	甕？	底部	弱いタタキ	ロクロナデ			(10.2)	4.4	N6／0灰
4	Ⅰ	Ⅰ－A	2号住居	周溝（埋土）	深鉢	胴部							縄文中期？
5	Ⅱ	1－A	2号住居	Ⅴ－0、床面直上	甕？	口縁～胴部	ロクロナデ、タタキ	ヨコナデ、カキ目		(20.0)		13.5	7.5YR6／6橙
6	Ⅱ	3－A	2号住居	床面(カマド付近)	甕？	胴部～底部	ロクロナデ、タタキ	カキ目			10.0	24.5	7.5YR6／6橙
7	Ⅱ	1－A	2号住居	Ⅴ－1～2	甕	口縁～胴部	ロクロナデ	ロクロナデ				8.9	5YR7／6橙
8	Ⅱ	1－A	2号住居	Ⅴ－1	坏？	口縁		ロクロナデ				7.7	10YR8／3浅黄橙
9	Ⅱ	1－A	2号住居	埋土	甕	口縁	ロクロナデ	黒色処理？		(21.0)		7.2	10YR8／6黄橙
10	Ⅱ	1－A	2号住居	Ⅴ	甕	口縁	ロクロナデ			(16.0)		3.5	10YR8／2灰白　金雲母を含む
11	Ⅱ	2－A	2号住居	埋土（カマド）	甕	底部	ロクロナデ	黒色処理		(6.0)		1.0	7.5YR6／8橙
12	Ⅱ	2－A	2号住居	Ⅴ－3	坏？	底部	ロクロナデ		回転糸切り痕		(5.0)	1.0	10YR8／3浅黄橙
13	Ⅱ	2－A	2号住居	Ⅴ－1 or Ⅴ－2	坏？	底部	ロクロナデ	黒色処理	台付		(5.6)	1.2	2.5YR6／8橙　石英・砂粒を含む、やや粗い
14	Ⅲ	Ⅲ－A	2号住居	埋土	坏	準完形	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り痕、線刻文字「田」	14.8	6.8	6.8	N7／0灰白
15	Ⅲ	Ⅲ－A	2号住居	埋土	坏	口縁	ロクロナデ	ロクロナデ		(16.6)		(6.0)	N8／0灰白　不完全焼成、砂粒を含む
16	Ⅲ	Ⅲ－A	2号住居	埋土	坏？	口縁	ロクロナデ	ロクロナデ		(16.0)		3.5	5BG5／1暗青灰
17	Ⅲ	Ⅲ－A	2号住居	床面(カマド付近)	坏	口縁	ロクロナデ	ロクロナデ		(12.0)		3.8	N7／0灰白
18	Ⅲ	Ⅲ－A	2号住居	床面（直上）	坏	口縁	ロクロナデ	ロクロナデ		(14.0)		2.1	2.5GY7／1明オリーブ灰
19	Ⅲ	Ⅲ－A	2号住居	埋土	坏	口縁	ロクロナデ	ロクロナデ		(12.0)		2.4	N6／0灰
20	Ⅲ	Ⅲ－A	2号住居	床面	坏	口縁	ロクロナデ	ロクロナデ		(12.0)		2.7	N5／0灰
21	Ⅲ	Ⅲ－A	2号住居	周溝（埋土）	坏？	口縁	ロクロナデ	ロクロナデ				6.1	N7／1灰白
22	Ⅲ	Ⅲ－A	2号住居	Ⅴ－1	甕？	口縁	ロクロナデ	カキ目		(16.0)		4.0	N5／0灰
23	Ⅰ	Ⅰ－C	3号住居	埋土（カマド）	甕	胴部	化粧粘土が施されている？						大洞AもしくはA'(縄文晩期後葉）の可能性あり
24	Ⅱ		3号住居	Ⅴ（カマド脇）	坏	準完形	ロクロナデ	ロクロナデ		14.0	6.6	4.0	2.5Y8／2灰白
25	Ⅱ	1－A	3号住居	埋土	坏	口縁～底部	ロクロナデ、煤が付着？	黒色処理		12.4	6	3.9	10YR8／3浅黄橙
26	Ⅱ	2－A	3号住居	Ⅴ－3	甕	底部		黒色処理	静止糸切り痕or緩い回転糸切り痕		5.4	1.0	7.5YR6／8橙
27	Ⅱ	2－A	3号住居	埋土	甕？	底部		黒色処理	煤が付着？		(8.0)	1.7	2.5Y8／3淡黄

No.	種別	分類	出土地点	層　位	器種	部位	外　面	内　面	底　面	口径cm	底径cm	器高cm	備考（胎土、色調など）
28	Ⅱ	1－A	3号住居	埋土	甕	口縁	ロクロナデ	赤みがかっている				4.3	10YR8／3浅黄橙
29	Ⅱ	1－A	3号住居	埋土(カマド脇ピット)	甕？	口縁	ロクロナデ	ロクロナデ		(12.0)		5.2	10YR8／4浅黄橙
30	Ⅱ	1－A	3号住居	V－1	甕	口縁	ロクロナデ			(12.0)		3.0	2.5Y8／2灰白
31	Ⅱ	2－A	3号住居	埋土（カマド）	甕？	底部		一部黒色処理？			(8.4)	3.7	2.5YR7／6橙　石英・砂粒を含む、やや粗い
32	Ⅱ	3－A	3号住居	埋土（南壁際）	甕	胴部		黒色処理、ヨコナデ				5.5	10YR8／4浅黄橙
33	Ⅱ	3－A	3号住居	埋土	坏	胴部	ヘラケズリ？						10YR8／5浅黄橙
34	Ⅱ	3－A	3号住居	埋土（南壁際）	甕	胴部	ヘラナデ？						7.5YR7／6橙
35	Ⅱ	3－A	3号住居	埋土	壷？	胴部		カキ目？					7.5YR7／8黄橙
36	Ⅲ	Ⅲ－A	3号住居	埋土(焼土下ピット)	坏？	口縁	ロクロナデ	ロクロナデ		(14.0)		3.0	N4／0灰、口縁部の焼成が不十分(N8／0灰白)
37	Ⅲ	Ⅲ－A	3号住居	埋土	坏？	口縁	ロクロナデ	ロクロナデ		(14.0)		2.6	2.5Y8／2灰白
38	Ⅲ	Ⅲ－B	3号住居	V－2 or V－3	甕？	底部		ロクロナデ、ヨコナデ	静止糸切り痕		(10.0)	7.0	N6／0灰
39	Ⅲ	Ⅲ－B	3号住居	埋土	大甕	底部	タタキ、柚が付着	柚が付着	支えの石がそのまま貼りついている				10BG3／1暗青灰
40	Ⅰ	Ⅰ－A	1号土坑	埋土	深鉢	口縁	口縁部に連続する押圧文						縄文前期（上川名2式or大木1式 系）
41	Ⅰ	Ⅰ－A	1号土坑	埋土	深鉢	口縁	口縁部に連続する押圧文						縄文前期（上川名2式or大木1式 系）
42	Ⅰ	Ⅰ－A	1号土坑	埋土	深鉢	胴部	口縁部に連続する押圧文						縄文前期（上川名2式or大木1式 系）
43	Ⅰ	Ⅰ－A	1号土坑	埋土	深鉢	口縁～胴部	羽状縄文						縄文前期（上川名2式or大木1式 系）
44	Ⅰ	Ⅰ－A	1号土坑	埋土	深鉢	胴部	羽状縄文						縄文前期（上川名2式or大木1式 系）
45	Ⅰ	Ⅰ－A	1号土坑	埋土	深鉢	胴部	羽状縄文						縄文前期（上川名2式or大木1式 系）
46	Ⅱ	2－B	2号溝	埋土	甕	底部					(5.8)	6.6	5YR6/6橙　石英・砂粒を含む、やや粗い
47	Ⅲ？	Ⅲ－C	2号溝	埋土	甕？	胴部	赤みがかっている	灰白色				4.6	7.5YR7／6橙
48	Ⅱ		J4・P46	埋土	坏	完形	ロクロナデ			8.2	5.6	2.3	10YR8／2灰白、金雲母・石英・砂粒を含む

No.	出土地点	層　位	器種	石　質	産　地	長さcm	幅cm	厚さcm	重量g	備　考
49	1号住居	埋土	石箆？	頁岩	奥羽山脈？	3.4	2.2	0.8	6.7	
50	1号住居	V層	石鏃	頁岩	奥羽山脈？	2.0	1.0	0.6	2.0	
51	1号住居	埋土	剥片	めのう	奥羽山脈	1.4	1.9	0.6	3.4	
52	2号住居	V層	石匙	（赤色）頁岩	北上山地	1.4	2.0	0.5	2.8	
53	2号住居	柱穴埋土	石箆？	頁岩	奥羽山脈？	4.5	2.9	0.9	10.5	
54	3号住居	V－3層	石鏃	珪質頁岩	北上山地	2.0	1.5	0.4	1.4	

(3) 遺構外出土遺物

遺構外での遺物の出土は、その多くがＫ２～４区（３号住居跡北側周辺～２号住居跡西側周辺）とＬ２～４区（３号住居跡周辺）に見られ、層位的にもそのほとんどが、Ｖ層（特にＶ－２～３層）において出土している。

Ａ．縄文土器

Ⅰ－Ａ類：施文・沈線のみが施されているもの（第17図55～57、写真図版13）

55は深鉢の口縁部であり、56、57は深鉢の胴部である。いずれも原体ＬＲによって全体に施文されており、57は一度横位で全体に施文した後、縦位に施文を重ねた部分が見られる。時期については特定が難しいが、縄文後期に属すると思われる。

Ｂ．土師器

１－Ａ類：口縁～胴部で調整が施されているもの（第17図58～64、写真図版13）

いずれも甕片であり、58～59、64は口縁～胴部、63は頸部、60、62、64は口縁部である。58～59、61～64は外面にロクロナデによる調整、60は外面にミガキによる調整が見られる。さらに58、60、64は内面にロクロナデによる調整、58～59は内面にヨコナデによる調整、59は内面にヘラナデによる調整が見られる。

２－Ａ類：底部で調整が施されているもの（第17図65～69、第18図73、75、写真図版13～14）

65は外面にヘラナデと思われる調整、68～69、75は外面にロクロナデによる調整、73はヘラ削りと思われる調整が見られる。また66、75は内面にヨコナデによる調整が見られ、65～66、68～69は内面に黒色処理が施されている。65の底面には、静止糸切り痕と思われるものが見られる。67の底面には、回転糸切り痕と思われるものが見られる。75の底面には台が付いている。

２－Ｂ類：底部で調整なしのもの（第18図70～72、74、写真図版13～14）

70の底面には煤が付着している。71～72の底面には、木葉痕（71はやや弱い）が見られる。

３－Ａ類：胴～底部で調整が施されているもの（第18図76～79、写真図版14）

76、78は外面にロクロナデによる調整が見られ、79は外面に煤が付着している。76～77は内面にロクロナデによる調整、78～79は内面にカキ目による調整が見られる。また77は内面に黒色処理が施されている。

Ｃ．須恵器

Ⅲ－Ａ類：口縁～胴部で調整が施されているもの（第18図82、写真図版14）

82は内面・外面ともにロクロナデによる調整が見られる。

Ⅲ－Ｂ類：底部で調整が施されているもの（第18図80～81、写真図版14）

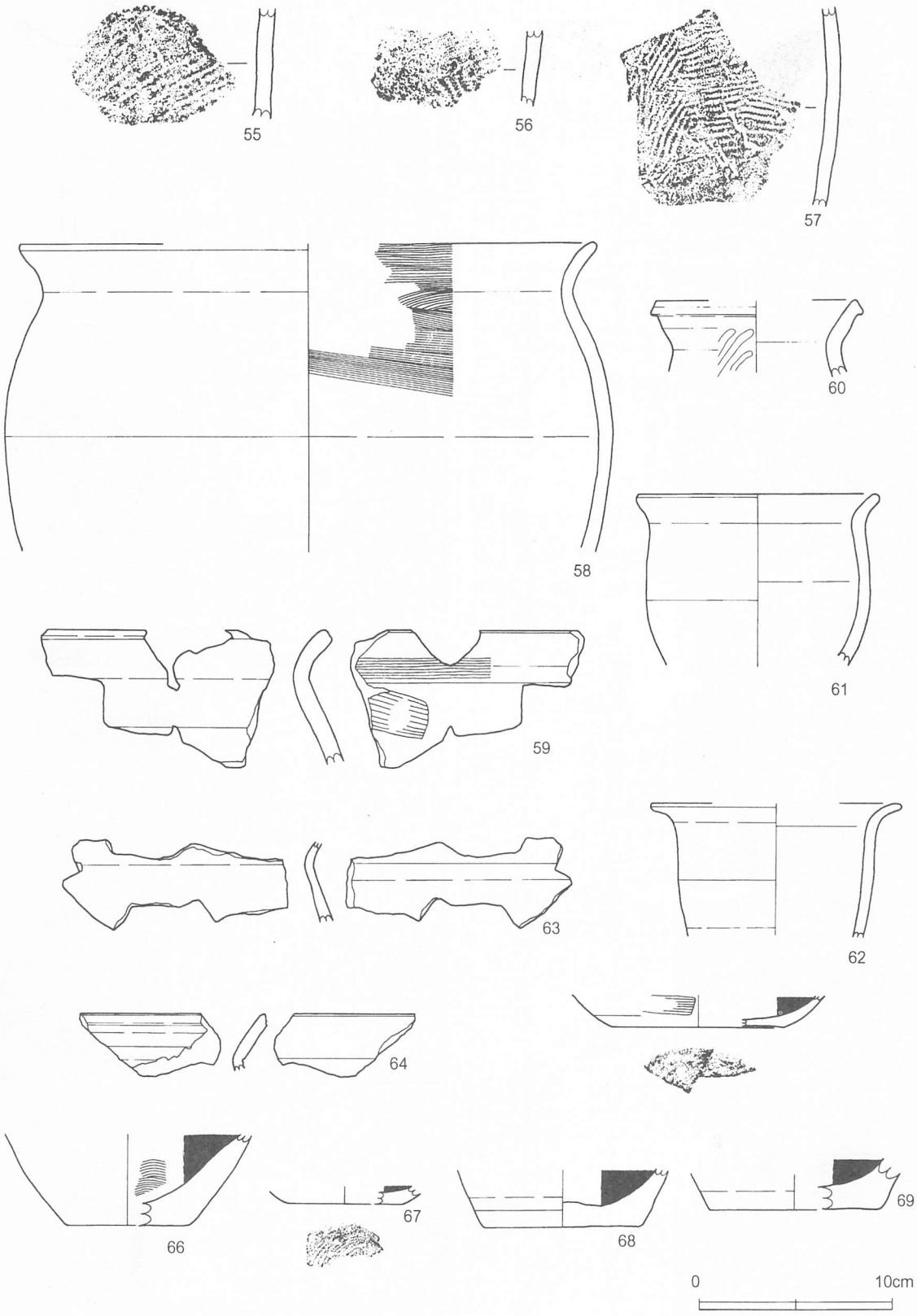
80は外面にロクロナデによる調整、内面に釉の付着が見られる。81は内面にロクロナデによる調整が見られる。80の底面には台が付いている。81の底面には、回転糸切り痕が見られる。

Ⅲ－Ｃ類：胴～底部で調整が施されているもの（第18図83～87、写真図版14）

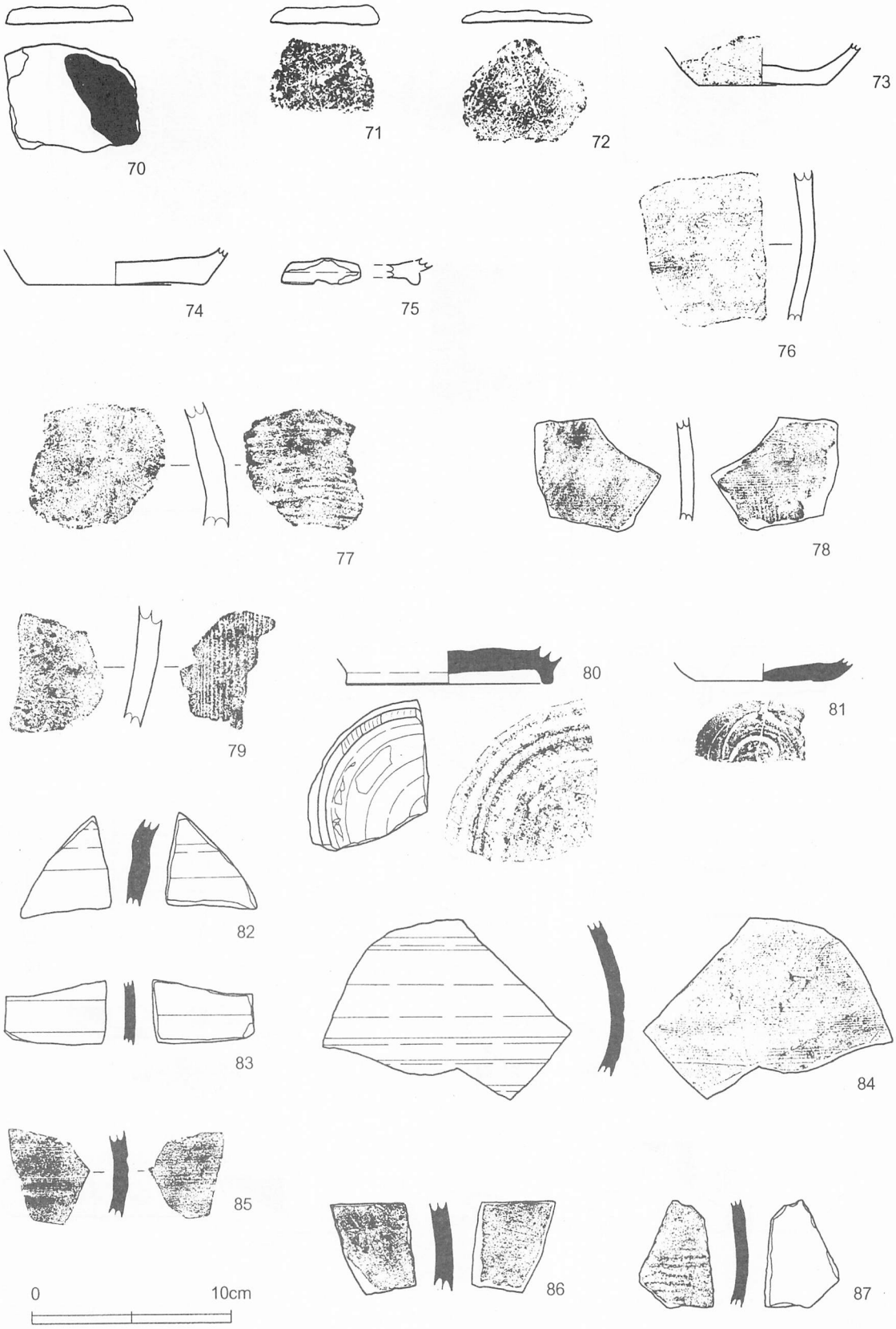
83～85は外面にロクロナデによる調整、87は外面にタタキによる調整が見られる。82～83、86は内面にロクロナデによる調整、84～85はカキ目による調整、87はヨコナデによる調整が見られる。

Ｄ．石器（第19～20図88～92、写真図版15）

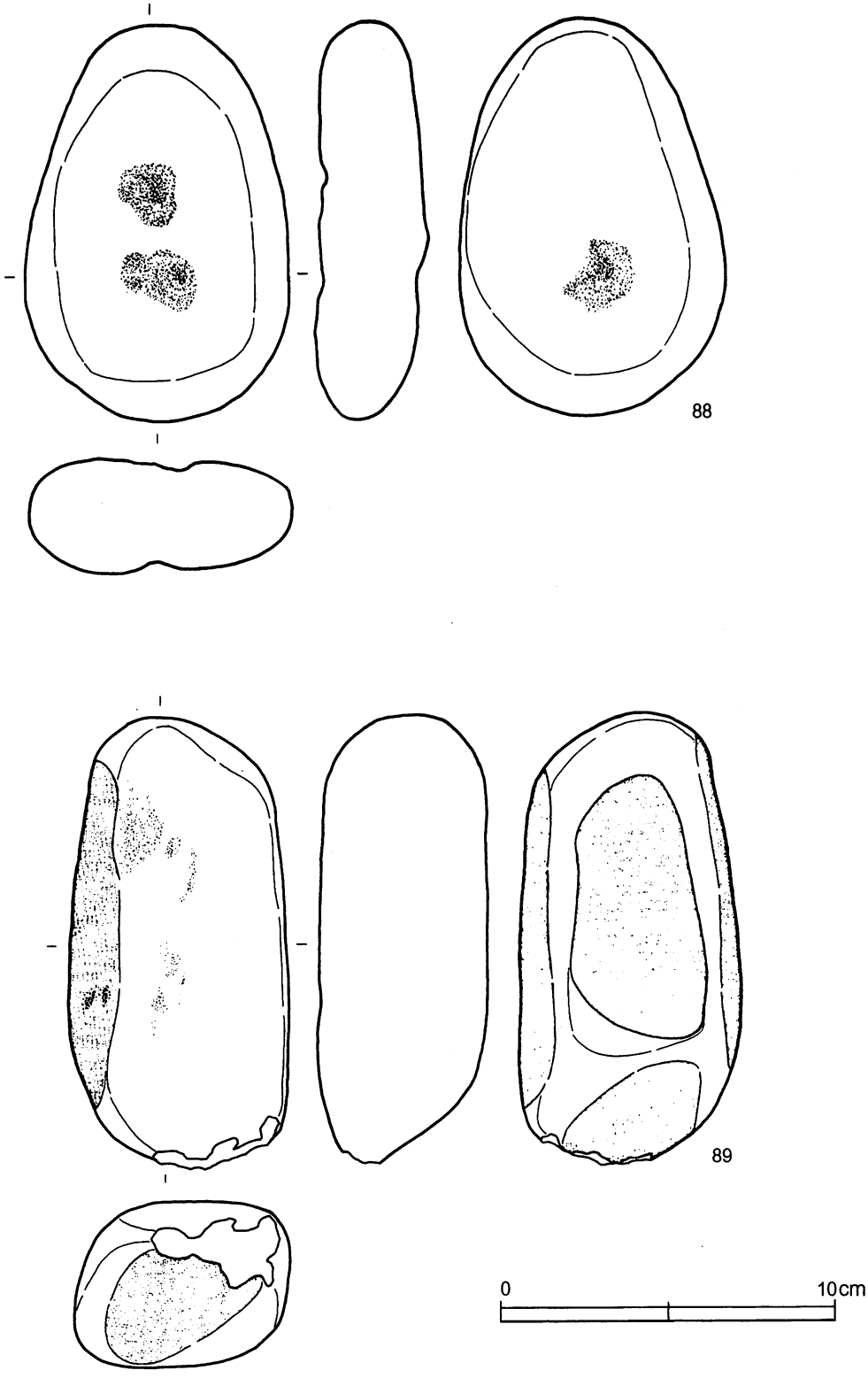
凹石が１点（88）、敲石が１点（89）、磨石が１点（90）、剥片が２点（91～92）出土している。88はＫ３区より出土し、石質は安山岩である。89、90は共にＬ４区より出土し、石質は89が安山岩、90が頁岩である。91はＡ５区より出土し、石質は黒曜石である。91は調査区北側（詳細な位置は不明）より出土し、石質は頁岩である。また90と91は、ともにⅢ層より出土している。



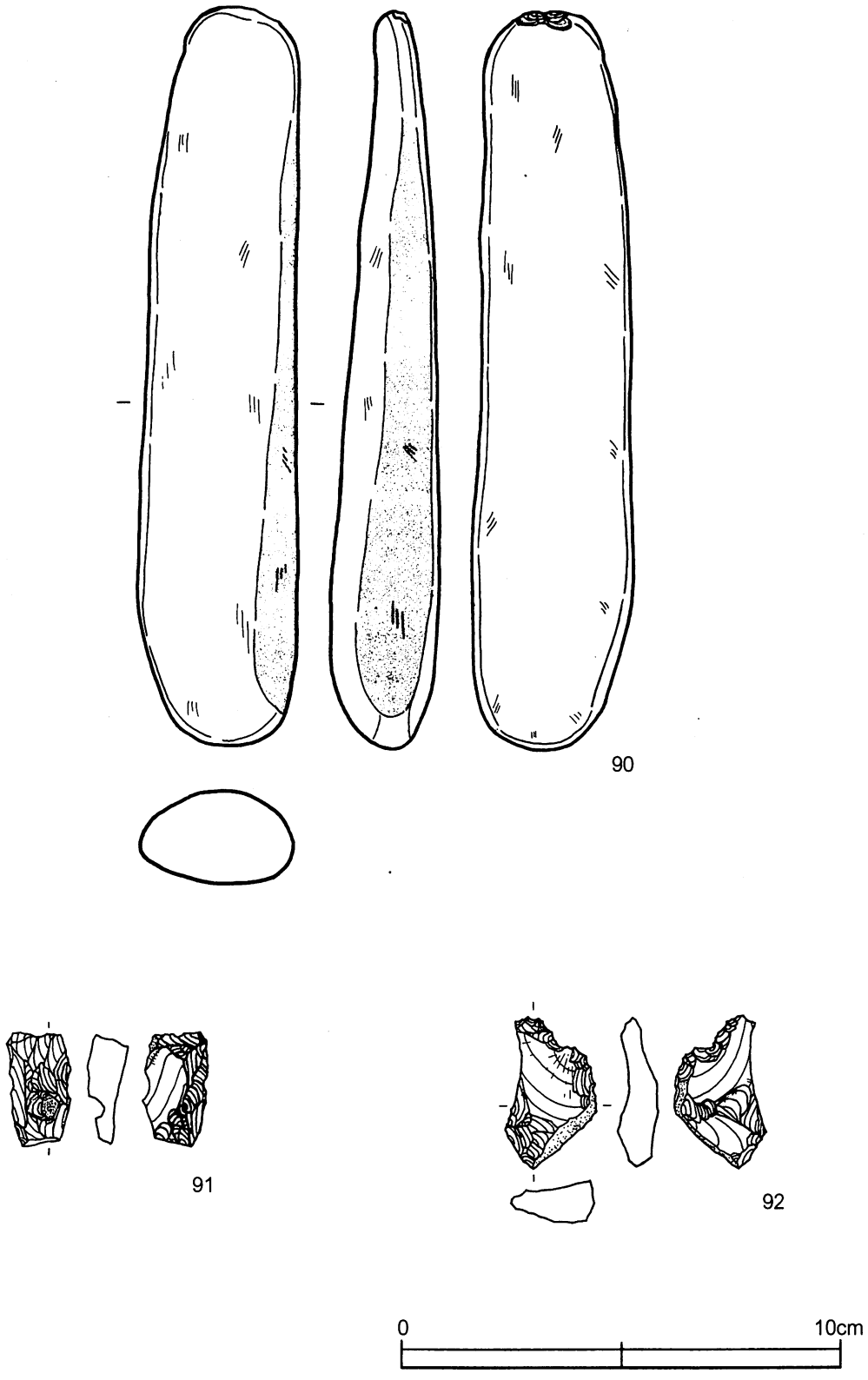
第17図　遺構外出土遺物（1）



第18図　遺構外出土遺物（2）



第19図　遺構外出土遺物（3）



第20図　遺構外出土遺物（4）

第４表　遺構外出土遺物観察表

種別　Ⅰ：縄文土器、Ⅱ：土師器、Ⅲ：須恵器

No.	種別	分類	出土地点	層　位	器種	部位	外　面	内　面	底　面	口径cm	底径cm	器高cm	備考（胎土、色調など）
55	Ⅰ	Ⅰ－A	E４	V－３	深鉢	口縁	原体：LR						縄文後期？
56	Ⅰ	Ⅰ－A	E４	V－３	深鉢	胴部	原体：LR						縄文後期？
57	Ⅰ	Ⅰ－A	K４	V－２orV－３	深鉢	胴部	原体：LR						縄文後期？
58	Ⅱ	１－A	D3,文化課トレンチ	V－３	甕	口縁～胴部	ロクロナデ	ロクロナデ、ヨコナデ		(30.0)		16.0	7.5YR7／6橙
59	Ⅱ	１－A	文化課トレンチ	埋土	甕	口縁～胴	ロクロナデ	ヨコナデ、ヘラナデ？		(21.8)		6.8	7.5YR8／4浅黄橙　砂粒・石英を含む
60	Ⅱ	１－A	K３	V－２	甕	口縁	ミガキ	ロクロナデ		(11.0)		2.1	2.5Y8／2灰白
61	Ⅱ	１－A	L４	Ⅲ、V－１	甕	口縁～胴部	ロクロナデ			(12.6)		(8.9)	10YR8／3浅黄橙　砂粒・石英を含む
62	Ⅱ	１－A	J５	V	甕？	口縁	ロクロナデ			(13.0)		6.9	5YR6／8橙　石英・砂粒を含む
63	Ⅱ	１－A	K４	V－２orV－３	甕	頸部	ロクロナデ					4.4	5YR7／6橙　砂粒含む
64	Ⅱ	１－A	K２	V－２orV－３	甕	口縁	ロクロナデ	ロクロナデ		(23.0)		2.3	10YR7/4にぶい黄橙 石英・砂粒含む、やや粗い
65	Ⅱ	２－A	K２	V－２orV－３	坏	底部	ヘラナデ？	黒色処理	静止糸切り痕？		(9.0)	1.7	10YR8／3浅黄橙
66	Ⅱ	２－A	K２	V－２orV－３	甕	底部		ヨコナデ、黒色処理			(6.4)	4.8	10YR7/4にぶい黄橙 石英・砂粒含む、やや粗い
67	Ⅱ	２－A	文化課トレンチ	埋土	坏？	底部		黒色処理	回転糸切り痕？	(6.0)		0.6	7.5YR7／6橙
68	Ⅱ	２－A	L２	埋土	甕	底部	ロクロナデ	黒色処理			(8.2)	3.0	10YR7/4にぶい黄橙 石英・砂粒含む、やや粗い
69	Ⅱ	２－A	L４	V－２orV－３	甕	底部	ロクロナデ	黒色処理			(8.8)	1.9	10YR7/4にぶい黄橙 石英・砂粒含む、やや粗い
70	Ⅱ	２－B	L４	V－２orV－３	甕？	底部			煤が付着				10YR6/4にぶい黄橙 石英・砂粒含む、やや粗い
71	Ⅱ	２－B	K４	V－２orV－３	甕	底部			弱い木葉痕			0.9	10YR7/4にぶい黄橙 石英・砂粒含む、やや粗い
72	Ⅱ	２－B	K２	V－３	甕？	底部			木葉痕			0.5	7.5YR6／6橙
73	Ⅱ	２－A	L４	V－２orV－３	甕？	底部	ヘラ削り？				(6.4)	1.9	5YR7／6橙　砂粒含む
74	Ⅱ	２－B	K２	V－２orV－３	甕	底部					(9.0)	1.7	10YR8／4浅黄橙
75	Ⅱ	２－A	文化課トレンチ	埋土	坏？	底部	ロクロナデ	ロクロナデ	台付		(5.0)	1.0	10YR8／4浅黄橙
76	Ⅱ	３－A	D３	V－３	甕	胴部	ロクロナデ	ロクロナデ					7.5YR8／4浅黄橙
77	Ⅱ	３－A	K２	V－２orV－３	甕	胴部		黒色処理、ロクロナデ					5YR6／8橙
78	Ⅱ	３－A	K４	V－２orV－３	甕	胴部	ロクロナデ、タタキ	カキ目				5.0	5YR6／8橙　砂粒含む
79	Ⅱ	３－A	L３	V－３	甕	胴部	煤？が付着	カキ目？					5YR6／6橙
80	Ⅲ	Ⅲ－B	文化課トレンチ	埋土	壷？	底部	ロクロナデ	柚の付着	台付		(10.4)	1.3	N5／0灰
81	Ⅲ	Ⅲ－B	L４	V－２orV－３	坏？	底部		ロクロナデ	回転糸切り痕		(7.0)	0.9	7.5Y8／1灰白　不完全焼成？
82	Ⅲ	Ⅲ－A	K４	V－２orV－３	甕	口縁？	ロクロナデ	ロクロナデ				4.5	10YR8／3浅黄橙
83	Ⅲ	Ⅲ－C	K４	V－３	甕	胴部	ロクロナデ	ロクロナデ				3.1	5Y8／3淡黄　不完全焼成？
84	Ⅲ	Ⅲ－C	J６	V－３	甕	胴部	ロクロナデ	カキ目				7.6	N4／0灰
85	Ⅲ	Ⅲ－C	文化課トレンチ	埋土	壷？	胴部	ロクロナデ	カキ目					N7／0灰白
86	Ⅲ	Ⅲ－C	D３	V－３	甕	胴部		ロクロナデ				4.4	N3／0暗灰
87	Ⅲ	Ⅲ－C	文化課トレンチ	埋土	壷？	胴部	タタキ	ヨコナデ				5.0	N6／0灰白

No.	出土地点	層　位	器種	石　質	産　地	長さcm	幅cm	厚さcm	重量g	備　考
88	K３	V－２層	凹石	安山岩	奥羽山脈	12.0	7.9	3.2	433.1	
89	L４	V－２層orV－３層	敲石	安山岩	奥羽山脈	13.5	6.6	5.0	707.1	
90	L４	V－２層orV－３層	磨石	頁岩	北上山地	15.8	3.7	2.5	205.3	
91	A５	Ⅲ層	剥片	黒曜石	（産地不明）	2.6	1.4	1.1	3.4	
92	北側	Ⅲ層	剥片	頁岩	奥羽山脈？	3.4	1.9	0.9	5.9	

V　調査のまとめ

最後に、今回の調査で検出された遺構・遺物について事実記載の項目を中心に、若干の考察を含めてまとめてみたい。

1　検出された遺構について

(1)　竪穴住居跡

今回の調査で検出された竪穴住居跡（以下、住居跡と略す）は、全部で３棟である。これらについて、事実記載の項目についてまとめる。

なお、以下の記述においては、検出された住居跡３棟のうち２棟（２・３号住居跡）について、どちらも調査区外まで範囲が延びていたこと、加えて２号住居跡は調査前の段階で、その多くが床面まで削平を受けていたこともあり、この２つに関する内容については一部分しか明らかにできないもの、もしくは明らかになっている部分からの推定によるものが多くなっていることを、予めご容赦いただきたいと願う。

［位置・地形］　いずれの住居跡も、西を流れる北上川の左岸に形成発達した河岸段丘上に立地している。１・３号住居跡は、どちらもＶ層面を初めとして地山層まで掘りこんで床面が作られている。２号住居跡についても、残存する周溝が地山層まで掘りこまれていることから、１・３号住居跡と同様のものであったと推定される。住居跡の位置する河岸段丘は、北上川に向かって緩やかに傾斜してはいるがほぼ平坦で、周囲の地形よりわずかに高い位置にあり、今回調査が行われなかった南側周辺部にも同様の地形が存在しているため、さらなる遺構の存在が推定される。

［平面形］　２号住居跡は検出された周溝跡の形状からの推定、３号住居跡は調査区内で検出された範囲からの推定となるが、検出された住居跡はほぼ方形もしくは長方形を基調としているものの２つに大別できると考えられる。１号住居跡は１辺が約2.5ｍのほぼ方形を呈している。２号住居跡は北側で検出された周溝の長さが約4.95ｍで、これが長方形を呈すると思われる住居跡の短片を形成しているものと考えることができる。残存する部分での長辺の長さは、２号住居跡の柱穴と思われるP1からP5を結んで、それを調査区境の壁際まで延ばした線の長さ＝約5.2ｍである。３号住居跡は北側壁の長さが約4.8ｍ、検出されたカマドの位置が東側壁の中央であると仮定すると、北壁右端からカマドのある位置までの長さは約2.4ｍとなり、ほぼ半分の長さとなる。このことから３号住居跡は、１辺が約4.8ｍのほぼ方形を呈しているのではないかと推定される。

［規模］　１号住居の床面積は約6.25㎡、３号住居は上記項目での推定を元に計算すると約23㎡となる。１号住居跡は３号住居跡の約４分の１の床面積である。２号住居については多くが床面まで削平を受けているため、検出された周溝から推定できる範囲のみでの計算となるが、その範囲の床面積は約23㎡となる。

［軸方向］　１号住居跡は炭粒がまとまった範囲で検出された西壁に直行する線を、２号住居跡は周溝の延びている方向に平行する線を、３号住居跡はカマドのある東壁に直行する線を想定し、それぞれに公共座標第Ｘ系の基線との角度を軸方向とした。その結果、軸方向がＥ－Ｗ方向を向くもの（１・３号住居跡）、Ｎ－Ｓ方向を向くもの（２号住居跡）の２つに大別することができる。軸方向Ｅ－Ｗは、調査区地形（河岸段丘）の緩やかな傾斜（西方向に向かって下っている）に沿っている。

［カマド・焼土・炭化物］　カマドは３号住居跡のみで検出された。位置は東壁中央にあるものと思われるが、本体や袖部・煙道などの明確な施設は見つかっておらず、燃焼部と推定される中央部にまとまって

いる焼土および炭粒を含む土の広がりが確認できたのみにとどまっている。これは本体などが調査区外に存在している、もしくはカマドを含む周辺が本調査区の中でも特に地下水流が集まっている部分であることから、それらによって流されている可能性が高いと思われる。焼土は2号住居跡で2ヶ所、3号住居跡で3ヶ所（カマドを除く）を検出した。2号住居跡の焼土についてはその位置が隣接していること、その直下から出土する遺物が内容的に相似していることなどから、もともと1つのまとまりであったのではないかと推定される。3号住居跡の焼土については、2ヶ所が焼土下ピット（P8）の直上とそのすぐ脇で検出されており、レベルもほぼ同じであることから同時に使われていたものと思われる。炭化物については、2・3号住居跡ではカマドや焼土にともなって検出されているが、1号住居跡では西壁側においてそれがややまとまった広がりで検出されている。その中でも、住居跡西北端から住居跡中央部に向かって、直上に大小の炭化材を含む幅約30㎝、長さ約70㎝の土のまとまりが存在しており、これは焼失した柱の跡でありこの住居跡自体が焼失住居跡ではないかという助言を得た。

［柱穴］　いずれの住居跡においても、柱穴が確認された。1号住居跡はP1、P2、P3、P6の4つを主柱穴と認定した。P1、P3、P6がいずれもそれぞれの壁際中央部に存在することから、北側壁際にも柱（穴）が存在したものと推定される。それを含めて1号住居跡は、5本柱による住居跡であったと思われる。しかし、野外調査時には推定される位置に円形に近い浅い凹みが見られたものの、はっきりとした検出はできなかった。またP2では、隣り合った2本分の柱穴の掘りこみが確認されており、これは住居跡内で柱の差し替えが行われたものであると推測される。2号住居跡はP1～P5の5つを主柱穴と認定した。検出された周溝に沿ってP1－P2－P3が住居跡の北側、P1－P5が住居跡の西側、P3－P4が住居跡の東側に、それぞれの壁のラインを形成する。この内側で検出されたP6～P10のうちP6はP1に隣接するが、P1にともなう補助柱穴かどうかは、これ以外に2号住居跡内で同じような柱穴の検出が見られなかったため定かではない。またP6、P7は、2号住居跡に重複する掘立柱建物跡の内部にも位置するが、それとの関係も不明である。3号住居跡はE－Wの主軸方向に沿って位置するP1、P2と、主軸上に位置するP6の3つを主柱穴と認定した。P4は住居跡の北東端部に位置するが、これが補助柱穴となるかどうかについては、同じような位置での他の柱穴の検出がみられなかったため不明である。

［周溝］　2・3号住居跡で検出された。2号住居跡では、周溝の端にそれぞれ柱穴が検出され、それを結ぶ形で周溝が作られている。それが確認された周溝はP1－P2－P3とP3－P4の2本である。P3－P4については、P4の南側にも周溝が延びていたと思われるが、その部分は削平を受けていたため定かではない。P1－P2のほぼ中央部から南に向かって周溝が分かれており、その先にはP6が存在しているものの、P6と結合するかどうかは不明である。またP1－P5については、P1から南に延びる周溝が削平によってすぐ消えておりP5と結合するかどうかは確実ではないが、主軸を挟んで対面にある東側壁際の周溝P3－P4がでその形で延びていることから、P1－P5もそれに類するものと思われる。

［埋土］　1号住居跡の埋土は、基本土層Ⅴ－3に相当する黒褐色砂質シルト土を主体とし、3号住居跡の埋土は、基本土層Ⅴ－2・3に相当する暗・黒褐色シルト土によって2層で構成されている。2号住居跡は、床面直上まで削平を受けているため詳細は不明だが、わずかに残存する埋土部分が基本土層Ⅴ－3に相当する黒褐色シルト土を主体として構成されていることから、それに準ずるものと思われる。また1・3号住居跡ともに、人為的な埋土の状況は認められない。1号住居跡の断面は、全体として凹状の堆積状況を示しており、3号住居跡の断面は、一部にカマドと地下水流によると思われる撹乱部はあるものの、全体として地形の傾斜に沿った層状の堆積状況を示していることから、どちらも自然堆積によるものと考えられる。

(2) 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は調査区南側、Ｊ４～５区とＫ４～５区にまたがる形で１棟が検出された。建物跡の周辺には１号住居跡、１号溝、３号住居跡などが位置しており、加えて建物跡の南西部は２号住居跡と重複している。その新旧関係については、建物跡を構成している柱穴の埋土が主として基本土層Ｖ－１に相当する暗褐色砂質シルト土によって構成されていることから、わずかに残存する埋土部分が基本土層Ｖ－３に相当する黒褐色シルト土を主体として構成されている２号住居跡よりも若干新しい可能性があるが、その時期や用途など推測できるような具体的な遺物などの出土が見られなかったため、詳細は不明である。

(3) １号土坑

１号土坑はＩ２区南東端、１号住居跡と４号溝に隣接する位置で１基が検出された。埋土は、基本土層Ｖ－３に相当する黒褐色砂質シルト土によってほぼ単一の土層となっており、隣接する１号住居跡の埋土の構成と相似している。このことに加え、土坑埋土内から縄文時代前期に属すると思われる深鉢片がまとまって出土したことから、１号住居跡とほぼ同時期に存在し貯蔵用などの穴として使用されていたものである可能性が考えられる。

(4) 溝跡

溝跡は調査区全体から４条が検出された。いずれの溝も耕作や暗渠などによる削平を受けており、検出状況はあまり良好とは言えない。溝跡の向きは、公共座標第X系の基線＝調査区の主軸線方向に沿っているもの（１・３号溝)、それに垂直な方向＝E－Wの軸線に沿っているもの（２・４号溝）の２つに大別することができる。溝跡が検出された位置という観点から見てみると、３号溝を除いてはいずれも調査区の南西部から検出されており、それぞれが比較的に近い位置に存在している。これについては、３号溝の東側では礫によって検出層が流されていたこと、調査区東側が地山層直上まで削平を受けていたことによると思われ、本来はその範囲にも溝の存在が想定される。溝の幅は20cm程度を平均としているが、２・４号溝は調査区地形の緩やかな傾斜に沿って、西端部へ向かって徐々に溝幅を広げて消える。深さは３号溝が最大で10cmとやや浅いものの、他は20cmもしくはそれ以上を測るものである。断面はいずれもほぼU字形を呈し、埋土はいずれも黒褐色土のほぼ単一土層で構成されている。遺物については、２号溝埋土内より土師器片・須恵器片、４号溝埋土内より剥片石器（石箆？）が出土したが、どちらも流れこみの遺物である可能性があり、真にそれぞれの遺構にともなうものかどうかは断定できない。時期については、溝内埋土の状況がいずれも黒褐色土で構成されていることと、時期を特定できるような具体的な出土遺物が少ないことから明確ではないが、４号溝についてはその東端が１号住居跡内の土坑につながっており、そこから流れた跡が見られることと、埋土とそれに含まれるもの（炭粒など）の状況が１号住居跡内の埋土とほぼ同一であることから、１号住居跡とほぼ同時期（縄文前期）のものであると思われる。

(5) 柱穴状土坑

計51基を検出した。検出された位置は４－５区にほぼまとまっており、Ｄ４－５区南側を初めとしてＪ４－５区にわたっている。その中でも調査区中央部（Ｅ４－５区～Ｈ４区)、１・３号溝の周辺に検出がほぼ集中している。P46～P51については、掘立柱建物跡内やそれに近接している位置にあるが、関連は不明である。平面形はほぼ円形もしくは楕円形を呈するが、規模は径が10～60cm、深さは５～50cmとかなりばらつきが大きい。埋土は、いずれも地山層土をまばらに含む黒褐色土によって構成されている。遺物については、P47の埋土内下部から完形の土師器坏が出土しているが、流れこみの遺物である可能性がある。掘立柱建物跡などの一部の可能性もあるが、柱筋などの明確なプランを確認することはできなかった。

2　出土遺物について

今回の調査で出土した遺物は、縄文土器・土師器・須恵器・石器である。ここでは、縄文土器・土師器・須恵器についてをまとめる。

(1)　縄文土器

今回の調査で出土した縄文土器のうち、図示したものは遺構内では9点、遺構外で3点である。出土の状況については、いずれも破片でのものであるが、1号土坑からはややまとまった数量で出土した。ただし、個体に復元できたものはない。1号土坑より出土した深鉢片については、口縁部に連続する押圧文が見られるものと、胴部破片に羽状縄文が施文されているものとの2つに大別することができる。これらについては、文様の特徴から縄文前期初頭の上川名2式、もしくは大木1式に属するものと思われる。3号住居跡より出土した深鉢片については、文様は見られないものの外面に化粧粘土が施されていることから縄文晩期後葉の大洞A式、もしくは大洞A′式に属するものと思われる。1号住居跡より出土した深鉢片は、その文様の特徴や胎土の状態などから縄文中期に属すると思われるが、この1点のみの出土であるために詳細は不明である。これ以外の土器片については、小破片であったり施文が見られるだけという状況であるために、形式などを特定することはできなかった。

(2)　土師器

今回の調査で出土した土師器のうち、図示したものは遺構内から24点、遺構外から22点、計46点である。その多くは破片での出土である。これを機種別にみてみると、坏11点、甕34点、壺1点となる。ここでは製作に際しては、ロクロ使用のものと未使用のもの（もしくはそれが判別できないもの）との2つに大別し、さらに外面・内面での調整の有無や調整技法によってまとめを試みる。器高については破片での出土が多く、全体の大きさがわかるものが少ないことから、ここでは扱わないこととする。

[坏]　坏は11点を図示したが、これについてのまとめは以下のようになる。なお、底部に台が付いている破片が2点含まれている。

（製作）

1：製作に際してロクロを使用するもの　→　7点

2：製作に際してロクロを未使用のもの　→　4点

（調整技法）

1：外面にロクロナデ調整が施されているもの　→　6点

2：外面にそれ以外の調整が施されているもの　→　2点（ヘラケズリ・ヘラナデ　各1）

3：外面に調整した痕が見られないもの　→　3点

4：内面に黒色処理が施されているもの　→　5点

5：内面にそれ以外が施されているもの　→　3点（いずれもロクロナデ）

6：内面に調整した痕が見られないもの　→　3点

（底部の切り離し技法）

1：静止糸切り　→　2点

2：回転糸切り　→　2点

[甕]　甕は今回の調査で出土した土師器の大半を占めている。そのうち34点を図示したが、そのまとめは以下のようになる。

（製作）

1：製作に際してロクロを使用するもの　→　21点

2：製作に際してロクロを未使用のもの　→　13点

（調整技法）

1：外面にロクロナデ調整が施されているもの　→　19点（同時にタタキ目を持つもの：3）

2：外面にそれ以外の調整が施されているもの　→　4点（ヘラナデ、ヘラゲズリ、ミガキ　各1）

3：外面に調整した痕が見られないもの　→　11点

4：内面に黒色処理が施されているもの　→　9点

5：内面にそれ以外が施されているもの　→　12点（ロクロナデ：7、ヨコナデ：5、カキ目：4）

6：内面に調整した痕が見られないもの　→　13点

（底部特徴）

1：静止糸切り or 緩い回転糸切り痕　→　1点

2：木葉痕　→　2点

［壺］　壺は1点出土している。内面にはカキ目が見られ、煤が付着している。

(3) 須恵器

今回の調査で出土した須恵器のうち、図示したものは遺構内15点、遺構外8点、計23点である。そのほとんどが破片での出土である。器種別に見てみると、坏11点、甕8点、大甕1点、壺3点となる。ここでは外面・内面での調整の有無や調整技法によってまとめを試みる。器高については破片での出土が多く、全体の大きさがわかるものが少ないことから、土師器のまとめと同様にここでは扱わないこととする。

［坏］　坏は今回の調査で出土した須恵器の半分近くを占めており、そのうち11点を図示した。ほぼ完形のものが1点出土している。

（調整技法）

1：外面にロクロナデ調整が施されているもの　→　10点

2：外面に調整した痕が見られないもの　→　1点

3：内面にロクロナデ調整が施されているもの　→　11点

（底部特徴）

1：回転糸切り　→　2点

2：線刻文字　→　1点（「田」）

［甕］　甕は今回の調査で出土した須恵器の約4割を占めており、そのうち8点を図示した。

（調整技法）

1：外面にロクロナデ調整が施されているもの　→　4点

2：外面にそれ以外の調整が施されているもの　→　1点（弱いタタキ）

3：外面に調整した痕が見られないもの　→　2点

4：内面にロクロナデ調整が施されているもの　→　5点（同時にヨコナデを持つもの：1）

5：内面にそれ以外の調整が施されているもの　→　2点（カキ目）

6：その他　→　1点（外面：赤みがかっている、内面：灰白色）

（底部特徴）

1：静止糸切り　→　1点

[大甕]　大甕は1点が出土している。底部の破片資料のみで、外面にはタタキが施されている。外面・内面に釉が付着している。また焼きの際に使用した支えの石が、そのまま付着している。

[壺]　壺は3点が出土している。いずれも文化課トレンチ埋土内からの出土である。

（調整技法）

1：外面にロクロナデ調整が施されているもの　→　2点

2：外面にそれ以外の調整が施されているもの　→　1点（タタキ）

3：内面に調整が施されているもの　→　2点（カキ目、ヨコナデ　各1）

（底部特徴）

1：釉の付着・台付き　→　1点

(4)　線刻文字について

今回の調査において、2号住居跡埋土内から出土した須恵器準完形坏の底面に、「田」という文字が刻まれていた。『土師器・須恵器の知識』（玉口時雄・小金井靖、東京美術、1984）によれば、これは焼成前に箆状の工具などを用いて刻書したもので、「線刻文字」「刻書文字」「箆書文字」などと呼ばれるが、ここでは「線刻文字」で統一する。上記文献によれば、土師器・須恵器の線刻文字には次のような種類が見られる。

1：**十二支に関するもの**（「申」など）

2：**人名に関するもの**（「麻呂」「上福麻」「子乙」「君」など）

3：**仏教関係**（「大佛」「寺」「浄气」など）

4：**神道関係**（「神」「宮」など）

5：**自然地形**（「山」「川」など）

6：**地名に関するもの**（「下総国□」「大井」など）

7：**器物を示すもの**（「□椀一□」「大刀自」など）

8：**季節を表わすもの**（「秋」など）

9：**色名を記すもの**（「赤」など）

10：**数字に関するもの**（「六」「七」「九」「十」「万」など）

11：**人に関するもの**（「人」など）

12：**農耕関係**（「田」など）

13：**大きさを表わすもの**（「大」「中」「小」など）

14：**施設に関するもの**（「井」など）

15：**吉祥語句**（「福」「勝」など）

16：**植物関係**（「木」など）

17：**1字**（「亦」「仲」「下」「了」「文」「主」「住」「曾」など）

18：**2字**（「専司」など）

19：**片仮名**（「メ」「リ」「ヲ」など）

20：**窯印もしくは記号**（「×」「－」など）

なお上記の番号は、便宜上筆者が付記したものである。また、岩手県内での線刻土器（須恵器）の出土例としては、次のようなものがある。

2の「君」：水沢市林前遺跡より出土の坏

3の「佛」：北上市高前壇遺跡より出土の盤（1981）、安代町上の山遺跡より出土の盤（1983）

13の「大」：水沢市胆沢城跡より出土の甕（1986)、江刺市瀬谷子古窯跡より出土の甕（1981）

15の「勝」：水沢市林前遺跡より出土の坏

18の「家主」：紫波町杉の上遺跡より出土の坏（1984）

20の「×」：平泉町瀬原Ⅰ遺跡より出土の坏（1994)、水沢市白井坂Ⅰ・Ⅱ遺跡より出土の坏（1992）

堀切遺跡で今回出土した須恵器坏の線刻文字「田」については、先例にしたがえば12の「農耕関係」に属すると思われるが断定はできない。

3　おわりに

今回の調査で検出した遺構は、竪穴住居跡３棟、掘立柱建物跡１棟、土坑１基、溝跡４条、柱穴状土坑51基であり、出土した遺物は土師器・須恵器をその主体とし、縄文土器、石器がこれに加わっている。このことから、堀切遺跡は縄文時代から人々が居住していたが、主体となる年代は検出された遺構の状況や出土した遺物の量などから古代、特に平安時代（９世紀ごろ）を主体とする集落遺跡であったことが明らかとなった。また、線刻文字の見られる須恵器などの出土から、少なくとも文字を読み、書き、理解できる人々が集落を形成し生活を行っていた地域の一部であると思われる。

調査区の範囲がやや狭く削平などを受けていたこともあり、今回検出された遺構や出土した遺物だけをもって、集落構成や遺構の性格などについて言及することはやや不十分であると思われるが、堀切遺跡の所在する一関市北東部においては古代に属する遺跡の調査例がやや少ないため、今回の調査結果はこの地域における歴史解明のための資料を提供するものと思われる。今回発掘することのなかった調査区の外側に広がっている河岸段丘部にも、同様の遺構などが存在している可能性があり、それらの調査などが行われていくことによって、さらに堀切遺跡の様相も明らかになっていくことと思われる。

最後に筆者の勉強不足から、調査時の観察・記録・室内整理の進め方等に不備が多くあり、本遺跡の内容を十分に報告することができなかったことを、ここに深くお詫び申し上げます。

また、この場をお借りして本報告書作成に対し、多大なご協力をいただいた一関地方振興局一関農村整備事務所、一関市教育委員会、財団法人水沢文化振興財団埋蔵文化財センター、一関市を始めとする野外作業員の方々、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターおよび多くの室内作業員の方々に、あらためて感謝いたします。

＜引用・参考文献＞

文化庁文化財保護部　1984『全国遺跡地図　岩手県』

岩手県教育委員会　1998『岩手県埋蔵文化財包蔵地一覧』　一関市

岩手県教育委員会　1979『東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書　Ⅰ』　第33集

岩手県教育委員会　1980『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書　Ⅴ』　第54集

一関市史編纂委員会　1978『一関市史　第１巻通史』　一関市

一関市教育委員会　1977『庄司合遺跡発掘調査概要（第二次調査）』

一関市教育委員会　1977『厳美渓遺跡緊急発掘調査概報（厳美渓遺跡Ｂ地区）』

一関市教育委員会　1977『谷起島遺跡第一次発掘調査報告書（LOC.A）』

一関市教育委員会　1982『第４次谷起島遺跡発掘調査概報告』

一関市教育委員会　1984『孤禅寺城跡・大平遺跡　一関地区遊水地関連埋蔵文化財発掘調査概報』

一関市教育委員会　1985『大平遺跡　一関地区遊水地関連埋蔵文化財発掘調査報告書』

江刺市史編纂委員会　1981『江刺市史　第５巻－資料編・考古資料－』

北上市教育委員会　1981『高前壇遺跡調査概報』　北上市文化財調査報告書第32集

水沢市教育委員会　1985『胆沢城跡－昭和60年度発掘調査概報－』

水沢市教育委員会　1995『水沢遺跡群範囲確認調査　平成６年度発掘調査概報』

宮古市教育委員会　1989『千鶏遺跡　昭和62年度発掘調査報告書』

矢巾町教育委員会　1984『徳丹城跡発掘調査概報－昭和59年度－』

岩手県文化振興事業団　1997『岩手県埋蔵文化財発掘調査略報（平成９年度分）』　第282集

岩手県文化振興事業団　1999『岩手県埋蔵文化財発掘調査略報（平成10年度分）』　第311集

岩手県文化振興事業団　2000『岩手県埋蔵文化財発掘調査略報（平成11年度分）』　第340集

岩手県埋蔵文化財センター　1983『上の山Ⅶ遺跡発掘調査報告書』（財）岩埋文調査報告書　第60集

岩手県埋蔵文化財センター　1984『滝沢城跡発掘調査報告書』（財）岩埋文調査報告書　第81集

岩手県埋蔵文化財センター　1992『鼻館跡発掘調査報告書』（財）岩埋文調査報告書　第171集

金子佐知子・晴山雅光・高橋與右衛門　1999『佐野原遺跡発掘調査報告書』（財）岩埋文調査報告書　第327集

菊地榮壽・小笠原健一郎　1999『本宮熊堂Ｂ遺跡第４次・鬼柳Ａ遺跡第４次発掘調査報告書』（財）岩埋文調査報告書　第308集

杉沢昭太郎・川村　均　1997『白井坂Ⅰ・Ⅱ遺跡発掘調査報告書』（財）岩埋文調査報告書　第248集

中村直美　1999『庫理遺跡発掘調査報告書』（財）岩埋文調査報告書　第302集

中村直美　1999『大向上平遺跡発掘調査報告書』（財）岩埋文調査報告書　第335集

花坂正博・溜浩二郎　1997『瀬原Ⅰ遺跡第２次・３次発掘調査報告書』（財）岩埋文調査報告書　第257集

晴山雅光・菊池貴広　1999『細田遺跡発掘調査報告書』（財）岩埋文調査報告書　第283集

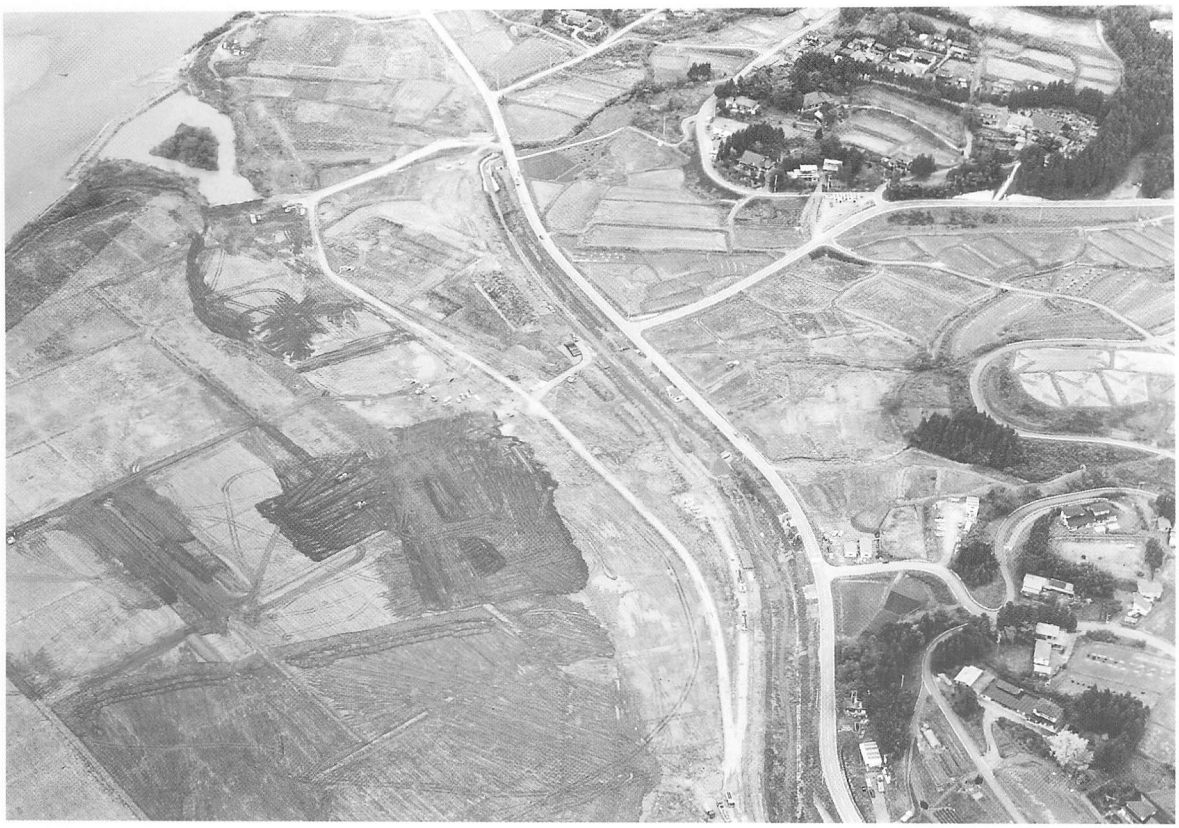
宮本節子　1999『相ノ沢遺跡発掘調査報告書』（財）岩埋文調査報告書　第332集

岩手県南史談会　1994『研究紀要資料集（その一）復刊紀要』

小田野哲憲　他　1982『岩手の土器－県内出土資料の集成－』　岩手県立博物館

大塚初重・戸沢充則　1996『最新　日本考古学用語辞典』　柏書房
加藤晋平　他　1981『縄文文化の研究 第3巻 縄文土器Ⅰ』　雄山閣
加藤晋平　他　1981『縄文文化の研究 第4巻 縄文土器Ⅱ』　雄山閣
加藤晋平　他　1981『縄文文化の研究 第8巻 生活・社会』　雄山閣
小林達夫　1994『縄文土器の研究』　小学館
小林達夫・小川忠博　1989『縄文土器大観1　草創期　早期　前期』　小学館
下中邦彦　1984『やきもの事典』　平凡社
原口正三　1979『日本の原始美術　4　須恵器』　講談社
菱田哲郎　1996『歴史発掘 第10巻 須恵器の系譜』　講談社
麻生　優・白石浩之　1984『考古学シリーズ14　縄文土器の知識Ⅰ 草創・早・前期』　東京美術
藤村東男　1984『考古学シリーズ15　縄文土器の知識Ⅱ 中・後・晩期』　東京美術
玉口時雄・小金井靖　1984『考古学シリーズ17　土師器・須恵器の知識』　東京美術

写 真 図 版



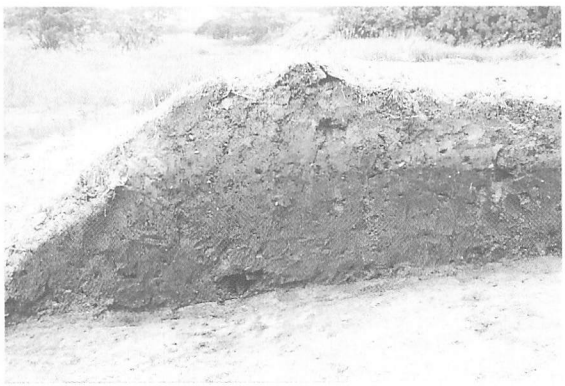
調査区遠景（南から）

調査区全景（空中写真）

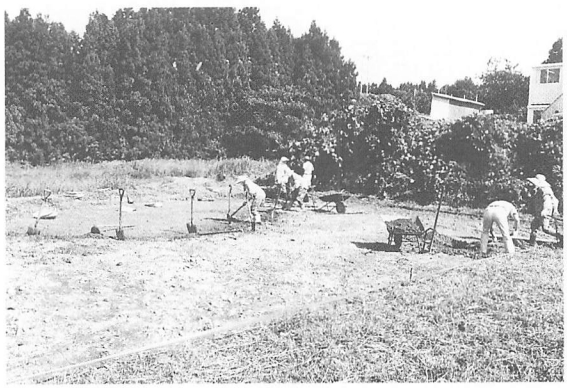
写真図版１　調査区遠景・全景

調査開始時全景（東南から）

文化課トレンチ



基本土層

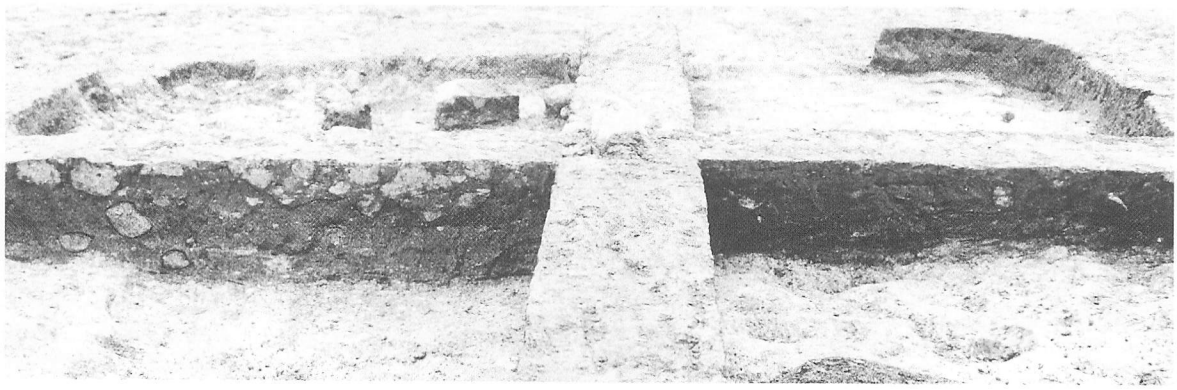


作業風景

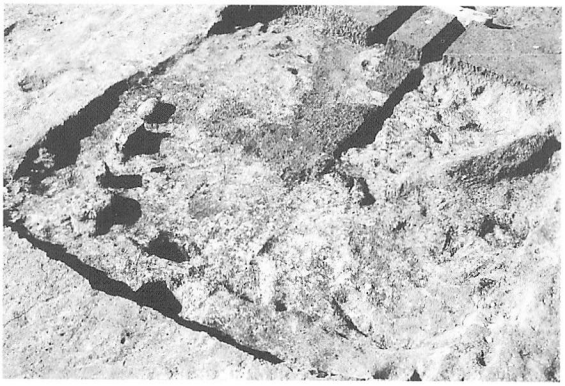
遺物出土状況

写真図版２　調査開始時・作業風景・基本土層

全景（南から）



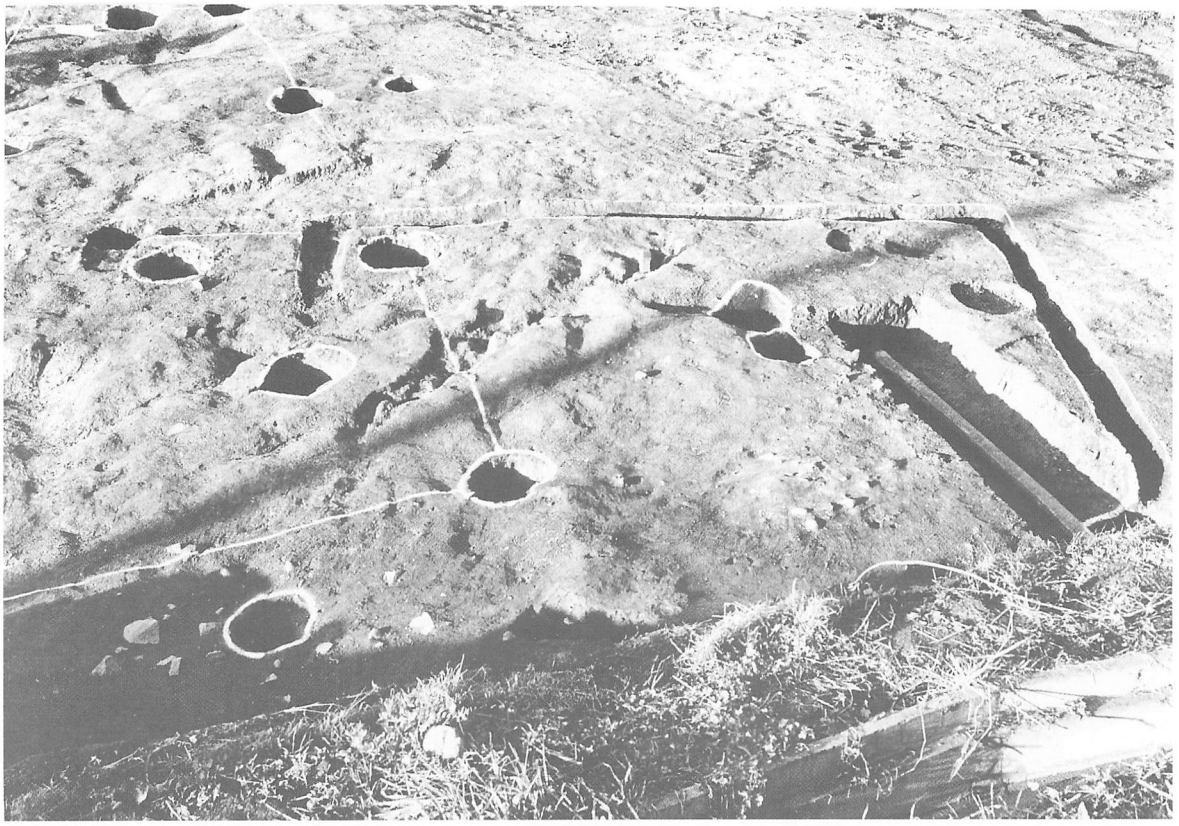
土層断面（北から）



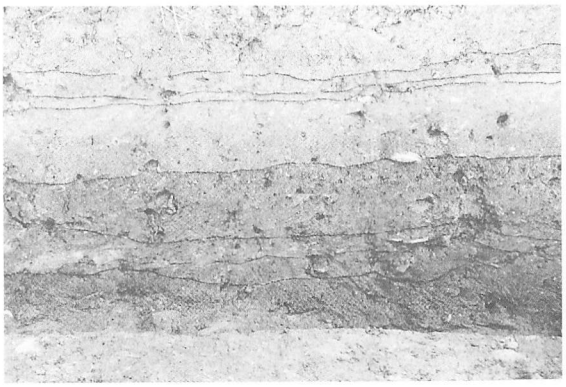
炭化物検出状況（北東から）

全景（東から）

写真図版３　１号住居跡



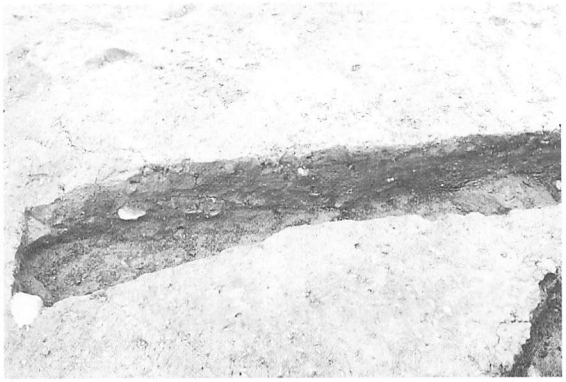
全景（南から）



土層断面

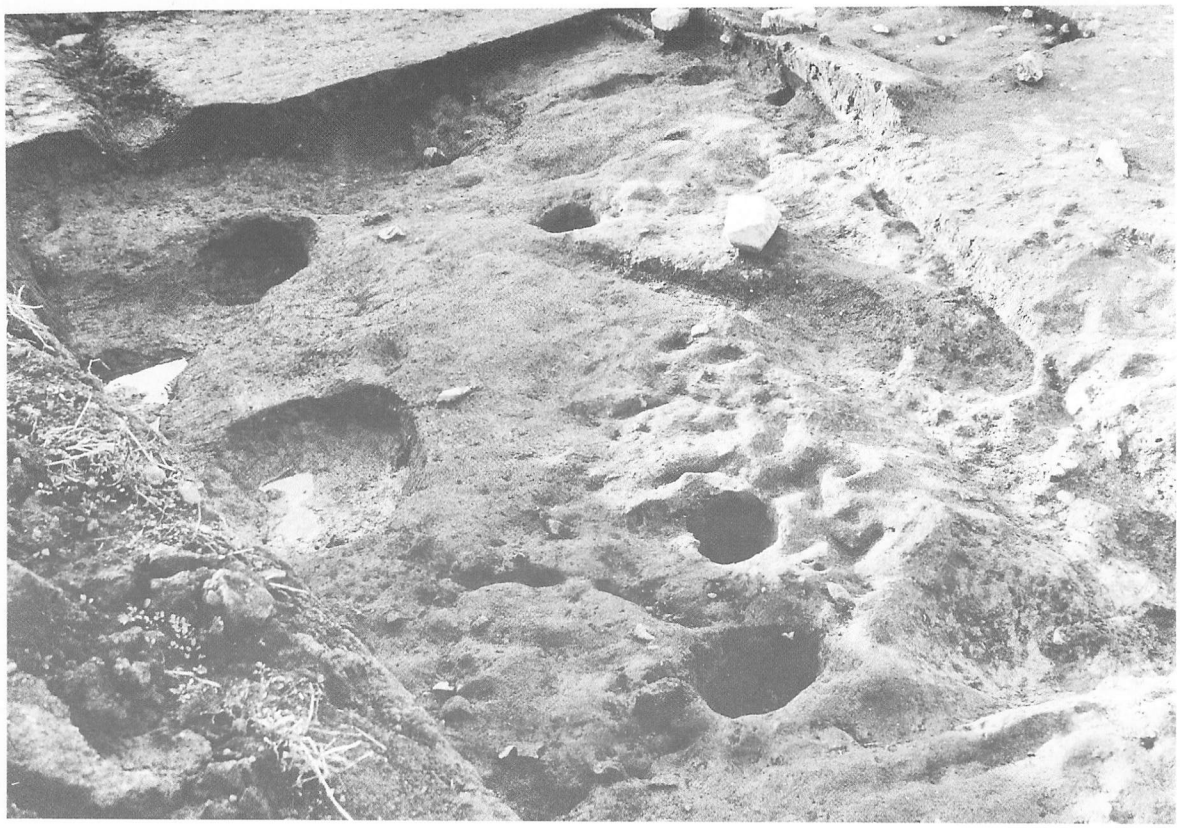
遺物出土状況

焼土全景

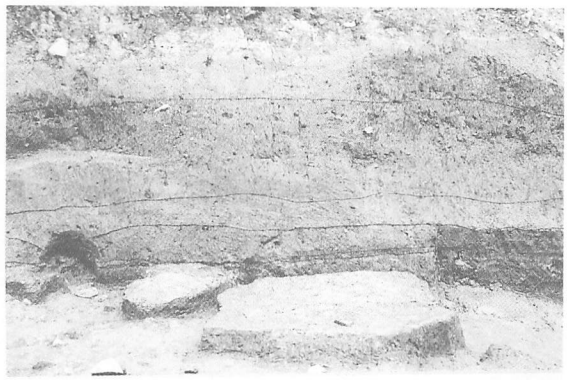


焼土断面

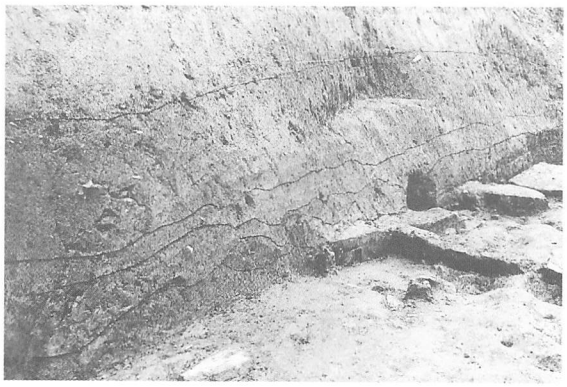
写真図版４　２号住居跡



全景（東から）



断面①



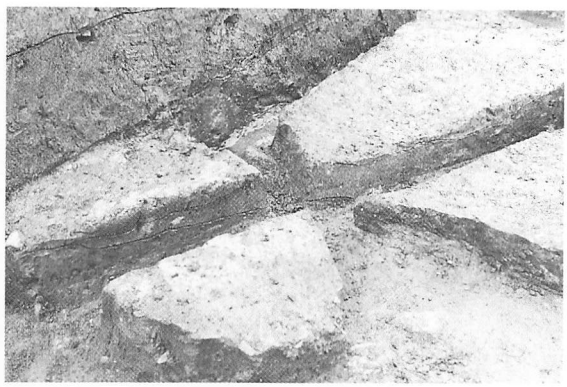
断面②

カマド（？）断面

カマド（？）全景

写真図版５　３号住居跡（１）

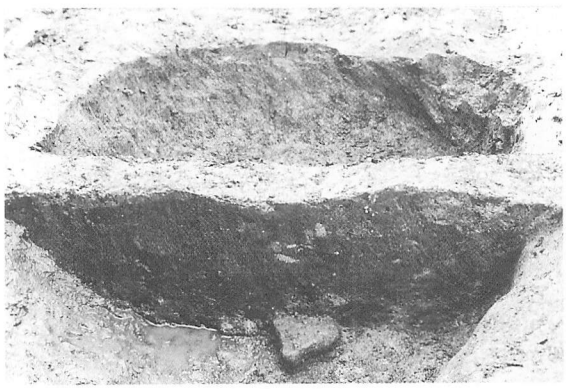
焼土全景



焼土断面

炭化物検出状況

遺物出土状況



焼土下ピット　断面

焼土下ピット　全景

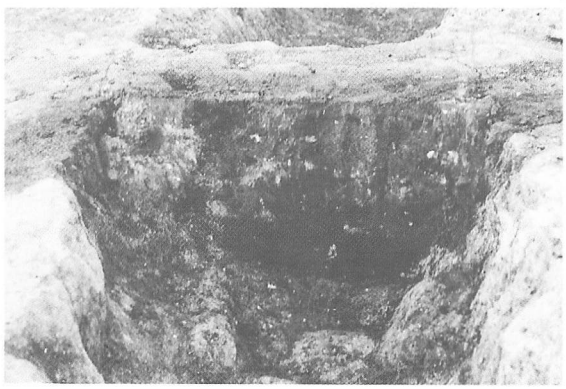
１号土抗　断面

１号土抗　全景

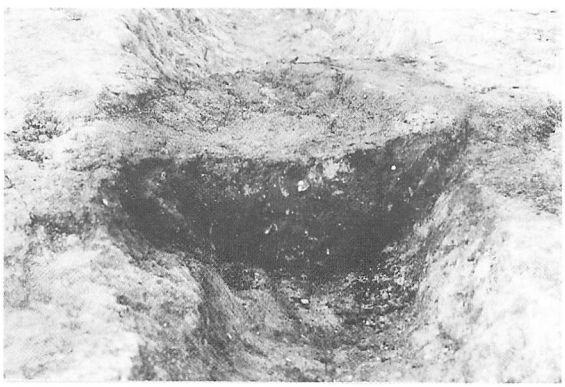
写真図版６　３号住居跡（２）・１号土坑

掘立柱建物跡　全景（南から）

1号溝全景（南から）

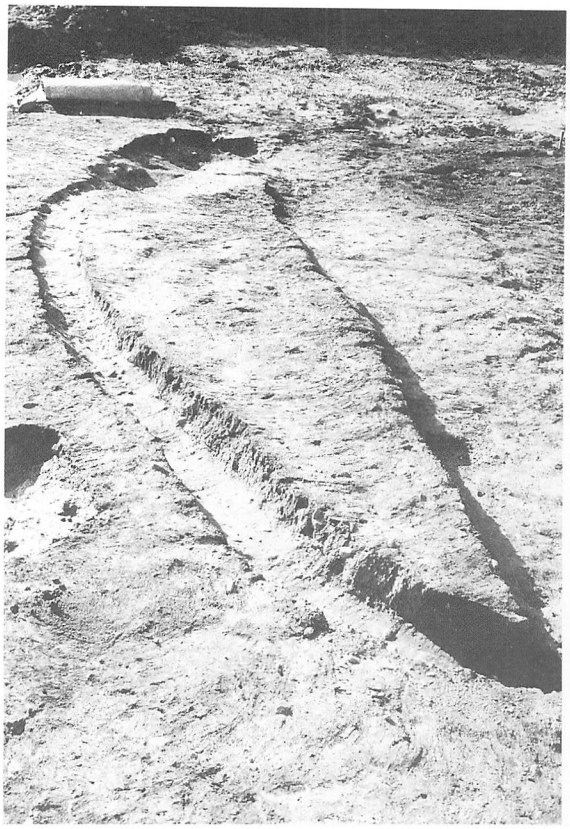


1号溝　断面①

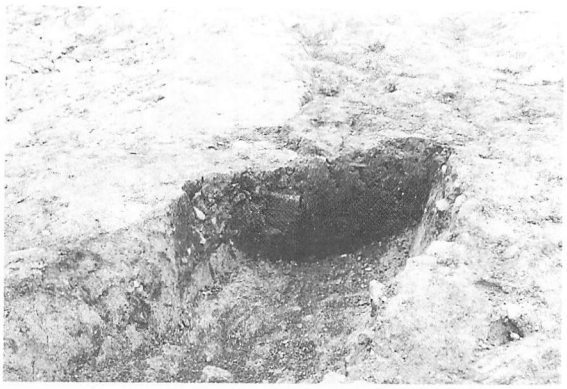


1号溝　断面②

写真図版7　掘立柱建物跡・1号溝



2号溝　全景（東から）



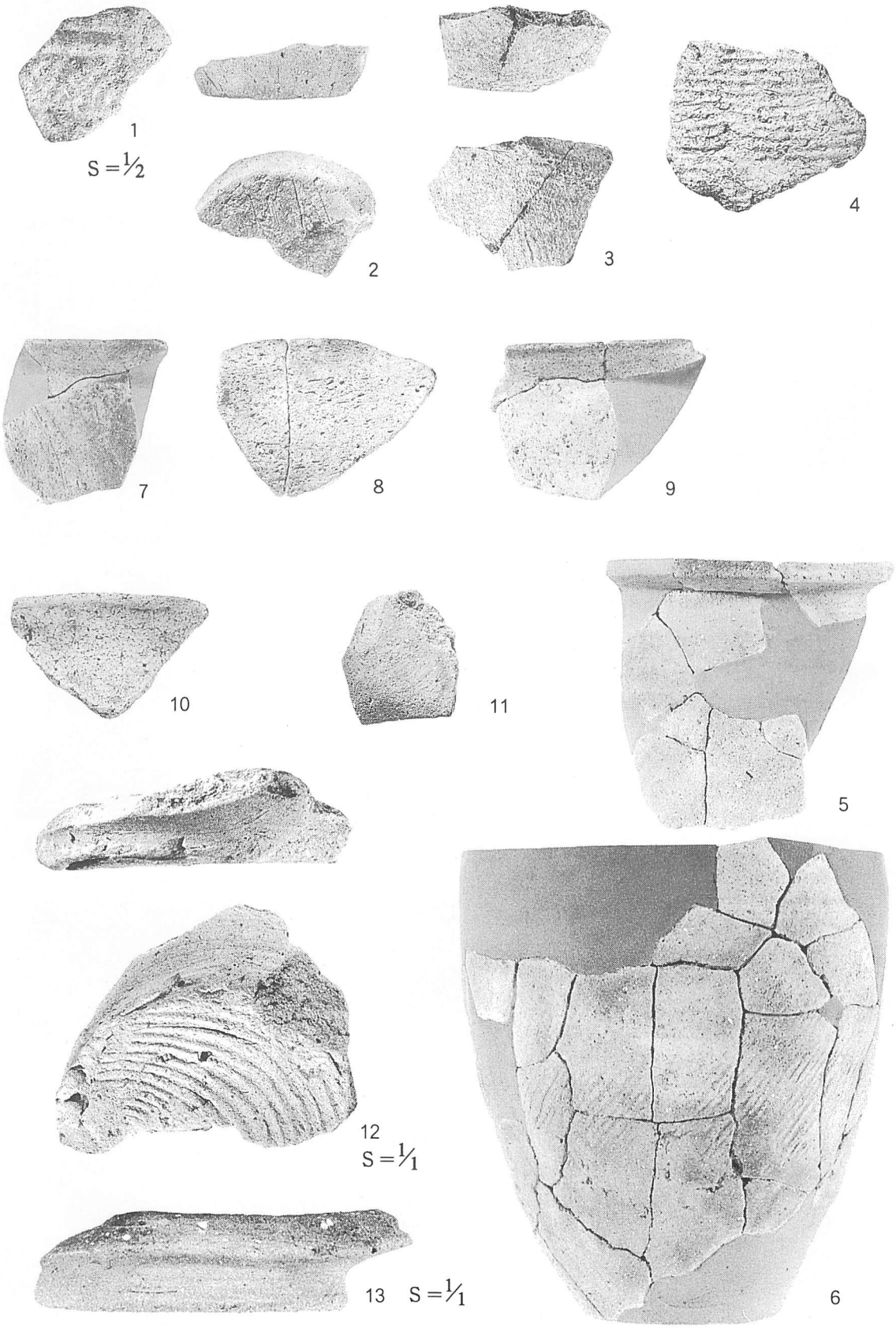
2号溝　断面①

2号溝　断面②

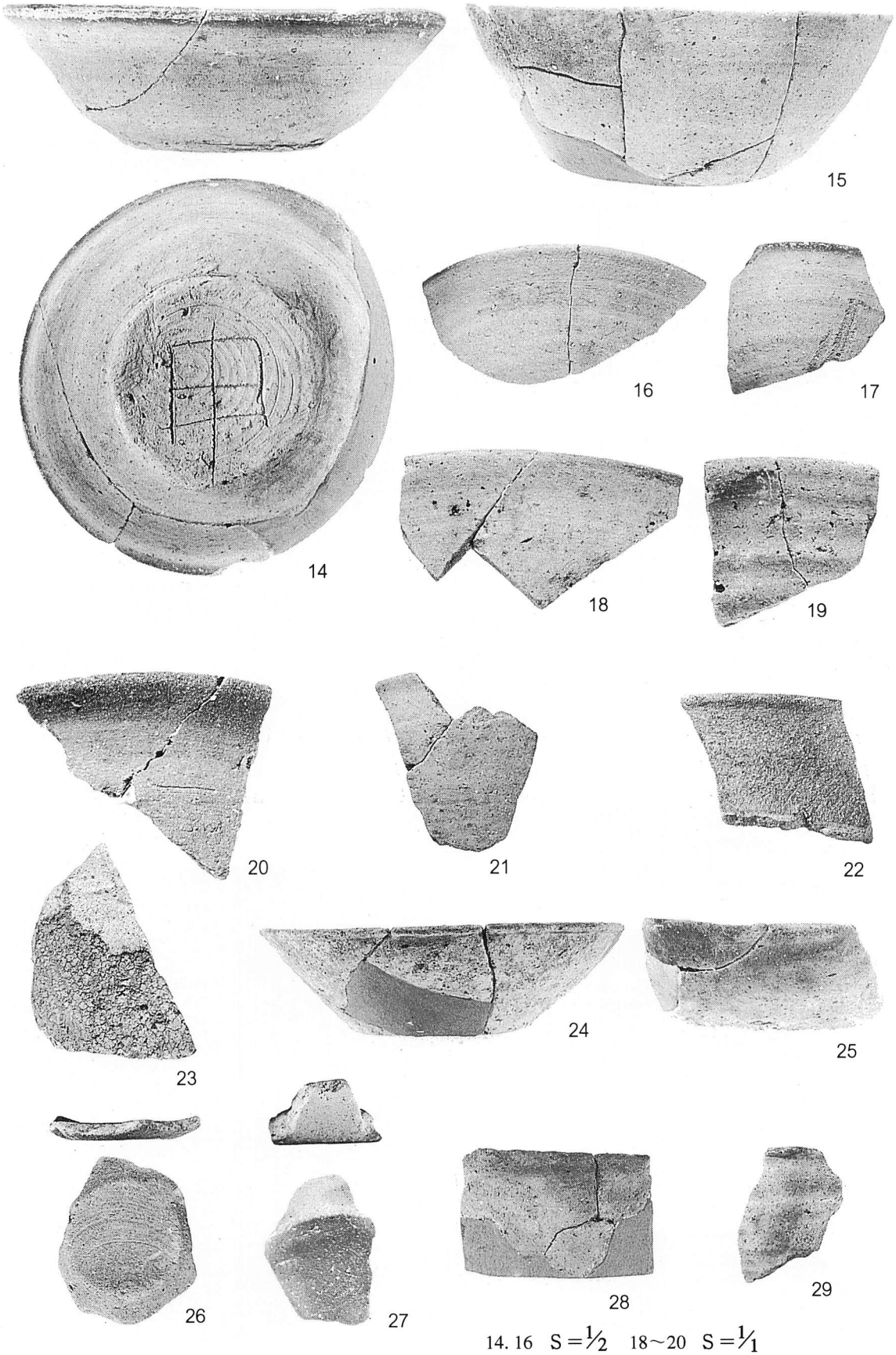
3号溝　全景（南から）

4号溝　全景（西から）

写真図版８　２～４号溝

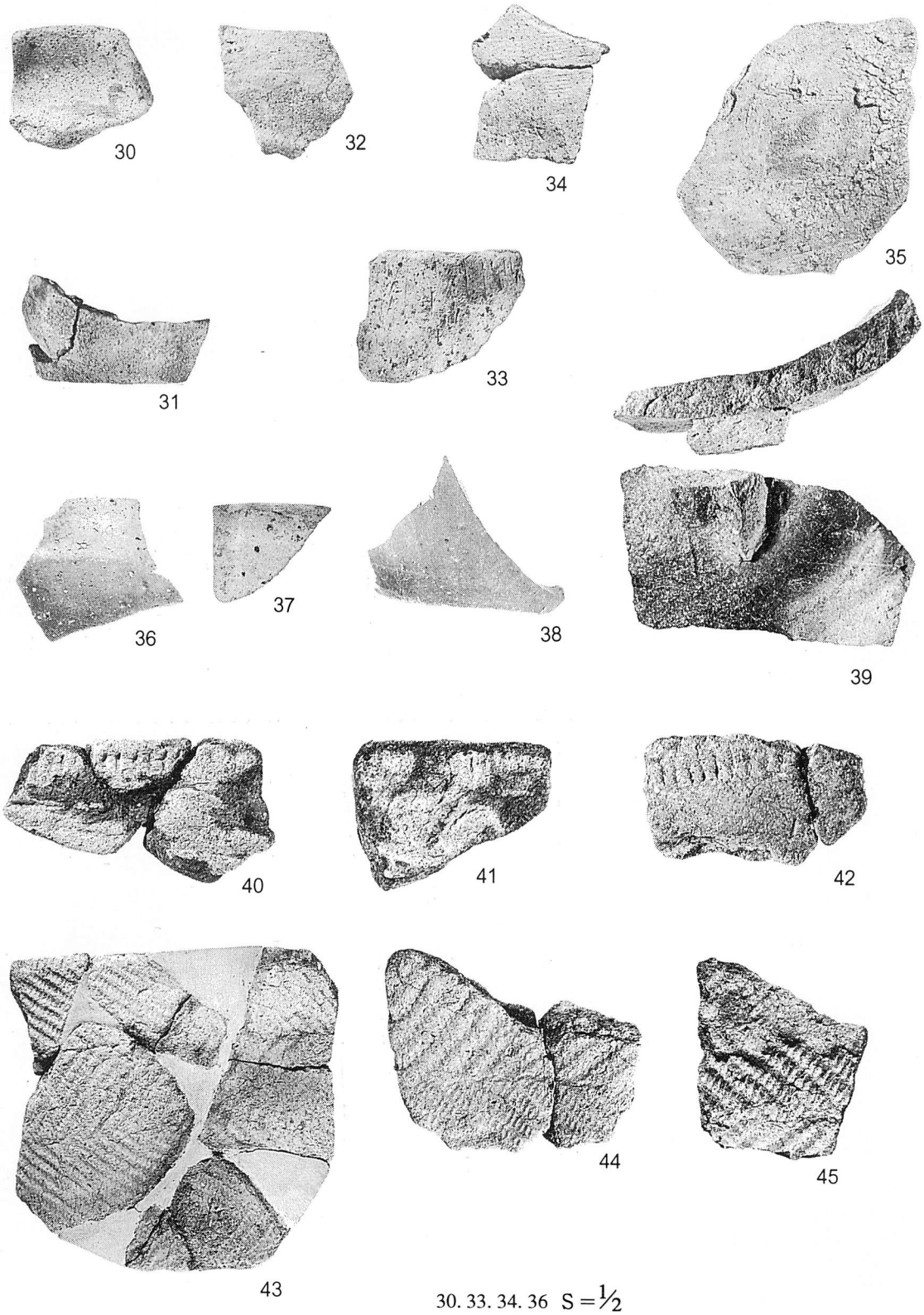


写真図版９　遺構内出土遺物（１）



14. 16　S＝1/2　18～20　S＝1/1

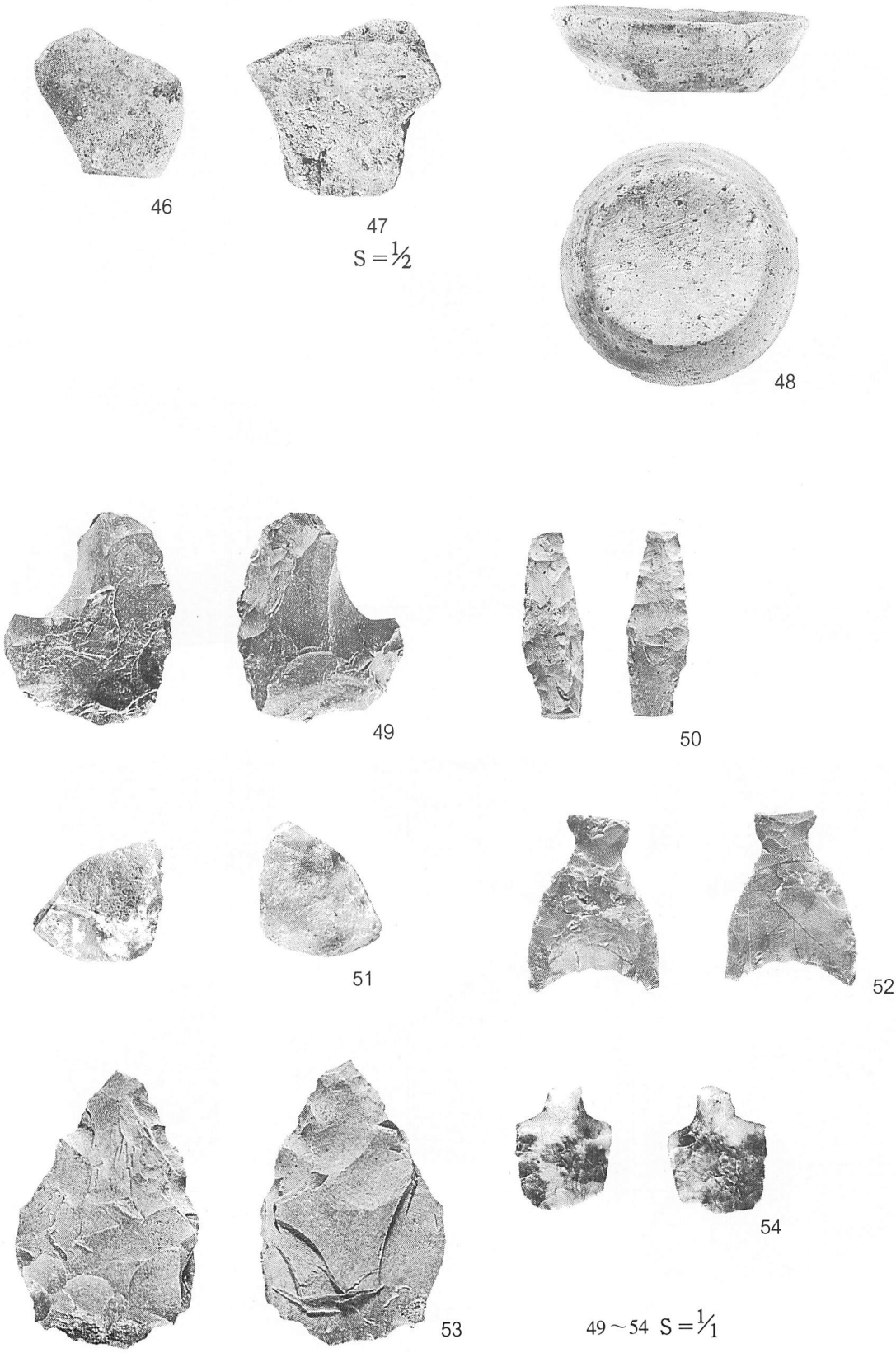
写真図版10　遺構内出土遺物（２）



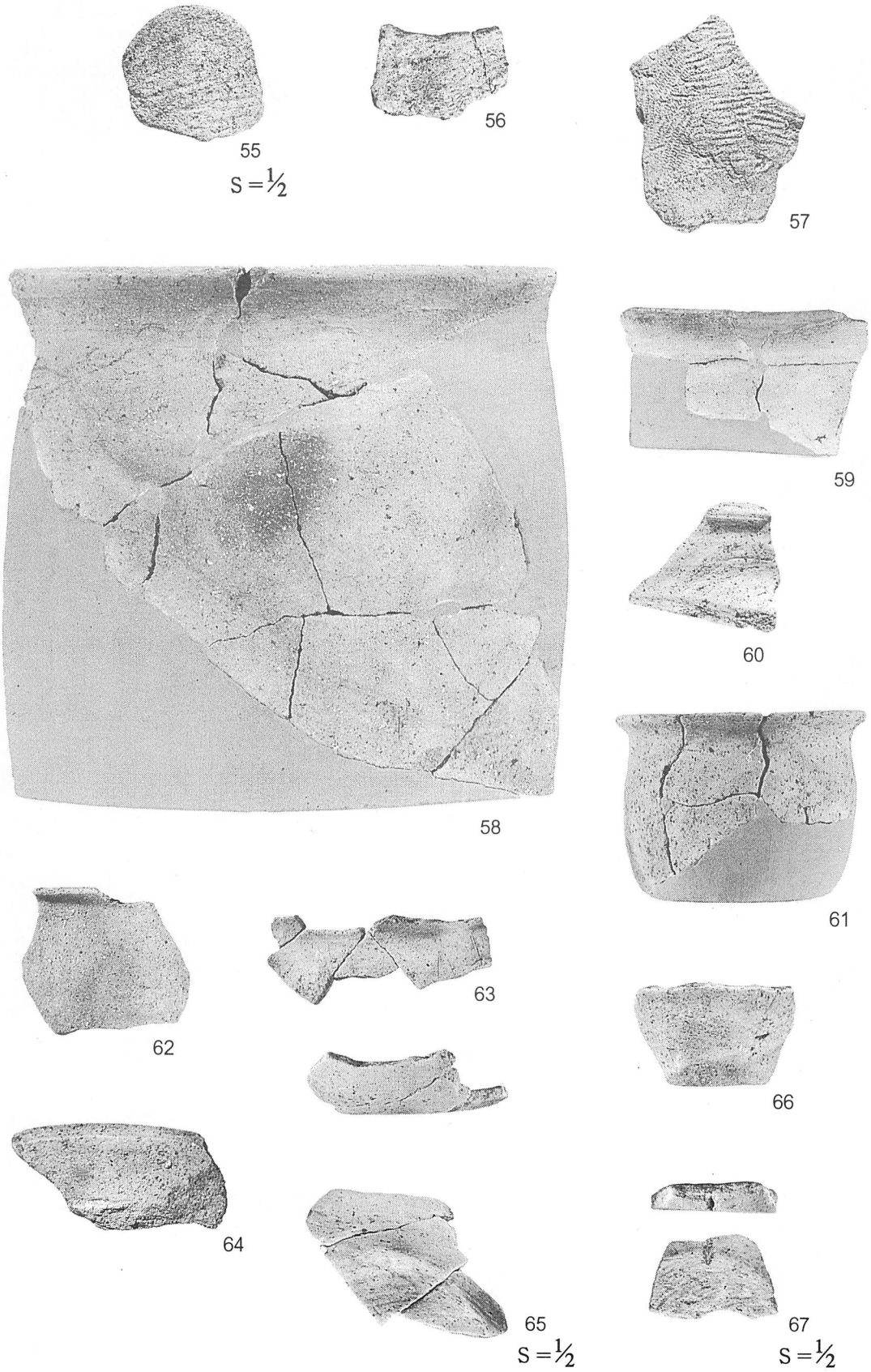
30. 33. 34. 36　S＝½

35.　S＝¼

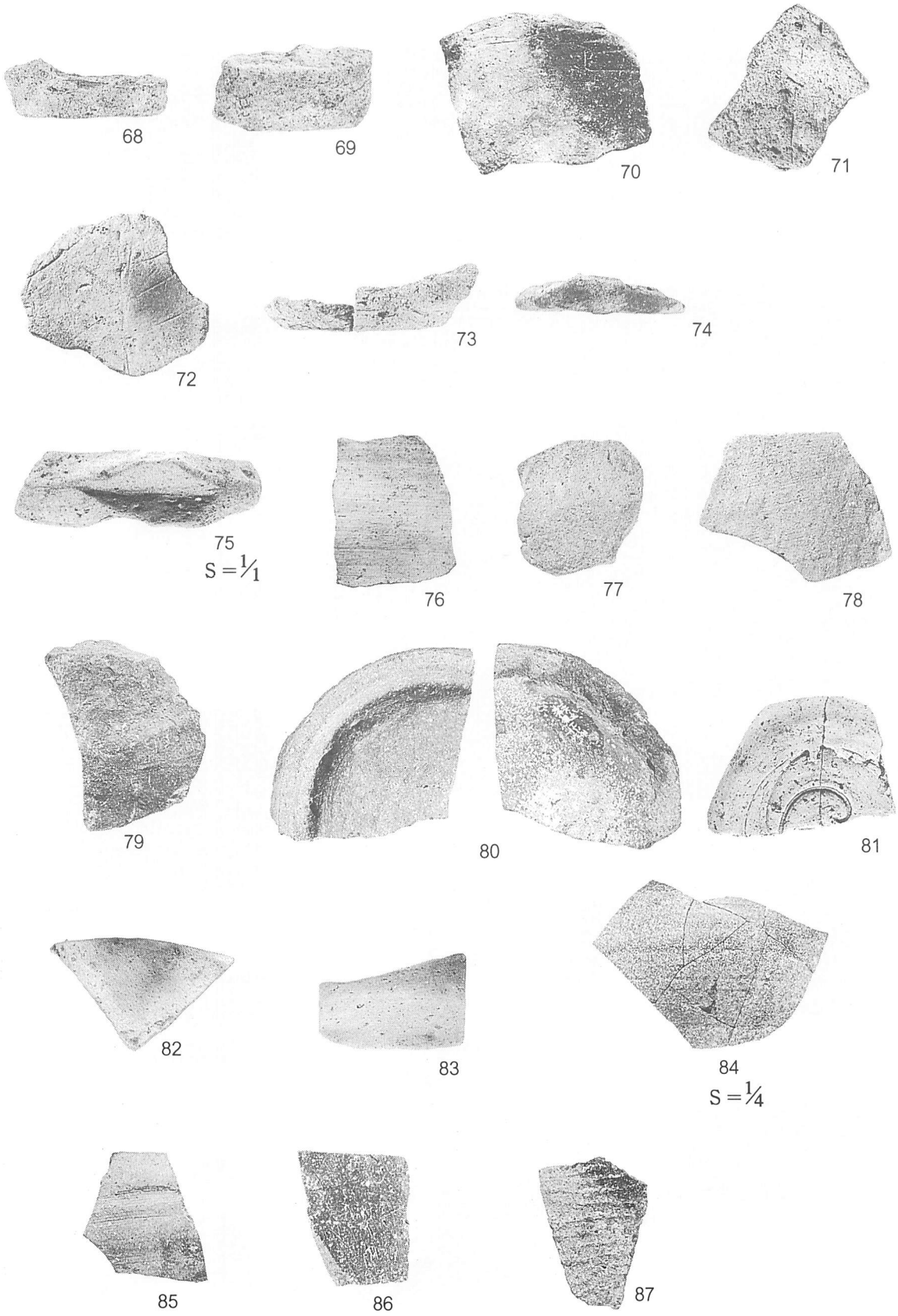
写真図版11　遺構内出土遺物（３）



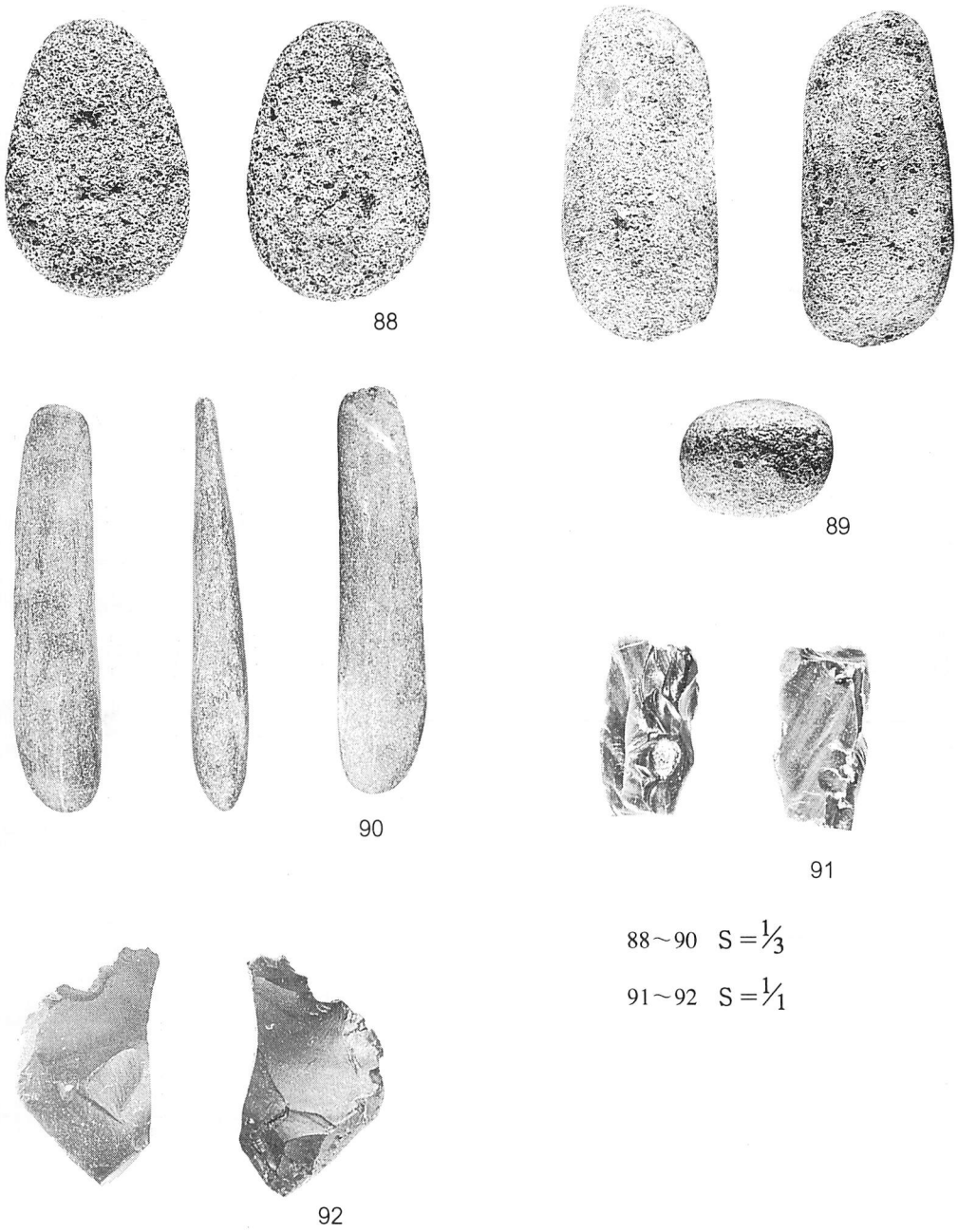
写真図版12　遺構内出土遺物（４）



写真図版13　遺構外出土遺物（１）



写真図版14　遺構外出土遺物（２）



88～90　S＝1/3

91～92　S＝1/1

写真図版15　遺構外出土遺物（３）

報告書抄録

ふりがな	ほりきりいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書名	堀切遺跡発掘調査報告書
副書名	担い手育成基盤整備事業一関第3地区関連調査
巻次	
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第364集
編著者名	小野寺正之　佐藤淳一
編集機関	財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
所在地	〒020-0853　岩手県盛岡市下飯岡11-185　　TEL　019(638)9001
発行年月日	西暦1999年11月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
堀切遺跡（ほりきりいせき）	岩手県一関市舞川字堀切（いわてけんいちのせきしまいかわあざほりきり）7－6ほか	03209	NE87-0182	38度57分49秒	141度10分14秒	1999.10.1～11.5	1,000㎡	「担い手育成基盤整備」事業に伴う緊急発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
堀切遺跡	集落跡	縄文時代 平安時代	竪穴住居跡　3棟 掘立柱建物跡　1棟 溝状遺構　4本 土坑　1基 焼土	縄文土器（前期～晩期） 土師器 須恵器 石器 剥片石器	

財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員

所長	伊藤民也
副所長	櫻田次男

［管理課］

課長	川浪清徳	嘱託	千葉芳夫
課長補佐	山崎善光	〃	藤島恵子
主査	立花多加志	〃	新田トヨ
主事	日影睦夫	〃	佐々木光恵

［調査第一課］

課長	佐々木勝
課長補佐	佐々木清文
主任文化財専門調査員	小山内透
文化財専門調査員	赤石登
〃	吉田充
〃	小原眞一
〃	小笠原健一郎
〃	金野進
〃	鳥居達人
〃	金子昭彦
〃	東海林淳美
〃	阿部勝則
〃	羽柴直人
〃	小野寺正之
〃	菅原靖男
〃	長村克稔
〃	溜浩二郎
〃	菊池貴広
〃	村上拓
〃	本多準一郎
〃	北村忠昭
〃	丸山浩治
〃	村木敬
期限付専門職員	小林弘卓
〃	江藤淳
〃	藤原賢徳（6月退職）
〃	菊池賢
〃	井上信介
〃	川又晋
〃	吉田真由美
〃	北田博義（11月退職）

［調査第二課］

課長	高橋與右衛門
課長補佐	中川重紀
主任文化財専門調査員	高橋義介
〃	金子佐知子
文化財専門調査員	中田迪
〃	工藤道孝
〃	古舘貞身
〃	阿部眞澄
〃	松尾芳幸
〃	工藤徹
〃	前田稔
〃	岩渕計
〃	早坂悟
〃	濱田宏
〃	安藤由紀夫
〃	高木晃
〃	千葉正彦
〃	佐藤淳一
〃	半澤武彦
〃	杉沢昭太郎
〃	中村直美
〃	星雅之
期限付専門職員	鈴木聡（12月退職）
〃	吉川徹
〃	北田勲
〃	吉田里和
〃	原美津子
〃	齋藤麻紀子
〃	島原弘征

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 364集

堀切遺跡発掘調査報告書

担い手育成基盤整備事業一関第 3 地区関連遺跡発掘調査

印刷　平成13年 3 月 9 日
発行　平成13年 3 月16日

発　　行　㈶　岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020-0853　盛岡市下飯岡11－185
T　E　L　019-638-9001
F　A　X　019-638-8563
印　　刷　㈲　博光出版
〒020-0122　盛岡市みたけ 5 丁目 8 番43号
T　E　L　019-641-0671

©(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター2000